

キ指示ヲナス

午後沼田部隊上陸ノ筈ナリ、夜、昨夜ニ増シテ空襲^{*}賑カナリ

◇十月三日 曇

図上戦術ノ計画ニ殆ト終日ヲ費ス

終日重砲声ヲ聞ク、昨日頃ヨリ第一線兵団ノ戦況予想ヨリ有利ニ進展、タメニ師団集結地ノ移動期ヲ早メラル、夜歩兵第65聯隊主力上陸ス

此ノ両三日ノ待機ニテ旅団司令部モ聯隊モ大部整頓ノ観アリ、歩兵第65聯隊ノ兵、船内ニテ上陸直前三名負傷入院セリ（海軍兵曹敵ノ手榴彈？迫撃砲彈ヲ拾ヒテ弄ビ、周囲ノ者五名即死セル側杖ナリ）

◇十月四日 曇

午開始メテ正式ニ旅団司令部ヲ編成シ一時間許リ行動セシム、正午兩聯隊大隊長以上ヲ集合シ會食、爾後午後四・〇〇マデ図上戦術ヲ実施シ、師団ノ作戰ヲ予想シテ戦術思想ノ統一ヲ図ル

午後五・〇〇ヨリ団隊長會議後會食（状況ノ進展ニ伴ヒ明五日夜出發ヲ命ゼラレ、朝四・〇〇ニ起キテ旅団命令ヲ書ケリ）

新集結地ニ前進

◇十月五・六日 曇

午後八・〇〇歩兵第104聯隊ヲ先頭トシテ上海ヲ出發ノ予定ヲ、ゴタゴタノタメハ・四〇頃出發、先頭歩兵第104聯隊長ト同行ス、初行軍トハ言ヘ八里許リノ道ヲ十二時間力カリ翌午前九・

〇〇過ギ新集結地ニ着、月浦鎮西南大王宅ヲ旅団司令部トス

昨午後四時頃夕食シ小夜食モ持タセズ、午前九・〇〇過ギマデ十七時間モ食事セズニ行軍セシメタルタメモアレド、行軍ノ不軍紀、道路ノ中央ニ横臥スルモノ、不平ヲ言フモノ「腹スイタ、モツト休マセ」、落伍ノ多キ、シカモ此間一ツトシテ幹部ノ激励ノ声ヲ聞カザル等、総体ニ此ノ聯隊シツカリト握リ方ノ不足ヲ思ハシム、集結地附近、人、牛、馬ノ死体多シ

第一線加入

◇十月六日 曇後雨

当地ニ数日待機ト思ヒシニ午後師団長ニ呼バレ、直ニ前進、第一線ト交代スベキヲ命ゼラル、帰來直ニ命令ヲ下シ出發ヲ準備セシム

◇十月七日 雨

午前七・三〇先頭ヲ以テ除家宅出發

歩兵第104聯隊、山砲兵第19聯隊第II大隊、工兵一小隊、衛生隊1ノ3ヲ指揮シテ前進、進路ハ前夜ノ失敗ニ懲リ大ニ危懼セシガ、軍用道路アリテ予定ヨリモ早く到着、太平橋ニテ配置ノ命令ヲ下シ、正午前目的地邵家宅ニ交代ヲ準備セシム

交代ハ薄暮ヨリト思ヒシモ、却テ一分隊位宛匍匐前進ヲ要ストテ午後五・〇〇ヨリ実施セシム

現地ニハ下枝大佐アリ、詳細申送りヲ受ク、又現陣地ヲ守備シアル騎兵第9聯隊長森吾六大佐來訪、種々話ヲ聞ク、夕前、所謂「パニック」アリ、「撃方止メ」ヲ吹クモノカナカ射撃止メズ

終夜、敵重迫撃砲ノ射撃ヲ受ク

空襲Ⅱ「飯沼日記」十月三日の項
「一昨夜敵機五、六、公大（飛行場）附近ニ來リ河ニ焼夷彈投下、昨夜復、同所附近ニ來レリ前ノ上海事變ノ軍司令部ノ位置ヲ窺フモノカ」

歩兵第十九聯隊（第九師団）長
下枝金之輔^{22期}
騎兵第九聯隊長 森 吾六^{23期}

◇十月八日 雨

最初ハ本早朝ヨリ直ニ敵ヲ攻撃ノ心算ニテ出テ来リシナルモ、前任者ヨリ自重ヲ要望サレ、又敵陣地ハ巧妙ニシテ容易ニ判明理解セズ、九日ノ攻撃ヲ期シテ諸準備ニ当ラシム

昨夜ノ「パニック」ニテ旅団司令部ノ馬死一傷一、104聯隊死四、砲兵隊傷馬二、兵二ナリ、仲々大ナル損害ナリ

敵彈方々ニ飛ビ戦線ヨリ一、二〇〇米ニ近キ旅団司令部ニモ飛彈アリ、各隊少シツツノ損害ヲ受ク

聯隊長ノ意見ヲ徴シ、兩三日ノ猶余ヲトコトナリシモ、十日ト切リテ攻撃ヲ準備セシメ師團長ニモ意見ヲ具申ス、午後酒井參謀連絡ニ来リ詳細報告ヲ送レリ、相変ラズ、夜迫撃砲二大イニ撃タル

◇十月九日 雨

今、十月九日午後一時稍々前、銃砲声ノ盛ナル音ヲ聞キツツ、小閑ヲ得テ此筆ヲトル、即チ九日マデノ追憶記ナリ

窓ヤラ壁ヲビリビリサスルハ我十五榴？シカシ之レモ敵ノ迫撃砲ノ砲撃ヨリハ音、小ナリ筆トルヤ連絡ノ報告ト人ノ出入、戦サハ忙シキモノナリ

数日来便秘、行クニハ行クモ出ズ、今朝モ用便中後ノ壁ト横ニ彈来ル

銃砲彈飛交ふ中の野糞哉

句ニハアラヌモ実感ナリ

昨夜深更師団命令アリ、攻撃ヲセズ師団主力ノ来着ヲ待タシメラル

歩兵第104聯隊ノ不手際ナカナカニ準備整理出来ズ、報告ナドモ一向ダメナリ、困ツタモノナリ

(七日正午前以来ノ降雨連続シテ未ダニ止ラズ、散兵壕内水漬ケニシテ銃等モ泥マミレトナリ、其ノ辛苦真ニ同情ニ余リアリ、降雨ノタメ至ル所ノ道路脚ニ半スル泥濘トナリ補給ツカズ、第一線ノ準備モ遅レ勝ナリ)

○水ハ遂ニ雨水ヤラ、クリークノ水ヲ飲ムニ至ル、水ノ有難サヲ今日程知レルハナシ未ダ戦サモヤラヌニ今日マデノ損傷下ノ如シ

104聯	死	下士	一	戦傷死	一	負傷	一	将校	一
		兵	二					下士	一
								兵	二
								二二	一
								傷	二八
山砲	負傷	兵	二	工兵負傷	兵	一	衛生負傷	兵	一
馬	死九	傷三							

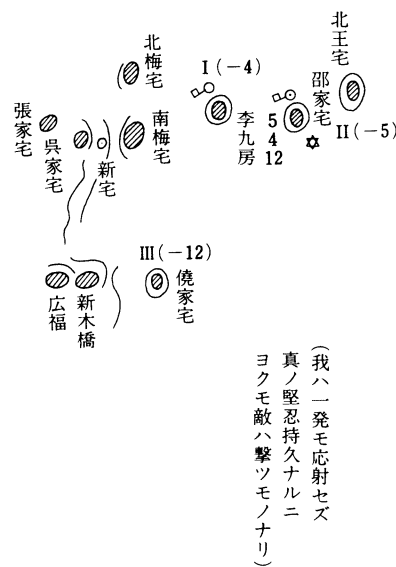
○今日夕、久方振りニテ漬物沢庵ヲ食フ

○昼夜ヲ分タヌ敵ノ射撃ヨク彈丸ガアルモノト感心ス、夜間ハ盛ニ輕機ヤ小銃彈、各隊ノ附近ニ落下シ損害モ生ジ、昼間モ相当狙撃スルタメ、各隊、彼所ノ村ニ敗殘兵アリ、彼所ノ堆土怪シ等、色々ノコトヲ言フ、本日掃蕩ヲ命ジシニ何物モナシ、結局、漸次落付キテ状況判明スルニ及ビ、敵ノ陣地ヨリスル狙撃ト了解スルニ至ル

○此所迄来ル各所ノ陣地ヲ見、支那兵共ノ死体ヲ見等、先遣部隊ヨク之レ迄ヤッタトノ感深シ

○死屍ノ臭ヒハイヤナモノナリ

○本日支那ノ「日本兵士ニ告グ」トノ小ザカシキ宣伝文ヲ拾得セリ



○所見

1、第一線部隊ノ敵情ノ搜索、之ガ整理充分ナラズ、雨ノタメモアレド敵前ニ出デテ既二三
日、未ダ的確ナル敵側防火器等ノ位置標定シ得ズ陣地ノ細部ヲ組織的ニ見極メ付カズ
斯クシテ漠然攻撃シ(正面ニ猛然突掛レバ敵ハ逃グベシト)敵ノ側射斜射ノタメニ死傷統
出、攻撃頓挫スルニ至ル
的確ニ位置ヲ判断シ応策ヲ謀シ臨機ノ予備対策ヲ残シテ攻撃ス、此ノ準備ノ敵情搜索ヲ挙ゲ
ザルベカラズ

○敵陣地ノ巧妙、少数兵ノ壕ヨリスル狙撃、拒馬ノ側、家ノ下、橋ノ横カラ潜伏狙撃ス
又少クモ聯隊長以上ハ速ヤカニ敵情図ヲ整理調製シテ組織的ノ計画立案ヲ要ス
オボロゲナル敵情搜索ニテ此ノ位ナラン式ニテヤラバ、砲兵用法モ何モ大ザッパノ闇雲使用
トナリ思ハヌ敵ニ会シ、攻撃頓挫力大死傷続出トナルベシ
○其ノ他、此ノ降雨続キニテハルト言フコト大問題ナルベシ、クリークノ前岸等果シテ登レ
ルヤ

此ノ種ノ突撃後ノ処置、準備ニ遺憾ナキヲ期セザルベカラズ

- 2、以上ノ如キ報告其ノ他ナカナカ提出セズ、絶エズ指導ヲ要シ、旅団司令部ヨリ要図ヲヤ
リ、記入ヲ要求シ又ハ要図提出ヲ迫リ、已ムナク偵察ヲ要スル様仕向ケツツアリ
- 3、交通壕其ノ他掩壕、遮蔽工事等ヲ実施スルコト、歩哨モ裸ニテ立チヲレリ
- 4、小銃射撃、特ニ夜間ハ目標ヲ確認シタル場合、三十米以内ニ於テ、シカモ必要已ムヲ得ザ
ル時ニ限ルト命令セリ

5、夜間灯火焚火ノ絶対遮蔽

八日清水田少佐(今大隊ト交代セル)来訪、戦場ニ特色々ノ人ト会フモノナリ
又色々ノ将校斥候来リ、何所々々ニテ御世話ニナリマシタト言フ人多シ、学校勤メノ御陰ハ
各所ニ知人ノ多キコトナルベシ、清水少佐相変ラズノ調子ニテ、クリークナド恐クテハ命イク
ラ有リテモ足ラズ等述ベ行ケリ

◇十月十日 雨

四日目ノ雨ナリ、却テ強シ、第11師団部隊十二日より南梅宅以北ノ線ヨリ攻撃スルタメ、本
日展開スル故交代セラレ度シトテ、黒岩少将揮下ノ歩兵第44聯隊ヨリ連絡者来ル
午前ヨリ師団二伺ヒヲ出スモ返電ナシ、然ルニ又シテモ不意打チヲ食ハサル、午後四・三〇
頃電話ニテ山田旅団八十二日より新木橋以南ノ敵ヲ攻撃スベシト、直ニ田代大佐及旅団予備第
II大隊ヲ、今少佐ノ左第一線ノ後方ニ進出セシム

旅団司令部ハ明朝、第I大隊ハ第11師団ト交代後新地区ニ来ル如ク手配ス

転進

◇十月十一日 雨

清水 田少佐

今大隊II歩兵第104聯隊第III大隊
(長 少佐 今不二雄 27期)

歩兵第二十二旅団長(第十一師
団)少将 黒岩義勝 18期

細雨依然タリ、午前始メテ天日ヲ見ル

午前七・三〇第6中隊ヲ護衛トシ邵家屯ヲ出発ス、直径2軒ノ道ヲ迂回シテ劉家行ヲ経テ一里半一〇・〇〇稍々過ギ李家宅ニ到着

実ニ惡路、又此ノ惡路ニモ増シテ各部隊各材料ノ混乱泥マミレ、糧秣モ何モカモ到ル所目茶々ナリ、馬ノイタミアルモノ甚ダ多シ、戦場泥マミレノ人馬ニ充滿スト言フモ過言ニアラズ、補給モナカナカツカヌナリ

直ニ攻撃準備命令ヲ下シ、次イデ午後三・〇〇集合シ来レル各隊長ニ攻撃命令ヲ下達ス

(三家村攻撃)

攻撃準備

歩兵第65聯隊第1大隊、騎兵一分隊、山砲兵第19聯隊(第Ⅲ大隊欠)工兵二小隊半、第2野戦病院ノ配属ヲ受ケ、二十四榴ノ協力ヲ受クル緒戦ナリ

各隊ノ混雜掌握容易ナラズ、七・二〇漸ク第一線ヲ交代セル高橋大隊ヲ掌握シ歩兵第65聯隊第一大隊長山口少佐一〇・〇〇頃部下ヲ掌リシナラン

午前師団ヨリ吉原參謀連絡ニ来ル

旅団司令部ヲ王家橋ニ定メ、之レヨリ五・〇〇連絡ニ出デシイサゴ伍長(給養係)敵迫撃砲彈ニテ大腿部ニ貫通創ヲ負ヒ入院ス

今朝マデ吾等ノ居リシ室ニ第11師団ノ砲兵將校来リ(本部ノ残置者未ダ居ル内)、掃除中、敵彈ニ脚ヲヤラレテ倒ル、全ク判ラヌモノナリ

◇十月十二日 半晴半曇

攻撃実行

午前七・三〇ノ予定、天候ト電線切断ノタメ、八・〇〇ヨリ砲撃開始、試射四〇分、効力射

二〇分、九・二〇第一線攻撃前進、午後二・〇〇マデニハ敵第一線ヲ突破シ、田代聯隊ノ左、今大隊ヲ以テ三家村ノ直前ニ達セルモ、爾後戦況發展セズ夜二入ル

第一線ハ夜襲モ朝駆ケモセズ、死傷ハ二十数名ニシテ輕微ナリ

◇十月十三日 晴

幾回マダカマダカト催促セシヤ知レズ、午後二・〇〇頃マデニ三家村前方ノ鉄条網ヲ逐次ニ越シテ突撃ヲ準備ス、午後吉原參謀連絡ニ来ル

師団長ヨリ

いざやいざ戦の場に立ちにけり

青葉師団の名こそ揚げなむ

トノ送歌アリ、苦シクモ

初戦さ銃取る業は拙きも

勉め励みて名をば汚さじ

ト返ス

午後四・〇〇ニ至ルモ、五・〇〇ニ至ルモ同様ノ報告ノミ来リ、午前以来、將ニ突撃セントスル所ナリトノ報告ハ、何回來リシヤ、鉄条網ヲ越シツツアリ、トノ報告モ幾度來リシヤ、要スルニ報告甚ダ不正確、態勢ノ如キ一度モ要圖報告セズ

將ニ日没トナラントスルニ一向ニ進展セズ、マサカト思ヒシニ遂ニ夜二入ル、午後七・〇〇命令ヲ下シ攻撃ヲ強行スベキヲ命ズ、次イデ師団命令モ同様ノコトヲ言ヒ来ル

昨夜ハ無理サセズト少シ柔軟ナル命令ヲ下セシモ、今夜ハ決行ヲ命ゼリ、夜細雨來ル、第一線ノ労苦誠ニ察スルニ余リアリ

本日ノ負傷七〇ヲ越ス見込ミ、

高橋大隊Ⅱ歩兵第104聯隊第1大隊
(長 少佐 高橋虎之助^{25期})
山口少佐Ⅱ第1大隊長 山口憲三

田代聯隊Ⅱ歩兵第104聯隊(仙台)

「飯沼守日記」十月十三日 13D
ハ緒戦ナレバ慎重ニトテ昨日ヨリ
至近ノ距離ニ在リナカラ未タ突撃
スルニ至ラス

〔朝日〕新聞記者二頼ミ、上陸以来始メテ端書ヲ出ス、部下ノ心配ニテ夜ハ穴倉ニ入ル、三度目ナリ、腕時計ノ革ノ穴一ツツマレリ〕

一、前進援助ニハ砲兵ノ力ヲ借りズ突撃援助ニ其力ト密接ニ協力スルコト

著明ナル村落等ノ射撃ハ前進援助ニシカナラズ、最モ我ニ危害ヲ及ボス、突入セントスル最前線並ビニ之ニ対スル側防火器ノ破壊ヲ砲兵ニ望マザルベカラズ、之ガタメ歩兵ノ砲兵ニスル要求ハ最モ的確限定的ナルヲ要ス

十二日ノ砲撃老陸宅、三家村、載家宅ニ随分沢山ノ砲火(二十四榴モ)ヲ集メシモ、サテ實際ノ攻撃ニハ痛キ所到ル所ニ残存シ攻撃進捗セザリキ

又第一線ノ直前陣地ヲ撃チアラザルヲ以テ、其中止ニ伴ヒ歩兵ハ直ニ元ノ黙あみトナリ前進モ出来ザルナリ

(註・欄外)

誘導彈幕射撃ニ追隨スル思想ハダメ、集中射撃モ駄目、自己正面ノミナラズ(突撃スル)側射ヲ抑フ、他ノ正面モ集中射ヲ要ス、此ノ力我ニナシ、故ニ射撃ヲ止メテ他ニ移セバ忽チ敵姿ヲ出ス、要点集中射撃、側射ノ風漬シ式、大ナル意味ノ歩兵砲ヲラシメザルベカラズ、ココニ今回ノ失敗アリ

二、報告

1、各時期ノ態勢、要図ヲ以テ報告シ、具体的ナラシムル事

2、報告精確ニシテ、午前ヨリ終日「將ニ突撃セントスル所ナリ」式ノ報告ヲナサザルコト

(軍マデ誤ラシム)

3、「戦闘要報」ノ資料ヲ早く出スコト

「射撃彈報告」ノ如キ、直ニ明日ノ戦闘補給ニ關係ス、「死傷者報告」ノ如キ、各人々々ノ家庭ヲ思ヘバ一刻モ早カルベシ

4、補給等ヲ要求スルニ、タダ何ガ欲シイ何ヲ早くニテハ不可ナリ、斯々ノ状況ナリ、彈ハ

何発シカ無イ、糧秣ハ如何、故ニ何ヲ幾ラ補給ヲ希フト具体的ナルヲ要ス

5、刻々戦況ノ報告未ダ充分ナラズ、一時間オキカニ二時間オキニハ必ズ報告スベシ

〔何ヨリモ有難キハ完全ナル制空權ノ獲得ナリ、若シ仮リニ敵機ノ一、二機ニテモ飛翔スルトセバ目下ノ各村落内、村落ノ陰ニ充滿シアル人馬材料ハ如何ニナルベキヤ、真ニ寒心ニ堪ヘザルモノアリ、對露作戰ニハ特別ナル考慮ト訓練トヲ要スル所ナリ〕高射兵器ハ何モナシ

三、降雨泥濘ノ困難ハアレド、幹部ハナホ人馬材料ノ整頓整理ニ就テ指揮ニ関心スルノ要アリ、殆ド兵各個ノナスガ俟ニシテ、其ノ乱雑、從テ物ノ紛失、破損等甚大ナルモノト思ハル四、第一線中小隊長、能力ノ不足ハ大恨事ナリ、突撃ノチャンスモ、タダ之ニ依リテ失シアリト感ズ

薄暮攻撃、朝駆け、近迫作業皆だめナリ

自然自然ト手ヲ拵ゲ第一線兵力ヲ大ナラシムル傾キナキカ

五、雨ニ濡レ泥ニマミレタル武器装具、就中鞍駄馬具ノ如キ五日目ニ至ルモ放置サレテ其ノ尽ナリ、命ジテ漸ク之ヲ始ムル始末ナリ

◇十月十四日 雨

攻撃実ニ三日目ナリ、午前三・三〇頃(昨夜来ノ夜襲ノ成果ニ就キ待チアグネシ所)午前二・〇〇夜襲決行トノ報アリ、成果ヲ待チシニ、四・三〇再ビヤルトノコトニテ遂ニ目的ヲ達セズ、天明ニ至ル、天明ヨリ山砲ト協力、敵銃座ヲ風漬シニシ突撃ノ好機ヲ待ツ、九・三八遂ニ三家村東南無名部落占領トノ吉報ヲ受ク、正午頃師團長ノ慰問トシテ佐藤兵器部長土産ヲ持チテ来ル

何所に行きても蚊と蠅と 水に苦勞する戦さ哉 ナリ

豊穰の稲刈る人もなし新戦場

你共の逃げたる後に稲たわわ

未ダ多少青味ノ残リシ稲ハ蜨々打続クモ誠ニ氣ノ毒ノコトナリ、此ノ附近ハ棉畑甚ダ多ク、唯踏ムニ委スノミ

芋畑一ツナシ新戦場、鶏ノ一羽位ハ居リサウニ思ハルルニ、上海卵トハ何所ヨリ来ルモノニヤ、衛生隊ニテ何所ニテカ仔牛一頭手ニ入レ、山砲隊ト半分ケセシトノコト、ウマイコトヲシタモノナリ、吾等戦場ニ進出以來、先日縄付キノ百姓一人（遠藤少尉ノ刀ノ錆トナル）ヲ見シノミ、其ノ他生物ハ日本軍ノミ、此ノ附近便衣モ何モ遭ツタ者ナシ

我等進出以來八日目、四食許リハパン（乾パン）ノミナリシモ、其ノ他ハ幸ヒニ米ヲ食シ得タリ、唯副食ハ明ケテモ暮レテモ牛缶、筍ノミ、沢庵ニ、三度手ニ入リシカ、砂糖、ドロツプ等、新聞社ノ御蔭ニテ時々口ニス、最前線ハパンノミナリ

◇十月十五日 晴

今日ハ八幡様ノ日ナリ、攻撃実ニ四日目ナリ、朝サツマノ味噌汁ヲ馳走ニナル、其ノ甘カリシコトヨ、攻撃一向ニ埒明カズ、嗚呼第一線中小隊長、能力、氣力ノ不足、実ニ最大ノ恨事ナリ、又隊長ノ氣分ノ斯克モ下ニ移ルモノカ、最早手モナキナリ、タダ断ト敢アルノミナルニ今日ハ芋デーナリ、沼田少将ヨリ岡田副官来リ、慰問ニト里芋六駄ト煙草七〇〇余箇送ラル、好意深謝ニ堪ヘズ、又通信隊長斎藤大尉ヨリ同ジク里芋ヲ掘リテ送ラル、此ノ附近ニハ何モナキコトトテ、諸君ノ好意感謝ニ堪ヘズ、今日頃ヨリ補給円滑トナリ上陸以來始メテ朝鮮餡ノ如キ餅等甘味品ガ加給セラル、「東日」ヨリカステラヲ贈ラル

東京日日新聞社

◇十月十六・十七・十八日 連日ノ晴天

今日こそは今日こそはと

今日も暮れにけり

六日目の中日も暮れるか三家村

攻撃意ノ如ク進展セズ、敵ノ頑強ナル驚ク許リ、敵ハ某教導隊ノ学生軍トカニテ、十八、九歳ノ血氣盛リノ者ナルタメカ、他線突撃シ、或ハ敵ヲ去ル一〇〇米ニテワレ突撃前進ヲ起セバ退却スト聞クニ、壕ヲ相對シテモ退却セズ、盛シニ手榴彈ヲ投ジ、我死傷多シ

十七日夜、歩兵第65聯隊ノ主力、工兵第13聯隊ノ主力ヲ増加セラレカ攻ス

十八日各方面トモ最激戦ニシテ、井上少佐、斎藤少佐モ戦死セラル、教導学校ノ名属官タリシ鈴木文七准尉モ戦死ス

午後四・〇〇頃、右翼隊ハ三家村前ノ陣地ヲ、左翼隊ハ老陸宅ノ北部々落ヲ占領スルヲ得タリ

◇十月十九日 晴

田代大佐*ノ許ニ到リ聯隊長ノ決意ヲ促ス、甚ダ悲痛ナリ（沿道、馬四八斃レアリ）

三家村攻略

歩兵第65聯隊ノ勇奮振リ特ニ目覚シク頼母シキ極ミナリ、後方ヨリ眼鏡ニテ觀望スル65聯隊副官ノ報告ニ依レバ、白刃ヲ振テ陣頭ニ立ツ將校ノ勇シキ姿、手ニ取ル如ク目撃シ得テ感涙ヲ覚ユト

『飯沼守日記』十月十九日 13 D
參謀長連絡ニ来リ1041長田代大佐
ハ戦時聯隊長ニ適セス機ヲ見テ転
補セシメラレタシト、困ツタモ
ノ、但臆病ナルニアラス

第一線就中歩兵第65聯隊方面、胸マデ水ニ入りテ対壕作業ニカメアリト、大分疲労シ食ヨリモ眠ヲ欲シアリト、夜「作戰命令」ニテ右ニ沼田旅団ノ主力加入スルコトナル

◇十月二十日 晴

砲兵協力ノ下、午後三・〇〇三家村ヲ抜ク

◇十月二十一日 晴

沼田旅団ハ、重軽爆撃機、重・山砲ノ大協力ヲ得テ午後二・三〇大ナル苦勞モナク新木橋ヲ、次イデ戴家宅ヲ占領セリ、我老陸宅ノ攻撃依然進展セズ

午後師団長ニ呼バレ陳家宅ニ到ル、帰來、兩角大佐ヲ呼び必勝ノ策ヲ練リ明日ノ企図ヲ示ス

三家村完全占領

◇十月二十二日 晴

戦闘司令所ヲ歩兵第65聯隊本部ノ櫓網灣ニ進メ、午前一一・〇〇ヨリ攻撃ヲ開始セシモ、山口憲大隊ノ攻撃力消耗シ、又爆撃砲撃思ハシカラズ、遂ニ午後五・〇〇千秋ノ恨ミヲ飲ム

◇十月二十三日 晴

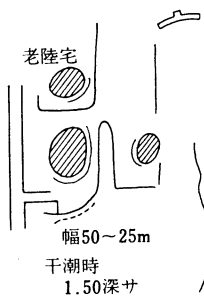
山口憲大隊ヲ山口武大隊ト交代シ午後四・〇〇ヨリ攻撃ヲ再興ス、実ニ遺憾ナガラ再ビ成功スルニ至ラズ

歩兵第104聯隊後退

午前四・〇〇頃ニハ部落ニ進入シ、グングン前進中トノ報ニ狂喜セシモ、五・〇〇過ギニ其ノ誤報ヲ報ジ、実ニ言フニ言ハレヌ痛恨ノ念ナリ、天然ノ障碍クリークノ広キト敵陣ノ大事ナ所ニ砲撃及バザルニ因ルト認メラル、歩兵第104聯隊師団予備トナル
夕、交代セル田代大佐、夜山口憲少佐、山本中尉等來リ報告ス、誠ニ二十余日ノ辛酸ノ程眼ノアタリ見ル姿ナリ、夜家郷ヨリノ第一信ニ接ス

失敗ノ主因

- 1、天然ノ大障碍、通過中ニ皆ヤラル
- 2、敵第一線低ク東方クリーク線ニ楊樹アリ、観測困難、爆撃モ砲撃モ其ノ威力敵第一線ニ及バザリシコト
- 3、山口憲大隊八十余日ノ攻撃ト数次ノ決死攻撃ニ依リ攻撃力消耗シアリシコト
- 4、山口武大隊攻撃日数ノ関係、交代当日ニ攻撃セシ為準備不良



◇十月二十四日 晴

暦日モ何モ判ラズニ暮ス感アリ、老陸宅攻撃ノ失敗実ニ残念ナリ、歩兵第65聯隊長ノ終夜小規模ノ夜襲ヲ以テ如何ナルコトアルモ明朝マデニハ纏リタル成果ヲ得ントノ決心ニ同意ヲ与ヘタルモ、師団將來ノタメ兵力ヲ愛惜セヨトノ注意ニ依リ、昨夜此ノ企図ヲ抑制シ専ラ戦線ノ整理ニ当ラシメツツアリシガ、正午過ギ敵ハ退却中トノ師団通報ニ接シ直チニ此処置ヲナス、シ

歩兵第六十五聯隊長 歩兵大佐
兩角 業作 22期

山口憲大隊 歩兵第65聯隊第I大隊 (長 山口憲三 歩兵少佐)

山口武大隊 歩兵第65聯隊第II大隊 (長 山口武臣 歩兵少佐)

カシ、ナカナカウマクハ問屋ハ卸サヌナリ

午後四・〇〇歩兵第65聯隊ノ補充員將校二一、下士官兵四〇〇名來着ス、心強キコトナリ、蔡家宅ニ後退師団予備タラシメシ歩兵第104聯隊ニモ下士官兵四〇三名、將校二三ガ三十日到着ノ筈ナリ

平大隊概ネクリーク東岸敵陣ニ近迫セリトノコトニテ老陸宅ノ攻撃ヲ中止シ、山口武臣大隊ヲ三家村ニ移ス、山口武臣少佐負傷

◇十月二十五日

朝深キ露カカル、即チ一挙ニ敵陣ヲ突破セヨト許リ第一線平大隊ハ一挙ニ楊湮クリークニ達ス、山口武臣大隊マタ三家村ヨリ一挙ニクリーク線ニ突進ス、然ルニ目標ヲ誤リクリーク線ニ行カズ、馬家宅方向ニ進ミ平大隊ノ後方ニ出ヅ、此ノ錯誤ハ爾後四日間修正シ得ズシテ、遂ニ歩兵第65聯隊渡河攻撃ノ失敗ヲ因セリト認ム、朝、景氣ノヨキ報告ニ誘ハレテ司令部ヲ櫓網灣ニ進ム

◇十月二十六日 晴

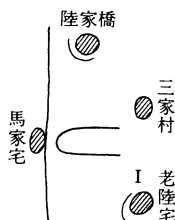
専ラ攻撃準備ヲナス、平大隊一部渡河ヲ企図シ一部渡レリ等ノ報アリシモ結局成功セズ、功ヲ急ガズ充分準備スベキヲ命ズ（我が岸ニハ未ダ敵アリ、然ルニ渡河ヲナサントス、野戦の思想ノタメナリ）

老陸宅、陸家橋占領

◇十月二十七日 晴

本日ハ充分準備ヲナシ専ラ東岸殘敵ノ掃蕩ヲナスベキヲ命ゼルニ拘ハラズ、歩兵第65聯隊長

ハ勝手ニ午後二・〇〇ヨリ砲撃ヲ開始シ渡河ヲ決行セリ、再ビ失敗ス、一部決死隊ニヨリテ20〜30名渡河セルモノヲ遂ニ見殺シニナス、
實ニ残念ノ至リナリ
老陸宅、陸家橋ヲ攻撃セヨトノ師団命令ニ依リ、新ニ復歸セル山口大隊ヲシテ老陸宅ヲ、第II大隊ヲシテ陸家橋ヲ攻撃セシム、然ルニ左翼隊ノ馬家宅占領ニ依リ、ワケモナク午後四・〇〇東西老陸宅ヲ同陸



家橋ヲ占領スルヲ得タリ

◇十月二十八日 晴

度々ノ失敗ニ依リ一日充分準備セシメ旅団命令通りノ態勢ヲトラシメントセシモ、攻撃ヲ急ギ如何ニシテモ我岸ノ殘敵ヲ速ヤカニ掃蕩セズ、漸ク山口憲三大隊ヲ三家村方面ニ廻セリ
態勢整ハズ三度攻撃失敗セリ、夕、第一線ヲ実視セシメ命令ノ実行不充分、準備整ハザルヲ確メタルヲ以テ暫ク隱忍、明一日ヲ以テ充分準備セシメントセシモ、夕刻師団長直接ノ電話ニテ、明午前一一・〇〇ヲ期シ突撃セヨトノコト

已ムナク一一・〇〇ハ満潮故考慮ヲ求メ、師団命令ニテ午後三・〇〇突撃ノコトナリ、歩兵第65聯隊長ハ夜ニ入り軍旗ヲ奉ジテ第一線ニ進出セリ
歩兵第104聯隊（第II大隊欠）指揮下ニ復歸右ニ出ス

◇十月二十九日

朝クリーク東岸ニテ山口憲三少佐負傷、師団司令部医務室ニテ担架ノ上ヨリ此ノ俣ノ渡河ハ聯隊ハ全滅スル丈ケデスト意見ヲ述ブ、甚ダ悲壯ナリ

午後三・〇〇必勝決死ノ攻撃四度挫折ス、唯無念ト言フベキノミ、昨日來第一線ニ活躍セル歩兵第65聯隊副官小島哲次郎少佐最前線ニテ戦死ス（朝日）ニ頼ミテ走り書キノ第二信）

歩兵第六十五聯隊第III大隊
（長 平 顯美 歩兵少佐）

『飯沼守日記』十月二十九日 13
Dハ陳家宅ヲ必ス取ルトノ決心ナルヲ以テ（松井）司令官ハ師団ノ面目及將來ノ志氣ヲモ考ヘラレテ本月中ハ之ヲ猶予スルコトニ定メラル

◇十月三十日 細雨

歩兵第65聯隊ヲ今大隊ト交代、馬家宅クリーク線ヲ確保シ東岸殘敵ノ掃蕩ヲナスコトトス
交代ハ午後二・〇〇頃完了、歩兵第65聯隊ハ王家橋ニ集結、本日歩兵第104聯隊ノ陸家橋附近
ノ攻撃ニテ敵ハ掩蓋銃座線ヲ捨テ反對斜面ヲ占領シアリ、之ヲ知ラズニ砲撃ノ終ルト共ニ銃座
線ニ突入セル第1中隊ハ一度二四〇名許リノ死傷ヲ作レリ、敵モナカナカ味ナコトヲスルニ至
レリ

◇十月三十一日 細雨

久シク案ジタル老陸宅西南側ノ大掩蓋陣地ガ左翼線ノ右翼ヲ側斜射スル故攻撃出来ズ、早ク
トレトレト師団ヨリヤイヤ言ヒ来リシ老陸宅西南地區楊涇クリーク以北ノ地區ハ今少佐ノ努
力ニテ訳モナク完全ニ掃蕩セラレタリ

之ニ反シ65聯隊ニモ度々要求シ夜襲其他ニテ遂ニ奪レリト信ゼシ歩兵第65聯隊ノ第7中隊ヲ
歩兵第104聯隊ノ第7中隊ニヨリテ交代セシ馬家宅北方盲貫クリーク北側ニハ依然敵陣地健在
シ、夫レヨリ以北ノ東岸ニハ皆敵居ルコトヲ発見セリ、斯クシテ歩兵第65聯隊ノ猛攻ノ不成功
ノ故アリト謂フベク、戰場ノ実況ノ判明如何ニ困難ナルカヲ知ルベシ
《生蛙初メテロニス、蓋シ魚ノ初物ナリ、二十世紀ノ梨ヲ手ニ入ル》

十一月 Novemb.

◇十一月一日 細雨

去ル十二日以来、手ヲ換ヘ品ヲ変ヘテノ猛攻力闘実ニ滿二十日、所望ノ効果ヲ遺憾ナラ収メ
難カリシモ概ネ楊涇クリーク東岸地帯ノ占領ヲ終リ、本日ヨリヒト先ヅ銚ヲ収メテ香シカラヌ

警備ノ任ニ就クコトトナレリ、詮ナキコトニコソ

即チ歩兵第104聯隊、師団直轄ニテ新木橋陳家行間約三軒正面ヲ担任、他ハ後方ニ集結スルコ
トトナル

《初メテ纏リタル手紙ヲ書ク》

『多クノ犠牲ヲ払ヒシ割リニ戦果少カリシハ敵陣地ニ対スル誤算根本ナリト確信ス
軍モ師団モ如何ナル陣地ナリヤ更ニ知ル所ナク、示ス所ナク、從テ旅団以下亦唯突附イテ見
ル式ニテ敵陣地ト攻撃法ト一致セズ

攻撃ハあくマデ野戦式ニテヤレヤレ式、何グツグツシテ居ル式ナリキ
寧ロ之レダケノ日子ヲ要スルモノナラ、最初ヨリ落付キテヤラバ更ニ早イ更ニ良好ナル結末
ヲ得タリシナラン、神ナラヌ身ノ詮ナキ事ナレド』

警備ノ任

◇十一月二日 雨

午前一〇・〇〇、九日住シタル櫓網灣ヲ去テ師団司令部ノ位置タル陳家宅ニ後退ス、各聯隊
ヲ指揮下ニ復帰シ約二里ノ正面ヲ守備スルコトトナル、林家宅以南陳家行(含マズ)マデ

師団司令部ニテ師団長荻洲閣下、沼田閣下ニ会フ、無念話ヲナス、〇・三〇頃両閣下去ラル
沼田閣下ノ話ニテ兵隊ノ服ヲ着居ルハ我師団許リナリトテ、普通ノ服ヲ着ルコトトシ早速
「大毎」記者ニ頼ミテ航空便ヲ出ス

《二十九日目ニテ泥水ナガラ入浴ス、あかノ出タコト滅法ナリ》

コノ雨ニ塹壕内ニアル第一線誠ニ同情ニ堪ヘザル所ナリ

『飯沼守日記』十月三十一日
〈13Dノ損耗〉

將校	死一三	傷三七
準士官以下	死二二八	傷二、七七一
合計	死二五一	傷一、八〇八
合計	二、〇五九	

兵隊の服は狙撃を避けるため、將校も兵服を着用していた。

◇十一月三日 曇小雨

塹壕に君が代聞ゆ明治節

午前一〇・〇〇ヨリ司令部一同遙拝ト万歳ヲ行フ、配属山砲兵第19聯隊第II大隊ヲシテ正午ヨリ百一発ノ祝砲ヲ馬家宅ニ向テ放タシム

《初メテ名モナキ花ヲ見ル、一輪取りテ挿シヌ 葉莢を一輪ざしに征旅哉》

午後一・〇〇「大毎」記者田中光武ヲ加ヘテするめノ祝杯ヲ挙グ、「朝日」横田省巳氏ニ頼ミテ又兄上、民子ニ書信ヲ出ス

◇十一月四日 半晴半曇

主トシテ104聯隊左第一線正面ノ調整指示ニ日ヲ送ル、歩兵第65聯隊右第一線ハ本日ヨリ完全警備ニ就ケリ

《昨日明治節ノ御馳走ナルベシ、鯛一匹宛渡ル、珍味ナリ》

◇十一月五日 半曇半雨

連日不快ナ天気ナリ、各所ニ小逆襲アリ、小癩ナル敵カナ、「大毎」政治部長金子伴次郎慰問ス

◇十一月六日 曇時々小雨

午前一〇・〇〇ヨリ東王宅（羅店東南二）ノ師団司令部ニ団隊長會議、目下ノ警備状況ト各聯隊奮闘ノ戦歴報告並ビニ教訓ノ紹介、会食ヲ終リテ午後三・〇〇頃帰途ニ就ク

「快報アリ」

歩兵第65聯隊III大隊ノ正面九・一〇北覽湾周家宅附近ニ今朝四・〇〇頃五、六百ノ敵兵逆襲

『飯沼守日記』十一月五日 13D
ヨリ伝染病十六名アリトノ報ニ専門医ヲ遣ハシタル処「コレラ」様ニテ九十名ノ死亡者アリ、現患者六十余名、徹底の防遏ヲ為ス

シ来ル、第9中隊ハ正午マデ戦闘持續約二百ヲ斃シ十数名ヲ捕虜トシ、第10中隊ハ午後二・三〇頃迄戦闘シ百二十三ヲ倒シ、両隊共多数ノ武器ヲ鹵獲セリ」

◇十一月七日 未明曇風雨、終日雨

誠ニ壕内生活者ニハ氣ノ毒ニ堪ヘザル次第ナリ、例ニヨリテ雨ニモ閑ハラズ逆襲アリ、両聯隊ニ賞詞ヲ出ス、志氣振興ノ一助ニモト

◇十一月八日 快晴

今日ハ日本晴ノ天気トナル、第一線蘇生ノ思ヒアルベシ、昨夜天気予報ニテ本日天気ヨクナルトノコトヲ第一線ニ通報セシ所、之レノミデ大ニ志氣昂リシトノコト、以テ如何ニ苦シメルカヲ想像シウベシ（手紙ヲ出ス）

◇十一月九日 快晴

今日ハ敵モ穩カナリ、但シ配属山砲兵第II大隊ハ敵ノ観測所ト彈藥集積所トヲ破壊、花火天ニ冲スルガ如キ奇観ヲ呈セシトノ報告ヲ受ク

寢室タル穴倉濕氣甚シク、ジクジクニシテ連日鼠ノ惡戯ニ悩マサル、一昨夜ノ如キハ顔ニ小便ヲカケラルル始末、昨夜ハ終夜ローソクヲ枕頭ニ立テタル御蔭ニテ事ナキヲ得タリ、今日早々土窟ヲ全部壊シ上ニ寝ルコトトセリ、副官會報
菊花ヲ運轉手ニ貰ヒ十五榴葉筒ニ挿ス

◇十一月十日 半晴半曇

穴倉生活ヲヤメタル御蔭ニテ安眠シ、毎夜起キタル小便モ起キズ
各正面小競合依然タルモ大ナル変化ナシ

山砲兵第19聯隊第II大隊長 少佐
南條宏策 19期

師団長二意見具申ヲ提出ス

- 1、速ヤカニ攻撃地区ヲ内示シテ攻撃準備ヲ現実的ナラシメヨ
- 2、師団ノ攻撃ハ劉河以北カ張涇クリーク南方ニ選ビ当面堅固ナル正面ヲ避ケヨ
- 3、各聯隊少クモ一大隊ノ兵ヲ集結シテ戦力ヲ培養セシメヨ

◇十一月十一日 晴

午後一・〇〇兩聯隊長各大隊ヨリ將校一名ヲ集メクリーク渡河ノ研究演習ヲナス、參謀長モ來場ス、爆破好成绩ニテ全員自信ヲ持チシハ仕合せナリ

《兄上、穰二ノ手紙來ル》

《「朝日」ノ横田〔省巴〕氏ヨリ虎屋ノ「夜の梅」ヲ貰フ、又久振リニ大福ヲ口ニス》

敵戦線モ静カナリ、吾氣ナル一日ト思ヒキヤ、夜ニ入りテ歩兵第65聯隊抽出ノ件師団ヨリ申來リ、種々折衝、夜半ニ及ブ、然ルニ更ニ俄然局面ハ一転セリ

移動

◇十一月十二日 雨

午前二・〇〇師団命令ニ依リ、南方方面敵ノ総退却ニ依リ、師団ハ北方ニ転進、沼田旅団正面ヨリ攻撃スルタメ旅団命令ス

歩兵第104聯隊ハ午前九・〇〇頃午後集結ヲ終リ歩兵第65聯隊ハ遅ル、概ネ正午ヨリ一・〇〇迄ノ間ニ斎家村劉家行ヲ出發セシメ、三・〇〇旅団司令部ノ位置長寿橋宅ニ兩聯隊長ヲ集メ、展開命令ヲ下ス、四・三〇頃沼田旅団ノ位置ニアル西塘灣ノ師団長ニ呼バレ追撃ノ指示ヲ受ク直ニ歸來、再ビ命令ヲ出シタルモ兩聯隊ハ五・〇〇頃ナホ行軍中ニシテ、降雨泥濘ニ加フルニ展開ハ夜ニ入ルベク混雜困難察スルニ余リアリ

《本日主力ヲ転進セシムルニ方リ一部ヲ点々要點ニ残置シ來リ甚ダ敵ノ出撃ヲ憂ヒタリシガ、第11師団ノ南翔以北ニ進出、第101師団ノ陳家行ニ進出ニ依リ当面ノ敵ハ午前二〇〇一・〇〇ノ間ニ総退却セシモノノ如ク、広福ハ当面ノ第8中隊一一・〇〇頃之ヲ占領、恨ミノ馬家宅等モ一一・〇〇頃マデニ皆退却セリ》

追撃

◇十一月十三日 曇後晴レ

第一線ノ追撃ニ伴ヒ午前七・三〇出發、泥濘ヲ踏ミテ前進ス、幸ニ敵ハ退却セシタメ抵抗ナカリシモ、蘇村錢村ノ敵陣地ノ堅固施設ノ巧妙ヲ見、一驚ヲ禁ズル能ハザリキ

右追撃隊歩兵第65聯隊ト終日連絡ヲ取ル能ハザリシガ、歩兵第104聯隊ノ追撃ヲ督勵シ時ニ第一線ヨリモ前方ニ出テ推進ヲ図リ、午後四・〇〇歩兵第104聯隊ノ第一線ヲ以テ陸渡橋ノ劉河ノ線ニ達ス、時恰モ65聯隊ヲ掌握スルヲ得タリ、歩兵第65聯隊ハ午後二・〇〇劉河ノ線ニ達シアリタリ、例ニ依リ師団ヨリ矢ノ催促、第一線ノ苦勞モ努力モ何ノソノ、唯アセリニアセリテ成功ヲノミ望ム

『百ヤ二百ノ決死隊ナキカ』ト、如何ニ決死隊トテ河ハ只デハ越サレマジ

《今日始メテ沿道土民ヲ見ル、戦果ヲ避ケテ避難セルモノ歸來セシカ》

陸渡橋東南五百米ノ姚宅ニ位置ス

劉河ノ渡河

◇十一月十四日 曇

右第一線タル歩兵第65聯隊ハ午前六・〇〇ヨリ、左歩兵第104聯隊ハ五・一〇頃ヨリ前夜來ノ

大努力功ヲ奏シ、前岸ノ小敵ヲ駆逐シテ渡河ヲ開始シ遂ニ劉河ノ一番乗りニ成功セリ

《前日歩兵第104聯隊ハ四・〇〇頃陸渡橋ノ前岸ニ達シタリシガ時余ニシテ第101師団危ク来着シ陸渡橋正面ヲ取ラレテ仕舞フ所ナリキ》

ハ・三〇姚宅出發、火災中ノ陸渡橋ヲ經テ北側地区ニ兵力集結、午後〇・三〇出發大追撃ニ移ル

日暮レテ道遠シ、取ルベキタ食モナク、行軍午前二・〇〇ニ及ビ何家市ニ達シ宿宮ス、部隊ノ疲労極メテ大ナリ

《夜行軍ト橋ナキ道ノタメ、部隊ノ連絡ヲ失スル多ク歩兵第65聯隊ハ聯隊長ノミニテ隊ハ不明トナリ、山砲ハ遂ニ追及セズ、旅団ノ行李モ遂ニ爾來四日不明トナレリ》山砲其他馬數頭、橋ヨリ落チテ死セリ

《ピース戦死ス》

追撃

◇十一月十五日 曇

午後〇・三〇出發、支塘鎮ヲ經テ歩兵第104聯隊ヲ前衛トシ追撃、午後九・〇〇珍門廟ニ宿宮ス

夜田代大佐ヲ呼び、今少佐ヲ挺進隊ニ出發セシムベク部署セル所、歩兵第65聯隊副官山本少佐来リ、梅李鎮ニ歩兵第65聯隊、山砲兵聯隊集結シアル旨報告大安神セリ、直ニ今少佐ニ代フルニ両角聯隊ノ第II大隊ヲ以テ無錫西北方ノ鉄道遮断ニ任ゼシム

◇十一月十六日 雨

午前七・三〇出發、梅李鎮ニ於テ山砲、沼田旅団等ノタメ大混乱、部隊ノ整理ニ大混雑大困

難ヲナセリ

泥濘ニ加フルニ惡路惡橋馬ヲ落スモノ甚ダ多シ、午後二・三〇頃福山河畔謝家橋鎮ニ近迫ス、挺進隊ハ戦闘中ナリ

師団長例ノ調子ニテ先頭ニ進出、田代大佐等ヲ叱リ騒ギ、前へ前へトテ無暗ニ突掛ケ危ク大損害ヲ受クル所ナリキ、小銃彈跳梁下、謝家橋鎮東南千米ノ一軒家ニ位置シ兩聯隊ヲ展開シ渡河ノ準備ヲナス

謝家橋鎮ノ戦闘

◇十一月十七日 雨

前夜半東岸ノ掃蕩ニ努ム、午後四・三〇平大隊ハ奮戦敵ノトーチカ陣地ヲ攻略シ、敵二百ト大隊長ト幾多ノ貴重ナル書類等ヲ鹵獲セリ

◇十一月十八日 雨

午前一〇・〇〇遂ニ残存橋梁ヲ通過シテ前岸進出ニ成功ス

《昨日ヨリノ歩兵第65聯隊第II大隊・第III大隊長ノ行動ニ師団長賞詞ヲ出シ日本刀一振りヲ贈レリ》

午後五・〇〇謝家橋鎮ニ進出ノ為メ、前進セシモ市街ニ入ル能ハズ、東側三軒家ニ宿泊ス兩聯隊並ビニ師団予備タリシ歩兵第116聯隊ノ一大隊ヲ余ノ指揮下ニ入レ戦果ノ拡張ニ是レ努ム

◇十一月十九日 雨

依然戦果ノ拡張ニ勉ム、敵ハ退却ト思ハルルニ、サスガ福山―常熟ヲ結ブ主陣地ダケニ反テ

「ピース」は旅団長乗馬か。

歩兵第65聯隊副官 少佐 山本政豊

「飯沼守日記」十一月十六日

荻洲部隊十一月十日マテノ死傷

数

《戦死》 将校八四 準士官以下九三九

計一、〇二三

《戦傷》

将校一三一

準士官以下四、〇三三

計四、一六四

第II大隊長 山口武臣 少佐
第III大隊長 平 顕美 少佐

歩兵第116聯隊（新発田）長 歩兵
大佐 添田 孚^{20期}

敵兵増加ノ兆アリ、終日力攻、第一線ハ概ネ二〇〇米位前進セリ

◇十一月二十日 雨

午前〇・三〇敵兵退却ノ兆アリ、挺進隊ハ直ニ追撃ニ移ル旨ノ報ニ接ス、即チ歩兵第104聯隊ヲ前衛トシ出發セントスルトキ、師団命令ニテ歩兵第104聯隊ノ二大隊師団予備トナリシヲ以テ歩兵第65聯隊挺進隊ノ殘部ト歩兵第104聯隊ノ第二大隊ヲ指揮シテ六・〇〇謝家橋鎮出發、追撃ニ移ル

途中敗殘兵多ク、兵器彈藥等ノ遺棄多シ

自動車道ノ新造セラレアルモノ多シ、午後四・〇〇西除野ニ宿營ス、出發以來初メテノ大休養ナリ

《徵発モ昼間ナラデハ思フ様ニ行カヌモノナリ、相当大ナル町トテ砂糖其他獲物多シ》

◇十一月二十一日 雨

午前八・〇〇出發、本日ハ敵遠クナリシタメ獲物少シ、十数名ノ敗殘兵ヲ殺セリ、將校ニヲ捕フ、午後二・三〇陳野鎮ニ達シ歩兵第65聯隊ヲ南國ニ止メ宿營ス

《此ノ附近沿道顧山等ノ丘阜？山アリ、農家ニハ藥屋根多ク、風色穩カニシテ佳良、誠ニ日本ノ田舎ニ似タリ》

◇十一月二十二日 晴

今日ハ一日休養ノ命ニ接シ十二日以來始メテ休メタリ、此ノ間顔モ洗ハズ口モススガズ全クノ大努力ナリキ、歩兵第65聯隊ノ平大隊ヲシテ長湮鎮ノ攻略ヲ命ズ

《民子ヨリ服ヲ送りシトノ手紙ヲ受領ス、工兵某曹長ノ好意ナリ、此ノ交通絶エタル追撃ノ端末ニテ手紙ヲ受クトハ実ニ幸福ノ至リト言フベシ、其ノ前ニ出セリト言フ手紙ハ届カズ》

服ヲ着換ヘ（「東日」田中君ノ好意ナリ）今マデノ服ハ「朝日」ノ横田省巳君ニヤリシ所、服ノ上カラスッポリ、外套トナレリ

◇十一月二十三日 晴

晴天ノ行軍ハ誠ニ心持ヨシ、昨日來兩角部隊ニヨリ攻撃シアリシ長湮鎮未ダ陥落セズ、正午頃例ニヨリ師団司令部突ツカケ來ル、如何ニアセリテモ落チザルモノハ落チヌナリ

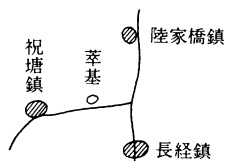
遂ニ長湮鎮東方三、四百ノ無名部落ノ納屋ミタイナ所ニ泊ル、長湮鎮ハ長湮クリーク上ノ要點ニ在リ、敵退路上ノ要衝ナルガ如シ、歩兵第104聯隊今大隊ヲ攻撃ニ増加ス

◇十一月二十四日 晴

前夜早く、焼ケノ何ノト騒ギシモ石造ノ町ハナカナカ焼ケズ、石油午前九・〇〇頃ニ届キシガ、斯ル手配ノ届ク頃ニハ戰濟ミ一〇・〇〇頃市街ニ火上リ攻略ニ成功、直ニ前進ヲ開始ス

一〇・五〇無名部落出發、前日ノ如ク長湮大隊ヲ前衛トシテ先行セシム、歩兵第65聯隊ハ師団ノ直轄トナリ歩兵第104聯隊復歸ス

敵ノ抛リシ兵營、倉庫等ノ壁石ヨリナリ、良クモ拔ケシモノト思ハシメタリ



祝塘鎮ニハ敵大部隊アリトノコトニテ其ノ直前ノクリークヲ遠ク渡ル意味ニテ、祝塘鎮ニハ歩兵第65聯隊ノ第II大隊ヲ左側衛トシテ向ハシメ、主力ハ陸家橋鎮方向ニ向フ、午後三・〇〇頃陸家橋鎮南方クリーク線ニテ敵ノ抵抗ニ会ス、仍チ今大隊ヲ華基ニ向ハシメ渡河ニ努メタルモ果サズ、遂ニ旅団司令部ハ四本堂ニ泊ス

◇十一月二十五日 晴

今日コソト思ヒシ渡河モ依然トシテ渋滞、今マデ常ニ沼田旅団ニ先ンジアリシ態勢モ逆トナリシ感アリ、高橋大隊ヲ更ニ左ニ廻シテ渡河ノ促進ニ努ム、韓家溝ニ泊ス

◇十一月二十六日

払曉敵退却、今大隊ノ機敏ナル行動ニ依リ直ニ華基占領、続イテ一挙ニ祝塘鎮ヲモ占領スルヲ得タリ、旅団司令部ハ午前一〇・三〇華基出發、追撃ニ移ル、四・〇〇頃長寿大河ノ前面王家湾附近ニ於テ再ビ敵ノ抵抗ニ会ス、既設陣地アリテ敵ノ収容陣地タルコトハ捕虜ヨリ得タル命令書ニテ承知シ来レル所ナリ、横塘鎮ノ正面ヲ避ケテ其ノ北方ニ向ヒシモノナリ、林家住基(王家湾東側部落)ニ泊ス

◇十一月二十七日 晴

難問題タリシ長寿大河ノ渡河モ敵ノ退却ニヨリ須毛村ノ橋梁占領、早朝ヨリ修理ノ上追撃ニ移ル、長寿大河兩岸ノ高キ堤ノ大ナル、更ニ兩岸陣地ノ堅固ナル、此所ニ敵頑張りシナランニハ確二十日ヤソコラニテハト神助ノ程ヲ感謝スルノミ

横塘鎮ヲ經テ愈々長キ希望ノ「江陰無錫国防線」ニ到達ノ日ナリ

師団命令伝ハラズ、前夜ノ命ニテ晴陽鎮南方ノ小晴陽ニ先頭ヲ以テ午後三・〇〇頃達シ旅団司令部ハ大街道ノ手前薛家村ニ泊ス

久方振りニ立派ナル橋ヤ電柱ヤ車輛等ヲ見テ物珍ラシキ次第ナリ

追撃終了、江陰攻撃

◇十一月二十八日 晴

滞在カ小移動カ、何レニシテモ満十五日、大追撃ハ大団円トナリシモノナルヲ以テ移動トテ

北ニ向フナリ、師団命令ヲ待タザルベカラズ

遂ニ午前一〇・三〇出發、江陰城攻撃準備ノタメ、晴陽鎮東北地区ニ集結ニ前進ス、初メテ大道ヲ前進スル心地ヨサ、併シ十五加十加十五榴車輜山砲等道路ヲ塞ギ大変ナ混雜ナリ、正午宿营地未決定ノ為メ、北樹頭ニテ午食、出發セントスル頃、歩兵第65聯隊長ヨリ敵ハ退却シツツアリ、今ヨリ直ニ攻撃セバ江陰城ノ攻略ハ容易ナルベク、聯隊ハ南閘鎮ヲ攻撃ストノ報告アリ、直チニ之ヲ是認シ予備隊タル歩兵第65聯隊第I大隊ト附近ニ在リシ歩兵第104聯隊第II大隊ニ追及ヲ命ジテ前進ス、午後二・二〇歩兵第65聯隊ノ土田鐵雄少尉ハ秦皇山ニ日章旗ヲ植立セリ

今大隊ヲシテ花山攻撃ノ準備ヲナサシムルト共ニ歩兵第65聯隊主力ヲ以テ南閘鎮ヲ攻撃セシム午後四・〇〇頃南部南閘鎮ヲ占領セシモ完全占領ニ至ラズ、六橋ニ泊ス

◇十一月二十九日 晴

南閘鎮ノ抵抗意外ニ頑強、又部落モ意外ニ大ニシテ進展大ナラズ

此日師団長六橋ニ進出、例ノ調子ニテ催促、歩兵第104聯隊ヲ南門ニ向ハシムル如ク俄ニ部署ヲ変更セリ

◇十一月三十日 晴

前夜南閘鎮ヲ完全ニ占領セル歩兵第65聯隊ハ此朝敵ノ逆襲ヲ受ケ大ニ之ヲ倒セリ、午前一〇・〇〇頃ヨリ追撃ニ移リ横塘里ノ敵ヲ攻撃ス、歩兵第104聯隊ハ前日花山西北稜ヲ占領、本日本橋鎮ヲ占領シ又花山方面ノ敗敵ニ大ナル損害ヲ与ヘタリ

《旅団副官田山芳雄少佐、相田俊二ト交代、相田中佐着任ス》

高橋大隊II歩兵第104聯隊第I大隊
(長 高橋虎之助^{25期})

『飯沼守日記』十一月三十日 13
Dノ左右兩翼隊ハ江陰市行ノ南方
一、二軒ニ近迫シ攻撃中

田山少佐は十一月十七日、歩兵第
六十五聯隊第一大隊長となる(前
任山口憲三少佐は十月二十七日負
傷、十一月十七日歩兵第二十九聯
隊留守隊附となる)

江陰入城

December

◇十二月一日 晴

横塘里板橋鎮共ニ抵抗頑強、逆襲スラ反覆シ大ナル進展ヲ見ズ、然ルニ平大隊ハ敵ニ尾シテ一挙、午後二・二〇、西門高ク日章旗ヲ掲ゲ

◇十二月二日 晴

平大隊ノ戦果ヲ拡張セント努力中トノ報アリ、平大隊ハ、午前九・三〇、工兵ト協力突撃ヲ強行、遂ニ入城、一〇・三〇ニハ聯隊主力入城、一〇・五〇ニハ第Ⅱ大隊ニヨリ鐘山ヲモ一挙ニ占領セリト

旅団司令部ハ横塘里ニ向ヒ前進中、正午過ギ西門外ニ達シ次イデ入城、北門外ニ集結セリ

◇十二月三日 晴

午前九・三〇マデニ南閘鎮ニ至リ、後藤^{*}侍從武官ヲ迎ヘ御沙汰ノ伝達ヲ受ケテ午後南閘鎮ニテ江陰攻撃ノ御話ヲ申シ上ゲ

夕ハ城内師団司令部ニテ会食ナリシモ風邪ヲ恐レテ欠席ス、寝ルト咳ヒドシ

◇十二月四日 晴

午前江陰要塞ノ一部ヲ見学ス、其ノ雄大ナルニ一驚ヲ喫セリ

《礼子ノ手紙届ク》

残置セシ珍門^{*}廟ノ荷物、長寿橋宅ノ若宮軍曹到着ス

正午旅団司令部下士官以上会食、祝意ヲ表セリ

夜咳ヒドシ

◇十二月五日 晴

終日籠城、次期作戰ノ準備ヲ命ズ

七日ヨリ前進開始ノ内示ヲ受ク、未ダ長寿橋宅ノ荷物届カズ

移動

◇十二月六日 晴

補充員各隊四〇〇余名、但シ途中ノ行軍ニヨリ四〇五〇名減員、歩兵第65聯隊ハ昨夜、104聯隊ハ本夜到着、明七日早朝出発ノ命ヲ受ク

鎮江ニハ第11師団向ヘリ、句容ニハ第9師団、第16師団近迫、南京ノ陥落モ今明日ト聞クタメ、甚ダ氣合掛ラヌヲ覺ユ、人ノ通りシ後ノミヲなめ行ク、誠ニ氣ノキカヌコトナリ

午前一一・〇〇ヨリ西聯隊長ヲ集メ諸注意ヲ与フ、午食両隊副官モ集ム

◇十二月七日 晴

午前八・〇〇西門外出発、歩兵第65聯隊、山砲、衛生隊、歩兵第104聯隊ノ三梯隊トナリ、從來ニ変ル堅キ大道ヲ行軍、八里ニシテ常州ノ東北二里許リノ小胡鎮ニ宿營ス、愈々ノ田舎ナリ

◇十二月八日 晴

又從來ノ如キ田舎道ヲ六里、夏野鎮ニ出テ更ニ常州ヨリノ本道ニ出デ商家村ニ宿營ス、マスノ田舎ナリ、宿營力モ乏シ

連日沿道ノ火災多ク、皇軍ラシカラザル仕業多キヲ認め、改メテ嚴重ナル注意ヲ諸隊ニ与

『飯沼守日記』十二月二日 13 D
ハ午前一一・〇〇江陰要塞ヲ占領、30センチ砲三門、高射砲八門
其他多数ノ鹵獲砲アリ

後藤侍從武官Ⅱ歩兵中佐 後藤光藏 29期

11師団とは天谷支隊

フ、行程七里

◇十二月九日 晴

連日ノ行軍故行程ヲツメ、六里強ニシテ碑城鎮ニ宿營ス、田舎ナガラ大村ニシテ風呂ニ入ル

◇十二月十日 晴

連日ノ行軍ニテ隊ノ疲労大ナリ、足傷患者モ少カラズ
師団命令ヲ昼頃丁度來合ハセタル伊藤高級副官ニ聞キ、鎮江迄頑張りテ泊ス、初メテ電灯ヲ見ル

鎮江ハ遣唐使節阿倍仲麻呂僧空海ノ渡來セシ由緒ノ地、金山寺ニ何ントカノ大寺モアリ、サ
スガ大都會ニシテ仙台ナドハ足許ニモ寄レズ

◇十二月十一日 晴

沼田旅團來ル故、宿營地ヲ移動セヨトテ、午前一〇・〇〇過ギヨリ西方三里ノ高資鎮ニ移動
ス

山ト江トニ挾マレタル今マデニ見ザル僻村寒村、オマケニ支那兵ニ荒サレ米ナク、食ニ困リ
テ悲鳴ヲ挙ゲ

◇十二月十二日 晴

總出ニテ物資徵發ナリ、然ルニ午後一・〇〇頃突然歩兵第65聯隊ト山砲兵第Ⅲ大隊、騎兵第
17大隊ヲ連レテ南京攻撃ニ参加セヨトノ命令、誠ニ有難キコトナガラ突然ニシテ行李ハ鎮江ニ
派遣シアリ、人ハ徵發ニ出デアリ、態勢甚ダ面白カラズ

併シ午後五・〇〇出發、夜行軍ヲナシ三里半余ノ四蜀街ニ泊ス、随分ヒドキ家ニテ南京虫騷

ギアリ

南京攻撃

◇十二月十三日 晴

例ニ依リ到ル所ニ陣地アル地帯ヲ過ギ、晴陽鎮ヲ經テ前進、霞棲街ニ泊スル心算ナリシ所焼
カレテ適當ノ家ナク更ニ若干前進中、先遣セシ田山大隊午後一時烏龜山砲台ヲ（騎兵第17大隊
ハ午後三・〇〇）占領セリ、南京ハ各師団掃蕩中トノ報アリ、直ニ距離ヲ伸シテ邵家塘ニ泊ス

◇十二月十四日 晴

他師団ニ砲台ヲトラルルヲ恐レ午前四時半出發、幕府山砲台ニ向フ、明ケテ砲台ノ附近ニ到
レバ投降兵莫大ニシテ仕末ニ困ル

幕府山ハ先遣隊ニ依リ午前八時占領スルヲ得タリ、近郊ノ文化住宅、村落等皆敵ノ為ニ焼カ
レタリ

捕虜ノ仕末ニ困リ、恰モ発見セシ上元門外ノ學校ニ收容セシ所、一四、七七七名ヲ得タリ、
斯ク多クテハ殺スモ生カスモ困ツタモノナリ、上元門外ノ三軒屋ニ泊ス

◇十二月十五日 晴

捕虜ノ仕末其他ニテ本間騎兵少尉ヲ南京ニ派遣シ連絡ス
皆殺セトノコトナリ
各隊食糧ナク困却ス

◇十二月十六日 晴

第13師団高級副官 歩兵中佐 伊藤平八

相田中佐ヲ軍ニ派遣シ、捕虜ノ仕末其他ニテ打合ハセヲナサシム、捕虜ノ監視、誠ニ田山大隊大役ナリ、砲台ノ兵器ハ別トシ小銃五千重機輕機其他多数ヲ得タリ

◇十二月十七日 晴

晴ノ入城式ナリ

車ニテ南京市街、中山陵等ヲ見物、軍官学校ハ日本ノ陸士ヨリ堂々タリ、午後一・三〇ヨリ入城式祝賀会、三・〇〇過ギ帰ル

仙台教導学校ノ渡辺少佐師団副官トナリ着任ノ途旅団ニ来ル

◇十二月十八日 晴

捕虜ノ仕末ニテ隊ハ精一杯ナリ、江岸ニ之ヲ視察ス

◇十二月十九日 晴

捕虜仕末ノ為出発延期、午前総出ニテ努力セシム

軍、師団ヨリ補給ツキ日本米ヲ食ス

《下痢ス》

移動

◇十二月二十日 晴

第十三師団ハ何故田舎ヤ脇役ガ好キナルニヤ、既ニ主力ハ鎮江ヨリ十六日揚州ニ渡河シアリ、之ニ追及ノタメ山田支隊モ下関ヨリ渡河スルコトトナル

午前九・〇〇ノ予定ノ所一〇・〇〇ニ開始、浦口ニ移リ、国崎支隊長ト会見、次イデ江浦鎮

ニ泊ス、米屋ナリ

◇十二月二十一日 晴

午前一〇・〇〇出発、道路到ル所橋落チシ為メ渉ラズ、江北ノ村落一変、蒙古ノ觀アリ、土

ト藁葦キニテ牛糞ヲ壁ニ塗セリ

東葛鎮ニ泊ス、物資モナシ、又支那兵ノ焼キタル所多シ

滁県駐留

◇十二月二十二日 晴

午前九・〇〇出発、相変ラズ丁寧ニ破壊セル橋梁ニ時間ヲ過シ、烏衣街ニテ警備中隊ヲ歩兵第65聯隊ト歩兵第104聯隊ト交代シ、約一里前方迄師団ノ車ニ迎ヘラレ午後三・三〇頃滁県ニ着、師団司令部ニ到ル、夜師団司令部ノ歓迎会ニ列ス

◇十二月二十三日 雨

滞在シテ師団トノ打合ハセ、諸整理ニ当ル、前夜留守師団ノ小宮參謀来リ色々話ス《穰ニノ手紙ヲ見ル》

新任地竜磯ハトテモヒドキ寒村ニシテ、宿営力モ物資モナキ故、車輛ノ通ズルマデ而シテ二十六日ニハ師団ノ慰靈祭アルコトトテソレマデ当地ニ留ルコトトス

久振リノ雨ナリ、小宮參謀ニ手紙ヲ托ス

◇十二月二十四日 午後ヨリ晴

終日滞在、十日以来ノ日誌ヲ整理ス、新年ノ「東日」ニ出ス色紙ヲ書カサレタリ、「尽忠報

「国」ト書ク

一、予後備兵ノダラシナサ

1、敬礼セズ

2、服装 指輪、首巻、脚絆ニ異様ノモノヲ巻ク

3、武器被服ノ手入レ実施セズ赤錆、泥マミレ

4、行軍 勝手ニ離レ民家ニ入ル、背囊ヲ支那人ニ持タス、牛ヲ曳ク、車ヲ出ス、坐リ寝ル（又銃ナドスル者ナシ）、銃ハ天稗

5、不軍紀 放火、強姦、鳥獸ヲ勝手ニ撃ツ、掠奪

二、辛苦

1、水

御茶モ直ニ飲マズ若干経テ飲ムヲ可トス、茶碗ノ底ニ泥沈澱ス、風呂ニモ静カニ入ル、然ラザレバ底ヨリ泥雲浮ビ来ル

浦鎮ノ水一番悪シク、翌日弁当ノ色青黒カリキ、弁当トナリシ冷キ飯ハ臭シ、

二度位沈澱サセテモ泥多シ

初メクリークノ側面ヲ掘リ、又ハ雨水ヲ用キシコトアリシモ、最近ハカカルコトハナシ

茶碗ノ底ニハ少時ニシテ泥溜ル、酸味アルモノ多シ

2、南京米

ボソボソ、赤キモノ最モ不良ナリ

兵ハ若干ノ糯米ヲ混入シテ食ス（有レバ）

3、副食物 初メ何モナク、江陰近クナリ鶏許リニシテ、今ニとさか生ユルゾト言ヒシガ、

最近ハ鶏少ク豚ノミナリ（玉子ハ何時モナシ）

野菜ハ最初菜ヲ得テ喜ビシガ、最近菜許リニテ閉口ナリ、タマニサツマ、ネギヲ得ルノミ

4、便所 四方ヲ人ニ取り巻カレ陣地ヲ探スニ困難、概シテ日本兵不潔

5、寢床ハ藁、ゴミ多シ、最近ハ支那人ノダブル寢台

一、辛苦ノ最大ハ、行軍時ニ於ケル道路ノ不良、橋梁ノ不良ナリ

追撃間、橋ヨリ馬ノ落ちル様、脚ヲ没スル泥濘、今以テ深刻ナル記憶ナリ

杖ヲ持テル兵多カリシモ、何所トハナシニ無クナリヌ、之レ明カニ行軍ノ難易ヲ語ルモノカ

我が陳家宅ノ竹杖、屢々王家橋ヨリ櫓網灣ニモ往復シ、長寿橋宅ヨリノ大進撃ニモ参加、遂ニ南京ヲ経テ浦口鎮迄百数十里ヲ供セシガ、突減リト、碑城鎮ニテ馬ニ踏マレテ割レシタメ、遂ニ割愛、浦鎮ヨリ朱檀ノ棒ニ換ヘタリ

二、煙草ノ苦、之ハ今トナリテハ笑ヒ草ノ一ツナランモ半分ノ吞ミサシヲ捨テズニ馬兵ニヤリシガ如キ、実ニ真剣ノコトナリキ

○抗日教育ノ徹底

一、到ル所ノ民家ニハ国民教育資料トシテ、「瓦斯防護」、「歩兵操典」、「防空、戦車、軽機、測図等々、初等士官学校教育程度ノ単行本アリ

念ノ入りシ家、インテリノ室ニハ、「野外要務令」、「築城教範」、「射撃教範」等ヲ備フ

二、小学校其他ノ壁書、道路ノ宣伝皆然ラザルナシ、倭奴、鬼子

三、活動写真ノ広告、エロ本ノ中ニモ必ズ抗日ノ記事ヲ発見セザルナシ、暴日侵略暦日、年表、或ハ記事、画面、映画等々、戦争ニ関スル画報ニテモ、滄県ノ家ニテ見タル丈ケニテ、

「血戦画報」、「戦争画報」、「抗戦画報」、「抗敵画報」、「抗戦撮影集」ト各種アリ

四、文字ノ国、寢室ニ「好合百年」「春安夏泰秋吉冬祥」

○徴発ノ不仕鱈ハ、結局ヲフベキモノヲ与ヘザリシ悪習慣ナリ

○徴発ニ依リテ、自前ナル故、或ル所ハ大イニ御馳走ニアリツキ、或ル所ハ食フニ食ナシノ状ヲ呈ス

先ニ処女地ニ行ク隊ノミ、ウマキコトヲスルコトトナル

○兵ノ機敏ナル、皆泥棒ノ寄集リトモ評スベキカ

旅団司令部ニテモボヤボヤシ居レバ何ンデモ無クナル、持ツテ行カル、馬マデ奪ラレタリ

◇十二月二十五日 晴

任地朱竜礮ハ余リニヒドク釜マデ携行ヲ要ストノコトニ、自動車ノ通ズルマデト参謀長ト話シ合ヒテ当地ニ留ルコトトセリ（師団長ハ南京軍司令部ニ赴ク）、午後民子斎藤一同トシテ南京陥落ノ祝電届ク、何トナク涙出デウレシサニ堪ヘヌモノアリキ

ナハ市長、広島市長、福島市長、宮城県知事、仙台国防婦人会長ヨリノ祝電ニ接ス夜「朝日」記者横田省巳氏ノ凱旋ヲ送ル別宴ヲ開ク

◇十二月二十六日 晴

午後一・〇〇ヨリ滁縣城外広場ニテ合同慰霊祭ヲ行ハル

各隊長（歩兵聯隊長ハ軍旗ヲ奉ジ）参集、壯嚴ニ行ハル、大崎八幡ノ畑宮司神主トシテ式ヲ取行フ、直衣ノ下ヨリ軍服ヤ軍靴ノ出テ見ユルモ戦場ラシクテ面白シ

我旅団ハ司令部井砂政雄伍長、歩兵第104聯隊、歩兵第65聯隊戦死五四五、戦傷死七一、病死二二、合計六三九柱ノ英霊ナリ

併セテ軍馬約千六百ノ英魂ヲモ弔フ、午後三時半ヨリ会食
会議ニテP招致問題アリ、大反対ス

◇十二月二十七日 曇

「朝日」横田記者、「東日」田中記者何レモ凱旋ストノコトニテ、家郷ニ信書ヲ托ス
師団命令ニヨリ旅団司令部ハ滁縣ニ止リ西地区ノ警備ヲ担当スルコトトナル、濟南占領ノニュースヲ聞ク

之レニテ吾等ノ駐留ニ変化ナキヤ、上海以來魚ヲ口ニセザリシガ歩兵第104聯隊第2中隊ニ尾ノ鮮魚ヲ贈リ来リ、初メテ刺身ヲ食ヒタリ

◇十二月二十八日 曇午後雨、夕雪

歩兵第104聯隊ノ慰霊祭ナリ、相田副官ヲ代理トシテ差遣ス

皆ノ心配リニテ室ニ暖炉ヲ備ヘ附ク、為スコトモナクテ設営ス

夕ヨリハ雪トナレリ、初雪ナリ

夜歩兵第104聯隊ニ行キアリシトテ相田中佐ノ当番貞子ヨリノ小包ヲ届ク、上海上陸以來民子ノ軍服ヲ受取りシ以來ノ初物ナリ、開ケルマデノ楽シカリシコトヨ、蓋シ殊勲ナリ

南京ニテ取りシ捕虜ノ神戸ノ支那料理屋ノ料理、同ジ豚ニテモ大イニ食シ得ルハ仕合せナリ

◇十二月二十九日 曇

午前八時半出発、吉原参謀同道ニテ全淑ノ歩兵第65聯隊慰霊祭ニ赴ク、全淑縣城ハ田舎町ナガラ滁縣ヨリハ纏リテ治安モ整ヒ、聯隊長ノ居ル所其他立派ナリ、紅梅ノ鉢、みかんきんかんノ鉢、南天ノ植込ミ等大ニ珍シカリキ

式後将校一同ト会食、本式ニ近キ支那料理やおはぎヲ御馳走ニナル

帰途腰鋪ニ於ケル第5中隊ヲ視察シ、大キナル鯉五尾ヲ貰フ

◇十二月三十日 晴

午後二・〇〇ヨリ市中、東門等ヲ視察ス

夜師団長幕僚ヲ招待シテ忘年会ヲ兼ネ、支那料理ノ御馳走ヲナス、蓋シ師団長ヨリ料理人居ル由御馳走セトノ強要ナリ、大シタ御馳走モ出来ザリシモ氣勢大ニ昂ル、何ント言フテモ深刻ナル印象ハ上海陣地戦ノ時ナリ

直衣^{ちし}この場合、神官の衣裳

Pは慰安婦の意

◇十二月三十一日 曇

大晦日ナリ

午前一〇・〇〇ヨリ歩兵104聯隊ノ朱竜礮ヲ視察ニ出カク

在滁泉第Ⅱ大隊副官ノ心遣ヒニテ、二里先キ迄五〇米置キニ歩哨ヲ立テ警戒シ呉レル、朱竜礮ニ至ル沿道、全然地形風色満洲ナリ、今後前進ノ困難思ヒヤラル

朱竜礮ハ寒村ナガラ善ク清潔ニ宿営シアリ、聯隊長以下討伐ニ出カケ留守ナリキ、昼食ノ馳走ニナリ氣ノ毒セリ

夜、野戦建築班ノ作り呉レタル風呂、木ノ角風呂ニ入ル、上海以来初メテ、否内地以来ノコトナリ、又日用品や御菓子ノ加給品渡ル、年越シナレバコソナリ

夕食、本部下士以上ヲ会シ年越シヲナス

田代部隊、施家集ニテ合計一〇〇〇ノ第101、102、48師ノ敗殘兵ト交戦、一五〇ヲ斃シ潰走セシム（一月一日報告）

両角業作 手記

南京大虐殺事件

幕府山東側地区、及び幕府山付近に於いて得た捕虜の数は莫大なものであった。新聞は二万とか書いたが、実際は一万五千三百余であった。しかし、この中には婦女子あり、老人あり、全くの非戦闘員（南京より落ちのびたる市民多数）がいたので、これをより分けて解放した。残りは八千人程度であった。これを運よく幕府山南側にあった厩舎か鶏舎か、細長い野営場のバラック（思うに幕府山要塞の使用建物で、十数棟併列し、周囲に不完全ながら鉄線が二、三本張りめぐらされている）——とりあえず、この建物に収容し、食糧は要岩地下倉庫に格納してあったものを運び、彼ら自身の手で給養するよう指導した。

当時、我が聯隊將兵は進撃に次ぐ進撃で消耗も甚だしく、恐らく千数十人であったと思う。この兵力で、この多数の捕虜の処置をするのだから、とても行き届いた取扱いなどできたものではない。四周の隅に警戒として五、六人の兵を配置し、彼らを監視させた。

炊事が始まった。某棟が火事になった。火はそれからそれへと延焼し、その混雑はひとかたならず、聯隊からも直ちに一中隊を派遣して沈静にあたらせたが、もとよりこの出火は彼らの計画的なもの

歩兵第六十五聯隊長・歩兵大佐 22期

で、この混乱を利用してほとんど半数が逃亡した。我が方も射撃して極力逃亡を防いだが、暗に鉄砲、ちょっと火事場から離れると、もう見えぬので、少なくとも四千人ぐらいは逃げ去ったと思われる。私は部隊の責任にもなるし、今後の給養その他を考えると、少なくなったことを却って幸いぐらいに思つて上司に報告せず、なんでもなかったような顔をしていた。

十二月十七日は松井大將、鳩彦王各將軍の南京入城式である。万一の失態があつてはいけないというわけで、軍からは「俘虜のものを『処置』するよう」——山田少將に頻繁に督促がくる。山田少將は頑としてハネつけ、軍に収容するよう逆襲していた。私もまた、丸腰のものを何もそれほどまでにしなくともよいと、大いに山田少將を力づける。処置などまっぴらご免である。

しかし、軍は強引にも命令をもって、その実施をせまったのである。ここに於いて山田少將、涙を飲んで私の隊に因果を含めたのである。

しかし私にはどうしてもできない。

いろいろ考えたあげく「こんなことは実行部隊のやり方ひとつでいかようにもなることだ、ひとつに私の胸三寸で決まることだ。よしと期して」——田山大隊長を招き、ひそかに次の指示を与えた。

「十七日に逃げ残りの捕虜全員を幕府山北側の揚子江南岸に集合せしめ、夜陰に乗じて舟にて北岸に送り、解放せよ。これがため付近の村落にて舟を集め、また支那人の漕ぎ手を準備せよ」もし、発砲事件の起こった際を考え、二個大隊分の機関銃を配属する。

十二月十七日、私は山田少将と共に軍旗を奉じ、南京の入城式に参加した。馬上ゆたかに松井司令官が見え、次を宮様、柳川司令官がこれに続いた。信長、秀吉の入城もかくやありなんと往昔を追憶し、この晴れの入城式に参加し得た幸運を胸にかみしめた。新たに設けられた式場に松井司令官を始め諸将が立ち並びて聖寿の万歳を唱し、次いで戦勝を祝する乾杯があった。この機会に南京城内の紫金山等を見学、夕刻、幕府山の露营地にもどった。

もどいたら、田山大隊長より「何らの混乱もなく予定の如く俘虜の集結が終わった」の報告を受けた。火事で半数以上が減っていたので大助かり。

日は沈んで暗くなった。俘虜は今ごろ長江の北岸に送られ、解放の喜びにひたり得ているだろう、と宿舍の机に向かって考えておった。

ところが、十二時ごろになって、にわかに同方面に銃声が起こった。さては……と思った。銃声はなかなか鳴りやまない。

そのいきさつは次の通りである。

輕舟艇に二、三百人の俘虜を乗せて、長江の中流まで行ったところ、前岸に警備しておった支那兵が、日本軍の渡河攻撃とばかりに発砲したので、舟の舵を預かる支那の土民、キモをつぶして江上を右往左往、次第に押し流されるという状況。ところが、北岸に集結

していた俘虜は、この銃声を、日本軍が自分たちを江上に引き出し

て銃殺する銃声であると即断し、静寂は破れて、たちまち混乱の巷となったのだ。二千人ほどのものが一時に猛り立ち、死にもの狂いで逃げまどうので如何ともしがたく、我が軍もやむなく銃火をもってこれが制止につとめても暗夜のこととて、大部分は陸地方面に逃亡、一部は揚子江に飛び込み、我が銃火により倒れたる者は、翌朝私も見たのだが、僅少の数に止まっていた。すべて、これで終わりである。あつけないといえばあつけないが、これが真実である。表面に出たことは宣伝、誇張が多過ぎる。処置後、ありのままを山田少将に報告をしたところ、少将もようやく安堵の胸をなでおろされ、さも「我が意を得たり」の顔をしていた。

解放した兵は再び銃をとるかもしれない。しかし、昔の勇者には立ちかえることはできないであろう。

自分の本心は、如何ようにあったにせよ、俘虜としてその人の自由を奪い、少数といえども射殺したことはへ逃亡する者は射殺していいとは国際法で認めてあるが……なんといっても後味の悪いことで、南京虐殺事件と聞くだけで身の毛もよだつ気がする。

当時、亡くなった俘虜諸士の冥福を祈る。

日記

昭和十二年十二月

十二日 午後五時半、蚕糸学校出發。午後九時、倉頭鎮着、同地宿宮。

十三日(晴) 午前八時半出發。午後六時、午村到着、同地宿。敗残兵多シ。

南京二各師団入城。I大隊烏龍山砲台占領。

十四日 午前一時、第五中隊及聯隊機関銃一小隊幕府山二先遣。

本隊八午前五時、露营地出發。午前八時頃、第五中隊ハ幕府山占領。本隊ハ午前十時、上元門附近ニ集結ヲ了ル。午前十一時頃、幕府山上ニ二萬歳起ル。山下ヨリ本隊之二答ヘテ万歳ヲ送ル。

(以下原文は横書き)

十五日 俘虜整理及附近掃蕩。

十六日 同上。南京入城準備。

十七日 南京入城参加。Iハ俘虜ノ開放準備、同夜開放。

十八日 俘虜脱逸ノ現場視察、竝ニ遺体埋葬。

十九日 次期宿营地ヘノ出發準備。

二十日 晴 九時半出發下関ヲ經テ浦口ニ渡河。

二十一日 晴 西葛鎮ニ宿宮。

二十二日 晴 全椒ニ向ヒ入城。同地警備。(途中山田少将ハ滁県ニ)

二十三 警備方針決定。中隊長以上ニ必要ノ指示ヲ与フ。

二十四 附近視察。

二十五 慰靈祭ノ為滁県ニ出發(軍旗ヲ奉ジ)、同夜同地着。

二十六 師団慰靈祭。(老陸宅ノ要図ガ天覽ニ供セラレ、且ッ

朝香宮軍司令官ノ室ヲ飾ルモノハ此要図一枚アルノミニテ他何物ナシ)

二十七日 全椒ニ帰還。

二十八日 慰靈祭場及陣地偵察。

二十九日 慰靈祭。(山田少将及師

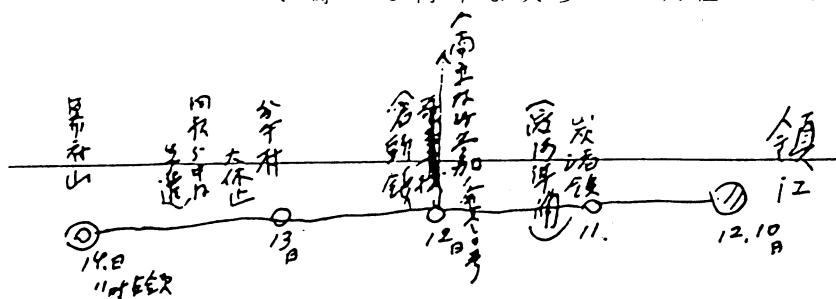
団代表トシテ吉原作戰主任參謀來着)

三十日 師団會議事項下達。

三十一日 陣地視察。此夜杉山陸相、樺村中隊長ノ未亡人ノ手紙ヲ受ケル。

(注)

この記録は、第十三師団歩兵第六十五聯隊長両角業作大佐が、終戦後しばらくしてまとめたものである。昭和三十七年一月中旬、求めに応じ阿部輝郎に貸し与えられたものを筆写し、保存しておいた。原文はノートに書かれ、当時の日記をもとに書いたとい



荒海清衛日記

歩兵第六十五聯隊第一大隊本部・上等兵

◇十一月廿一日

午前九時発す。道路悪く歩行困難なり、馬などは全く二尺位はぬかる、たはれる馬は数知れず。しゃかこうちんより二千位にて昼食す、三中隊の行李監視と九名と一所となる。十二時昼食す。二時宿につく、敗兵一名捕へて銃殺す。余り遅く宿につかれない、敗兵はかまどの中に居たと云う若い者だった。今日も早く宿につく、自分の思ふまゝに行かぬので仕方がない。行李監視の人と一所に宿る。

◇十一月廿二日 晴

昨夜より晴れて、珍らしく月の顔を拝す。今朝は早目に起きて食をすます、八時出發す。午後三時半頃まで行軍す。今日もおいつけずにとまる。快晴のため秋季演習の様な気がする。夜は杉本と云う人暴行せしため心配す。

◇十一月廿三日 曇り

本日九時發行軍す。十時頃より休止。二山郷にて昼食す。馬多きために行軍不可能なり。今日もおいつけないらしい、午後四時宿舎につく。立派な家だ皆家につく「以下抹消不明」家だったのだ、子

供の靴下が有った、子供を思ひ出して？ 泣かされる。□□□□。可愛想に嫁だか□□した、子供が目を丸くして見て居る、若し日本だったらと思うと？ 早く大隊においつきたいことで一ぱいだ。夜、餅を見つけて「おはぎ」をなしたり、砂糖は町で皆二、三斤位づゝ持参したから大したものだ。

◇十一月廿四日

本日午前二時起床、早目に起きたがまだ暗い。飯を食ふのも起きてこない者が有る。今日で十日の行軍だから、全くやり切れない。うまい者は食ひ次第だから大したものだ。午前九時出發す、まだ前進する部隊がない。午前十一時聯隊本部に着きて、聯隊長殿に渡す手紙を渡し、昼食す。梅田班長に会う嬉しい、努力のかい有りと思う。大隊本部は旅団と一所なりと？ 正午聯隊本部へ井上班長、梅宮班長来られた。聯隊は零時三十分出發す。

今日より師団の予備となる。午後四時三十九分聯隊大休止、軍旗を拝す、感激の涙流る、一生涯忘る能わず。至誠堂と云う所まで、行くわけだったけども、行かれず又引戻す。午後十二時師団に連絡に行く、夜は寒い夜だ。

◇十一月廿五日

朝起きて見ると、霜か真白に成って居る。支那の霜も格別だ。正午色々な料理をして食う。「ボクモチ」を作る、甘い事甘い事。午後大隊本部にかへる。今日斉藤班長殿大隊につかれた、俺と比較して早いことに驚く。俺も気はもめたなれども、他部隊と歩くのだから仕方がない。

◇十一月廿六日

高塘、南方無名部落にて宿す。午前十時参拾分出「発」す、第一大隊は師団の先頭にて〇〇に向ふ。好天気なり、歩行良けれども、足少し痛む。夕方聯隊に連絡に行く。三千米位も有るのでひどい。

◇十一月廿七日

午前八時出發す。聯隊におくれて別に行動す、瑾塘鎮にて昼食す。時に十二時、一時間の休止なり。今日は朝聯隊本部より、五時半命令を持ちてかへりたり。足が痛む。桑名上等兵は聯隊へ行く。午後四時頃清涼鎮に宿営す。

◇十一月廿八日

午前五時起床、炊事当番。午前九時師団司令部へ伝令に参る。午前十一時到着。午後〇時参拾分清涼鎮に着す。六橋に宿す、旅団の予備。新高山を占領す。

◇十一月廿九日

本日午前六時起床。午前出發せんとすれども、まだ色々の事で出發せず、午後四時四拾分出發す。五時半南江鎮に着す。昨日より右の山上に砲撃す、五千米位有り。今日頭が痛んでこまる、何のくそ元氣を出せ。今日第一線に出るらしい。十時□□飛行機落ち。

◇十一月三十日

午前七時出發とのことにて、大急ぎにて朝食をする。昼食はまだ煮え切らぬのをつめる。弾がびんびん来る。大隊は色々の仕「事」につく。九時現在まだ出發せず（南閭鎮現在聯隊本部前）タンクも聯隊に協力すること。砲台には三十六門の砲有るとのことなり。高射砲も有るらしく、友軍の飛行機をうつ。無名部落にて宿営す。本月も今日限りなり、行軍も今日で十八日。二、三大隊は一線に有りて百〇四と競争なりと、いづれが勝つや？ 一大隊は何の手柄もなし。

◇早十二月一日と成りぬ。

二ヶ月の月日、神仏の護りにて生命を失せず神に仏に感謝す。これ故郷にて無事を祈る、皆の誠心かも知れず。朝無名部落八時参拾分發、千米位の処へ行く。途中一名負傷す。渡河材料を前の部落まで運ぶ。午後四時江陰城東角十字路に来たる。夜は敵は時々来たり、機銃にて射す、損害五、六百名なり。

◇十二月二日

朝は銃声やまず。午前十時出發、入城せんとするも、我大隊は鐘山占領すべしとの命にて鐘山に向ふ。十時四十分占領す、敵なし。

揚子江も眼下に見ゆ。齊藤隊万歳を叫ぶ。時に十時五十分なり、江陰城眼下に見て。鐘山にて聯隊集合の上、聯隊長殿の感謝激励の言葉有り、軍旗を奉拝す。時に午後一時頃なり。六時山麓にて集合、休み。宿舎を持つ。

◇十二月三日

今日は此の宿舎にて休むなり。俺の銃と背囊だけ有ったり、日用品其の他なし。午後糧秣受領に行く。夜非常呼集有ったり、大隊長を憎む者有り、大隊の協同心かくる如し。十時二十分なり、十二時寝に付く。侍従武官御「差」遣になる。

◇十二月四日

今「日」は八時頃起きたり、昨夜の寝不足にて何となく気分悪し。何もなく平凡となり。現在地鐘山の西北地。昨夜は小火有ったり。

◇十二月五日

本日午后、大隊本部の近くに火災有り、消火の騒ぎでひどし。炊事当番やら何かと多忙だった。火災には本部に来はしないかと心配した。夜補充員九時半に各中隊に二十五名づゝ入れられたと。

◇十二月六日

朝本部八時半集合、鐘山の中腹にて聖旨伝達式有り。其の後に補充員の分配有ったり。奥川より五十嵐喜作、五十嵐留吉二名来られたり、時に十一時。補充員三百七十名、聯隊千八百六十七名。

今日午前七時五十分発す。十時敵と対す、行動開始す。砲台付近にて宿営す。桜田班長殿四十六名捕。

◇十二月十四日

朝四時出発。三十分位にて捕虜千名、十時頃二千名位有り。計一万五千名位。

◇十二月十五日

今日一日捕虜多く来たり、いそがしい。

◇十二月十六日

今日南京城に物資徴発に行く。捕虜の廠舎失火す、二千五百名殺す。

◇十二月十七日

今日は南京入城なり（一部分）。俺等は今日も捕虜の始末だ。一万五千名、今日は山で。大隊で負傷、戦死有り。

◇十二月十八日

色々雑用に服す。第四次補充員来たる（三名大隊へ）。

◇十二月十九日

今日は何事もなく終り。南京見学も駄目だ。

◇十二月二十日

◇十二月七日

午前七時整列出発す。霜、雪の如くにおけり。聯隊も出発。午後四時半龍くつに着、宿す。足が痛む。

◇十二月八日

七時半出発す。足が痛んで歩けない。

◇十二月九日

孟何城通過。

◇十二月十日

朝七時三十分発。日本語を話せる人有りたり十名程。鎮江通過、二里程前進し宿す。電燈が有った（せつ営す、七時頃までかゝる）。

◇十二月十一日

午前七時三十分発。行軍す。今日は七、八里も行軍して夕方宿営す。

◇十二月十二日

南京東南四里の地点に着す。午前八時徴発に出る。午后八時出発せしなり。

◇十二月十三日

朝五時起床。渡河のため出発す。午前十時乗舟。午後一時出発す。浦口鎮丁字路。設営のため出発す。午後三時頃着す。今夜は良い宿舎だ。

◇十二月二十一日

今日は朝五時起床、設営のために出発す。山下、荒井、俺。西葛鎮。

◇十二月二十二日

西葛出発。七時。全椒へ。午後一時半頃着。良い町だ。バクチクデ大騒ぎ。

◇十二月二十三日 雨。

本日久し振りで雨だ、何となく気分が悪い。午後より皇太子殿下誕生記念日のため、皇居遙拝す。

◇十二月廿四日

久保木四郎様と朝炊事当番のために多忙なり。一日の雨で今日はすっかり天気となる、皆舎外の清潔だ。夜は大隊浦口へうつるとのことをきく、暫くおちつく事が出来ると思ったのに、皆大に悲観した。

◇十二月廿五日

今日は朝からの馬の徴発に出たけれども居らない。夕方三頭見付け。おちついたと思ったのも少しで又移動とは。こゝも今晚きり

か。三中隊で一名、支那人にやられたとか。

◇十二月廿六日

本日午前七時三十分発、設営のため出発す。西葛鎮焼失のため永寧鎮に宿す。割合に良好なり。

◇十二月廿七日

本日八時出発、江浦鎮に向ふ。午後「前」十一時半頃到着す良い町だ。町人は市場を開いて居った処だった全く大勢なのは驚いた。大隊本部も良い処で有る。この良民も夕方に成ったら皆逃げてしまった。徴発も中々出来ない。良民が気の毒に成ってしまう。こゝは江浦県の有る処だ。

◇十二月廿八日

色々の徴発。

◇十二月廿九日

◇十二月卅日

◇十二月卅一日

今日は餅をついた。一斗五升位。支那の国へ来て餅を搗いて食へるとは。門松も立てた。色々の下給品が有った。

大寺 隆 日 記

歩兵第六十五聯隊第七中隊・上等兵

十二月十二日

今日の行程、常州より丹陽まで十二里を、近道の九里の新道を行く。道が悪くて本隊は非常に骨折る、我々は輜重隊の車にゆはへて半日来た。昼食は齊藤さん（小笠原の読売新聞の支局に努めて居る人）や、丸山さん等と昼食を共にし、菜を沢山頂く。トン肉や缶詰等御馳走になり、羊かん二本やったら缶詰二ヶ呉れた。午后からも又後にゆはへたが馬がひどく汗をかくので、又ポツポツ四人で引いて行く。道が悪くてひどい目に合ふ。

夕方また輜重隊に追着き、齊藤さんと一緒に行く、齊藤さんの馬はセン痛で予備馬になって居た。話をしながら赤い夕日のしづむ頃ラマ塔の下に来、日が暮れて齊藤さんに別れる。丹陽は今盛んにもえて居る。くらくなつてどこに行つて良いかわからない。大変の道がわかり城内に入つて行つたが、至る処焼えて居て泊る様な処がない。橋の上で待ち又橋の上に待つて居たが、ポツポツ城内に一里も入つてやうやう宿舎に着く、大谷君は今日も先に来て居た。こゝは未だ兵隊が入らないらしく酒が沢山あり皆元氣だ。俺は郡君に案内されて入浴する。

寝たのが十二時だ。部隊の到着は十一時頃だった。今晚の宿舎はまづいい処だ。



荒海日記原文（検閲ずみの印がある）

十二月十三日 丹陽、鎮江、八里

寒くて四時頃目を覚す。今朝は各人毎に飯を炊き、八時整列、今日の行程、丹陽より鎮江まで最後の行軍だ。今日四人組は菅野さんがぬけて三人で部隊の後方に着いて来る。今日からは各個に出ると敗残兵が居つて危険と云ふわけで、道は所々新道が悪いだけで良かった。正午頃から部隊の前方に出る、ほこりでもと一緒に行く。六時過ぎ鎮江の宿舎手前に着き、身をふき飯盒などを洗つて宿舎に着く。こゝは江蘇省の行政府で六五が全部入る。炊事が大混雑、MG二分隊は俺一人で何の準備も出来ない、高貞さんが来て居た。部隊が来る前に郡君と外国式の一装用の入浴をする。部隊は八時頃来る。それから炊事だから十時過ぎまで大さわぎで夕食をする。コゝニツクト到ル所が火災だ。

行軍途中はねむいし宿舎に着くと電気がなく、日誌のつける時がなかったが、今日は電氣があるので十一時まで二三日分の日誌をつける。ロシヤの酒を一口して驚いた、カラくて。

十二月十四日

今日以後の予定がわからなかったが、今日からいよいよ南京に向ひ、両角の本隊に追急する事になる。食量は今日からなした、地方

から徴発して行かなければならない、第四中隊は徴発中隊だ。

午前八時整列してサイダー徴発の使役として約一里もつれて行かれたが、折悪しく昨夜の中にビール会社が焼かれて駄目だった、ビンの割れる音が砲声の如きこえた。其の向側に砂糖倉庫があった、其の中には砂糖が一ぱいに入っていた。皆でしかたなしに少しづつ持って帰る。

部隊はビールの来るのを待って居たのに機待を裏切られてがっかりして出発する。午前十時だ、途中天野さんの居る本部の近くを通ったが残念にも会へなかった。

高田の山砲が宿営して居って、丁度良くそこで休憩して面会して居る人もあった、こゝで中隊長から敗残兵に充分注意する様注意されて出発、町を出る。今日から携行食がない、正午頃まで宿舎に着かなければならないの中に中々はかどらない。

十一時頃一〇四の先に来た者に会ふ。高橋行雄、小形亀一郎、橋本源内、田村喜久雄、熊谷清吾、高橋虎男等に順々に会ったが、オーと声をかけるだけだった。熊谷は水砂糖をくれて行った。

六五のみ南京に向ひ、後は鎮江に残り揚子江の向ひ側に渡る事になった、その部隊に合するのだらう。午後の行軍途中陵線上に敗残兵らしき者が出て射撃をする。

四時頃部落を見付けてこゝに泊る事になり、部隊は一憩して将校のみに出て偵察しつゝ宿舎を割る。俺は伝令。宿舎に着くと思ひ思いに徴発に出る。米は第四中隊があつめたが各人がやうやう一合、今夜は各人がもって居た二合の米を出し合つて、明朝までまに合はさねばならぬ。我々は五名で遙の部落に徴発に行き、アヒル二羽、ヤギ二匹、ロバ一頭徴発して来る。それから料理を始め夕食が

をきめると徴発に忙し。部隊の着くまでに徴発を終る。

米、豆腐、小豆、砂糖、ブタ、芋カマ、野菜等、部隊も又いろいろ徴発して来た。分隊では豚、野菜、米、鶏、芋等を徴発して来たので、今晩は相当に御馳走があった。夕方西白河と相馬から来て居る者の所に行き（大谷君と）夕食を御馳走になり、砂糖を貰うて来る、分隊では夕食を済して居た。それから又食ふ、芋は食ふ、今日はガサ食ってしまった。今晩は郡君が泊りに来て二人で寝る、七時半だった。敗残兵が出て二人殺す、十六聯隊の一部が夕方敗残兵を掃蕩して来た。

今晩は衛兵は勿論厳戒、下士哨まで出して警戒、MGの第二小隊の二分隊では夜半火を出し、日本刀を焼いた者、雑糞、水トウ、飯盒、鉄兜等を焼いた者があつた。

十二月十七日

五時起床、今朝は鶏汁だ。郡君が来たので御馳走してやる。

七時四十分整列、上元門まで約六里、途中には敗残兵又は地雷があるから注意せよ、との中隊長の話あり、敗残兵が居り小銃隊の尖兵が射撃す。足の調子は非常に良かったが天気が良すぎて汗が出る、皆水トウの水を不足させクリークの水を呑み始めた。今日は支那には珍しく山又山、峠ばかりを歩いて居た。時々小銃弾が頭の上をかすめて行く、昼食前に殺されて居る将校らしき者が、二百円ばかり持って居り皆で分ける、俺も四十五円ばかり貰った。

午後三時頃、今日朝香宮及松井大將が来られて南京入城式が行はれたそうだが、飛行機が三機編隊で九組も帰った。峠を上りあげると南京の城が見える、もう少しだと元氣を出す。午後五時両角部

八時だ。この部落は高資鎮。

十二月十五日

朝食は昨夜残してあつた汁で一食分の飯を半分食ふ。出発は八時三十分。

広漠たる広野も果て、今日は山道だ、途中で騎兵の十七大隊に会ふ、鎮江に帰へって警備に付くのだと云つて居た。昼食を見ると米の中にはヒエやキウリの種、菜ごみ等が沢山入って居て、昼は食へない飯だと云つて笑った。

午後の道は左側の山には延々と交通壕が掘ってあり、所々にはコンクリーのトーチカが造つてあつた。飯が少ないので空腹を覚えカンパン二つ、み郡君と食つた。今日の宿营地、龍潭鎮に着いたのが五時頃だった。

こゝに着く少し前で敗残兵を一人殺す。こゝは大変大きなセメント会社だ。今晩の徴発は米二斗、アヒル二匹、豚二匹と菜、チャン酒、味噌に醤油だ。それに小豆をみつけて来てシルコを作る、これが又うまかつた、小豆飯にアヒル汁で舌鼓を打つ。今晩は皆寝台の上に寝る。

十二月十六日

徴発隊として午前七時二十分整列、部隊は八時三十分整列。七時に起きたのであわを食つて出て行く。途中道を間違へて半道ばかり反対の方に行く、豚や米芋の類徴発する物資沢山あり徴発容易。昼食の小豆飯はかたくて不美味だった、然し豚のツクダ二は美味しかった。午後二時半東流鎮に着く龍潭鎮から約四里、町に着き宿舎

隊の屯する揚子江沿岸に着き、糧秣をもらつて宿舎に着く。夕方から風が吹き、小雪さへ加はり寒い夜になった。我々之ねぐらは六尺位の棚に六人づゝだ。きゅうくつではあつたが割合に暖かだった。

十二月十八日

今朝は昨日に変わる寒さ、風は吹く小雪は降る吹雪だ。七時過ぎ起きて中山さんと二人で朝食をたいて食ふ。

整列は八時半と云ふのであつて、整列する。九時整列を終り閱兵を終り訓辞がある。それから佐藤曹長により各隊に配属せらる、俺は松沢准尉殿の居る第七中隊に入れて貰ふ、郡君も一緒だ、第七中隊は現在、軍旗中隊だ。中隊に来て俺は指揮班、郡君は一小隊四分隊、大谷君も三小隊に入る。

午前中に大隊本部に行き後藤大隊長の訓辞、帰へって中隊長矢本中尉殿の訓辞ありて各分隊に別れる。午後は皆捕リョ兵片付に行つたが俺は指揮班の為行かず。昨夜までに殺した捕リョは約二万、揚子江岸に二ヶ所に山の様に重なつて居るそうだ。七時だが未だ片付け隊は帰へて来ない。

俺は飯前に、直ぐ傍にある南京の要塞を見に行き、その完備せるのに驚いて帰る。然しあれ程完備して置いてほとんど使はずに逃げてしまったのだ、第八中隊と第五中隊が占領したものらしい。

十二月十九日 幕布山要塞

午前七時半整列にて清掃作業に行く。揚子江岸の現場に行き折重なる幾百の死骸に驚く、石油をかけて焼いた為悪臭はなはだし。今日の使役兵は師団全部、午後二時までかゝり作業を終る。昼食は三

時だ、直ぐに夕の仕度にかゝり五時半頃又夕食だ。今日捕リヨ死骸片付けに行き松川の菊地さんに会ふ。この要塞は馬尾山の要塞と云ふ。工兵隊らしい砲台の爆破をやる見事なものだ。バクフ山要塞。

十二月二十日 浦口鎮

午前九時三十分、軍旗を先頭に揚子江を渡り某方面に出発。

南京の波止場で家と邦叔父さんにはがきを出す。昼食は停車場構内、物凄く爆撃された跡だ（浦口停車場）、大隊が上陸するまで待ち午後二時出発、約一里位行軍して午后四時宿舎に着く。此処は今日まで四十一聯隊（福山）が駐屯して居ったが、食糧タバコが沢山あって一日位滞在したい所だった。事ム室では今晚はオハギをしたが、あんがあまりに甘すぎて皆もてあます、夜は南京豆で腹を悪くする位食ふ。夜半フト目を覚ましたが腹がきりきりと痛かった豆の為だらう。

十二月二十一日 西葛鎮

午前九時整列、里程六里、午前六時起床して朝食の用意、飯は餅米を入れてやったのでシッパイして、各人飯盒にて炊き直し。

忙しく整列、軍旗を迎へ第一大隊を前衛として出発、昨夜の豆で腹具合が悪い。途中橋と云ふ橋は焼かれて前進に非常に困難、自動車は全々通れず、工兵隊が一生懸命作業す。昼食は少しきりくへない。午後五時頃宿舎へ着く。井戸はなくなきないクリークの水で炊サン。今日で軍旗中隊を解除され、明日は先遣隊として敗残兵の居る町に行くべく新な命令をもらふ。

十二月二十二日 西葛鎮―全椒県、六里

先遣中隊は午前六時三十分整列にて、暗い道を通訳を先頭に村民に道案内させながら田圃道を只々前進、八時頃やうやう夜が明けて来た、天気が良く皆汗を流してついで来た。割合に歩度が急でひどいせいか大部分はニヤを雇った。途中拾時半頃通った部落では、火花をあげたり天婦羅其の他の菓子を作って歓送して呉れた。

一時四十分警備地全椒県に着く。通訳と一分隊を尖兵として城内を搜索、敗残兵の居なき事を知り先遣中隊は町のはずれまで前進して部隊の来るのを待つ。約三時間も待つ。其の間土民は旗を作り爆竹を持って来て大歓迎して呉れる、湯を持って来て呉れる者もある。五時頃命を受け城内に通訳を尋ねに行ったが、町中歩き廻り西端しで探し当てたが目的を達しなかった。五時半部隊は堂々軍旗中隊第七中隊を先頭に入場それぞれ宿舎に着く。今晚は支那人の一装用の入浴をする、郡君と一緒に。

十二月二十三日

午前六時半起床、七時点呼。朝の中に洗濯をする。

雨がぼろぼろ降って来た。昼食後郡君と一緒に町の方に徴発に行く、雨はぼろぼろ降って居る、途中目黒君と会ふ。帰る途中一大隊小行李に居る伏見さんの所に行き、色々御馳走になって帰る。今晚は又肉飯しで舌鼓を打つ。明日上海に行く人があるので、父と木村さんと山上にはがきを出す。

十二月二十四日

午前七時起床ラッパが鳴る。皆が云ふ、ラッパが鳴る様では異状

がないと、警備地も平温になったわけさ。

昨日の雨はからり晴れて又よい天気だ。今日は朝食後、天ぶらをあげて郡君所へ持って行き二人で風呂に行く。夜は将棋や花カルタをして十時頃ねる。

十二月二十五日

今日から食事当番を三名づゝ当てて、其の他の者は寝て居る事になる。朝食後事ム室の伝令控室を片付けたり、豚、野菜の徴発に出る。豚は大物四匹生どり野菜は一週間分も取る。こんな具合に毎日食ふ事にばかりかゝって居る。今日から食事は朝と夕の二回とする、其のかはり今晚はダンゴを造って、鈴木、大須賀の諸氏とタラフクに食ふ。

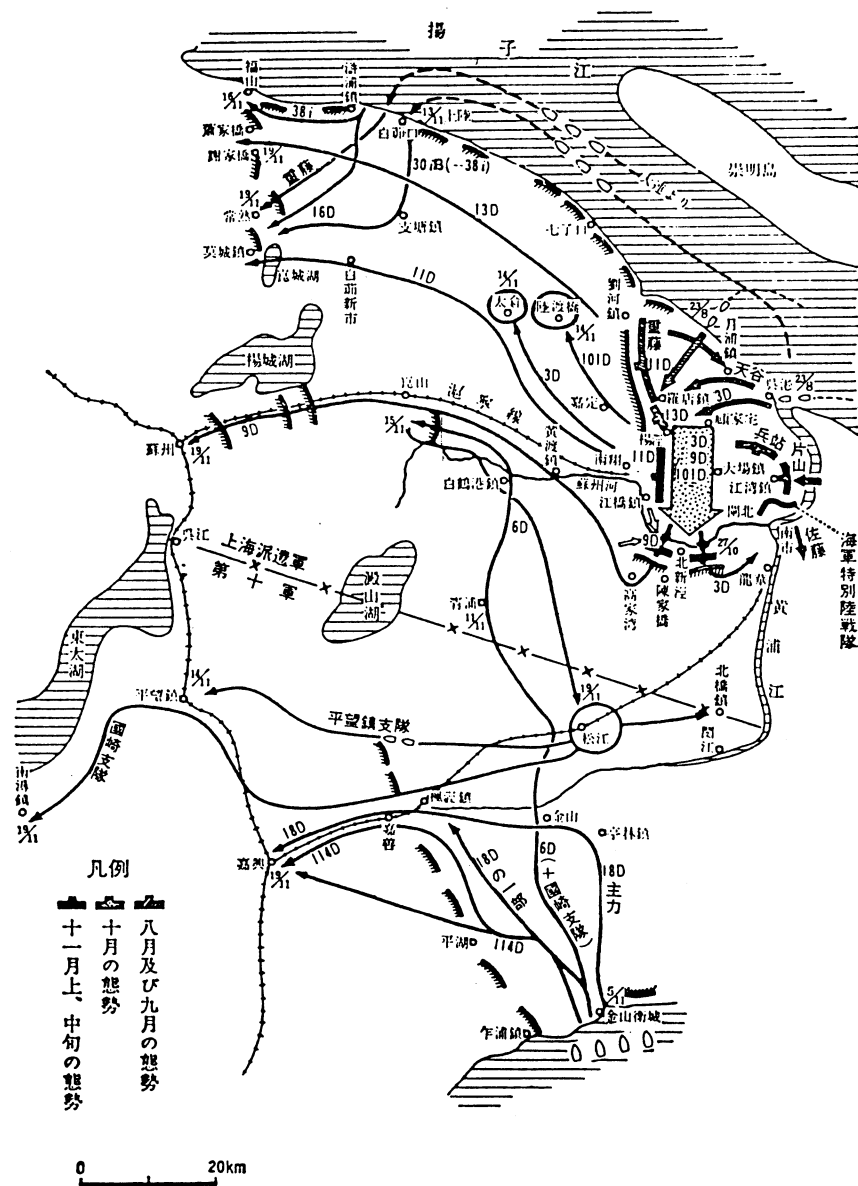


上海北西部・八字橋の激戦あと（佐藤振壽撮影）

菅原茂俊日記

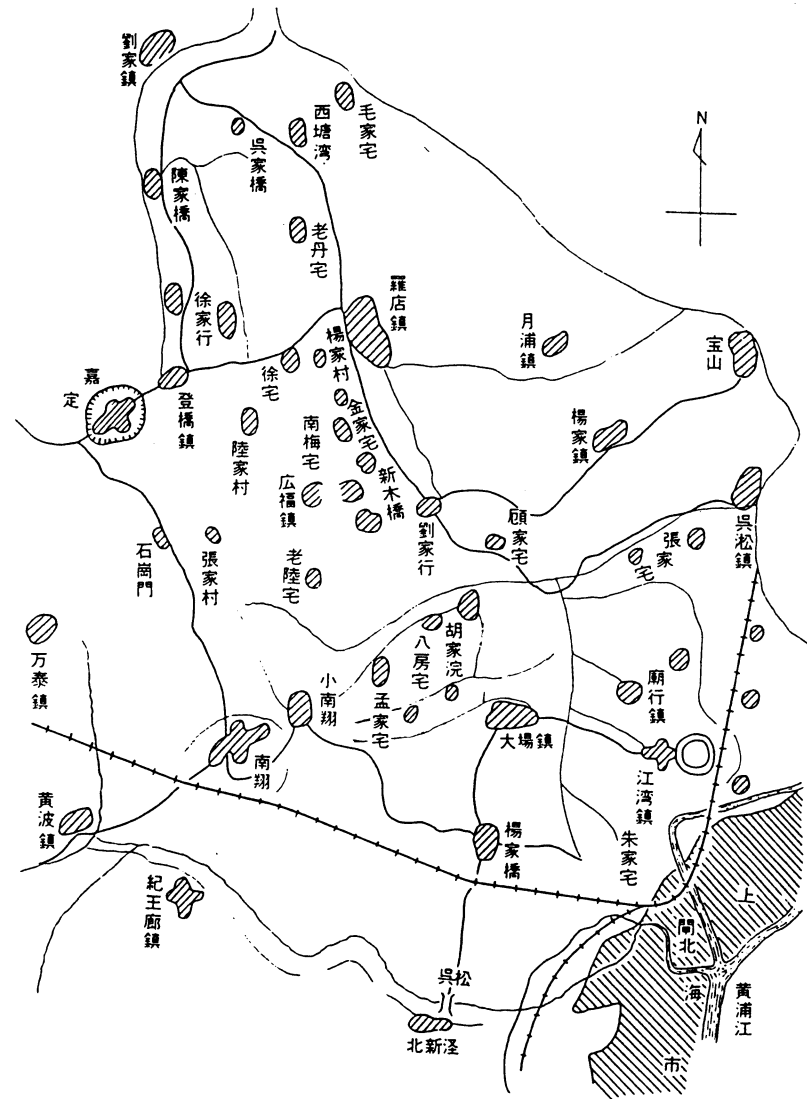
歩兵第三十六聯隊乙副官・歩兵少尉

上海付近戦闘經過要図（その二）
（昭和十二年十月～十一月中旬）



『歩兵第34聯隊史』より

上海北方敵軍一般態勢図
(10月7日夜～11師作令第59号図)



『歩兵第36聯隊史』による

昭和十二年

◇九月十日

九月十日午前四時突然五号動員下令。十二日午後一時歩三六。第一日は、軍装不足品買集め、午後本山の事務引継。第二日十二日、午前中再建帖簿整理。午後武生に出て頭を刈り毛を取り置く。十一時内田で同志会の送別会、昼食しつゝ別る、撮影をする。帰り別れの挨拶廻り、夜になり帰る。朝倉の叔父来る。惣代四名と覽領と皆祝杯を挙ぐ。叔父達は終夜暮をやりとりす、僕もウツウツと眠る。母や喜美枝等とうとう眠れなかったらしい。

朝、五時過ぎに門徒集る。動行後、一同に挨拶して出発。朝食はおいしくない。八時の列車にて出発す。小雨降る。営門前の雑沓。傘下隊長より、野戦三六副官を命ず。徵発馬のR本部分立会と副官から命ぜられたが要領を得ぬ。第三日第四日第五日、十六、十七、十八日と事務をとる。

◇九月十九日

十九日 軍装検査 結成式 余は命ぜられて金沢師団司令部に命令受領に行く。金沢市の混雑、全く軍国気分。管理部にて待つこと長く眠むたいこと甚しい。参謀連、各隊命令受領者命令なく、注意事項を受け帰る。R講堂の宴も終り頃帰隊す。

◇九月二十日

面会日、仲々に大した人出だった。

◇九月二十一日

出発準備。

◇九月二十二日

午後一時自動車にて先遣人員搭載をやる。小行李長の私物命令にて特務兵の面会の為、搭載がおくれ一寸困った。無事乗車、万歳声裡に出発す。米原にて四十分待ち、二時に大阪浪速駅に着す。自動車にて猪飼野四丁目木村権右エ門に向ふ。一風呂浴びて休む。

◇九月二十三日

曇天なれど雨なし。午後淀泊司令部に連絡に行き、Iは廿五日に、R主力は廿六日に出発することを知る。

◇九月二十四日 快晴

朝風呂にすっかり良い気分。十時から大隊長会議。隊長の面会の来客多し。色々仕事多くなる。午后、隊長天王寺中学に講演に行かる。色々配給品多し。夜、馬繁場の馬匹衛生不良との事にて、小生巡察に行く。各大隊と連絡をとり帰りたるは十二時なりき。朝倉の叔父から来信。

◇九月二十五日 晴

副官は明日の乗船打合せの為中垣をつれて築港に行かれた。隊長は相変らず来客相手。夕方再び副官出て行かれ、七時に帰る。英ちゃんと、山室の叔父さんと娘さんと三人が来訪、みやげの果物を

くれる。夕飯に例の連中とメートルを上げる。僕もうんとやる。一度ハン公とキッスをする。今日は遊びに出でんとせしも副官許しなく残念。福春が写真をくれる。酔いつぶれてしまった。

◇九月二十六日 晴

朝寒くて目覚む(三時)、処が大分酔ったか前田と小柳の間に床にも入らず寝てゐた。兵は皆起きてゐた。朝食は御馳走があつたが、何も食べたくなかつた。七時半準備して、八時五分軍旗のおもとして築港に向ふ。住友ガンベキに至り住友事務所二階に安置。十時馬の積込み終り、十一時人の乗込み始まる、十二時終る。その頃ハンジュ等見送りに三人来る。英ちゃんと二人が送つて来た。盛んに皆テープをはおるが皆切れてしまふ。飯を食つてゐるまにハンジュは帰つた。二人は船で送る為にランチに乗つた。三時半出帆、万歳の声に送られ大阪港をだんだん離る。福春の萬歳の声、いざさば故国。

夕方、此の船に先輩宮越兄あることを発見し、ルームに案内され、ベッドをかすと云はれ、好意にあまじ移ることにし気持ちよく眠る。

◇九月二十七日 晴

船は瀬戸内海も終り進む、九時頃開門通過。後に天祥(丸)をしたがへ、いよいよ上海に向ひ前進。此の船の泊地並に途中の警戒に關する指令来る。ぼつぼつ船酔者が出る、小島も青い顔してゐる。潜水艦が護衛して進む。夕方一風呂浴びて気持ち良く床に入る。

◇九月二十八日

朝目覚めた頃は一眺海ばかり、デッキで朝の海をながめ、朝食後床に入る。中食はうまくない。午睡して起出て見ると船が何隻も見える。左に七隻、巡洋艦らしきものに守られ進む。自分等は白雲という駆逐艦に守られ天祥は少しおくれる。夕方近く島が見える。二隻帰る船に会ふ、白雲から盛んに発光信号をしてゐる。島が沢山見え出した。第三艦隊の根拠地の燈も見える。

◇九月二十九日 晴

七時目覚む。黄色水、揚子江呉淞沖に停止。軍艦の堂々たる英姿。御用船がズラーと並び、対岸は綺麗な眺めだ。トーチカ、砲台の跡。遙か遠く上海の市街地方向に濛々として焼けてゐるのが見える。揚子江河口をおさへてゐる日本の威力、胸がスーとする。此の中を英船が支那人の避難者を万載して上海より下り来る様はこづらにくい。デッキの上から眺める様はさながら絵の様だ。九時五十分、夕闇せる江上にはブンブン盛に飛行機が飛び、何んだか対岸に盛んに火災が起り黒煙濛々と上り、火さへ見える。遙かに砲弾の発火を見る。のどかに船上より遠く戦を見る。夕食もおいしく珍らしく三杯半やる。将兵出で、戦を見る。九頃からデッキに出て戦況を見る。屋以上の盛観、燈火管制の為一面暗黒、唯だ廟行鎮方向に火災が見え、ドンドンと砲声が聞こえてゐる。一大壮観なり。十時過ぎルームに入る。

◇九月三十日 曇

山を経て陳宅第九師団野戦倉庫にて中食。此処で齊藤中尉と先行して除家宅、新陸宅、張家宅方面の露营地偵察、目的地につきて彼此偵察した。途中我部隊の進行してゐるに會し、新道を前進す。ところが夕せまり新陸宅前方にて畑の中で第一回の露営をする。酒に元氣をつけて毛布にくるまり寝る。一時頃命令来る。ドンドン砲声、小銃声して野戦気分濃厚なり。天氣は良し、寒い。豆をやいて食ふ、何とも云へぬ良き味なり。

◇十月二日

七時目覚む。東天は紅色。兵は元氣なり。砲声殷々としてひびく。戦地露営も静かに一夜を送つた。朝はビスケット。九時敵陣に對す空爆ものすごし。我前方にて一機発火して敵前に爆弾をかかえて下行、あつと思う間に墜落。あゝ有数な友軍一機を失ふ。中食を飯盒炊事をなす。兵、いろいろ徴発してイモと牛肉の煮物を作る、おいしい。兵盛んに物資を集めてゐる。飛行機は今朝の友軍の甲台戦の為か非常に猛烈に爆撃をやつてゐる。一時師団司令部からの情報あり。歩一九はⅡ揚家宅、Ⅰ齊家村、Ⅲ呉家橋。歩三六のⅠは第一八旅団の左第一線、正午張家角を通過との情報あり。聯隊は全部隊の集結と、師団命令により道路工事をなす。一時半、監視兵付の支那兵三名、第一八旅団司令部より師団司令部に後送しありと。大学生らしきとのこと。露営地は日中は暑い、午後は涼しい風が吹く。三時半頃、劉家宅を経て萬家宅に向ふ。

◇十月一日
寒くて目覚む、午後四時なり。起重機は盛んに荷役をやつてゐる。付近は静かだ。今日聯隊は師団の集結地に進出の為、午前六時半より中沈宅に前進センとす。隊長以下安眠中、岡部獣医といとて起きてゐる、三時から起きてゐること。兵が羊からを出し一杯やる。一同六時整列出発、軍公路をどろん宝山城に向つて前進。途中戦跡がはつきりし、チャンの死体が所々白骨になりをる。宝

宅、IIは張家角、聯隊本部及びII、12は蔡家宅に向ふ。露宮、十一時横になる、疲れてぐっすり眠る。

◇十月三日

五時、Iから連絡に杉山少尉来り、初めて第一線のIの様子を知る。又ねむり、七時目覚む。空にはブンブン飛行機飛ぶ。兵は朝の炊事に忙しい。王家宅歩兵七聯隊本部に連絡に行くことを命ぜらる。張家角に至りII本部と連絡をとり大王橋に向はんとするや、シューと音がしたと思ふとドカンと左の方の家屋の所に落下、続いて三發道路の右へ、三發又左一發と落下、始めての砲弾下とて一寸前進を待つ。クリークの付近に支那兵の死体散在す。意を決して大王橋に至り、これよりクリークに沿って北王宅に行く。歩兵七聯隊本部に至り連絡す。第一線の模様が分る。引き返し太平橋の所で砲弾七、八發爆発、遂にIIで一名破片で負傷す。十一時無事帰着、報告す。午後一時半陳家宅に向ひ前進。邵家宅東端竹藪にII、Rの幹部集合を命ぜらる。IIは歩三五聯隊長の指揮下に入る。小銃弾盛んに飛ぶ、弾は高い。胡家宅の方向より流弾来る。(三時半)飛行機飛び、砲弾は前、左に炸裂、益々盛んなり。砲兵中隊長曰く「饒家宅は占領」(四、二〇)胡家宅に夕方着し、本部を此処に置く。砲弾は本部近く落下す、小銃弾盛んにヒュンヒュンと音をたててゐる。家屋には子供、病人、老人等居る、通訳の話に依れば病人はこの家の者にて他は避難者とのこと、その様あはれ。どんな死者、負傷者一線より担架で運ばれ、うめく、処置はしてやれず實際可哀相だ。夜もろくろく眠れぬ、命令相次ぎ来り、本部は忙しい。兵は疲れて動かず、戦いの猛烈なこと。四日払曉を期し、饒家宅に

る様だ。

二時に本部に向ひ帰途に就く、夜の道はさっぱりわからぬ。我が五春(乗馬)も足に名譽の盲貫銃創とのこと、小島報告 胡家宅に於て。帰って報告す。歩兵十九聯隊の渋谷少佐戦死とのこと。

◇十月五日

七時目覚む。家の中で用便。朝から又盛んに銃砲声、チャンコロもよく弾が続くものだ。相変らず蠅の多いのに閉口。古市大尉(10)、吉野中尉(9)等戦死 古市大尉以下一〇名の戦死者を運び来る、見るも気の毒だ。直に読経し、直ちに火葬する準備をなす。先の五名分の始末をする、死体をどんどん運び来り。二時、胡家宅出発。出発直前、大毎記者来る。出発直前手紙を書いて投函依頼す。小張宅にて宿営。砲弾も来たらず、胡家宅の方が返って危険であつた。地方人や子供、老人、病人を皆やつけるとのこと、可哀想だ。小張宅は良い所だ。夜、ねむくて困る。次から次へと死体、負傷者が運ばれてくる。第一大隊長、第三大隊長来り第一線の模様を語る。敵は案外勇壮で木の上、掩蓋の下から盛んに狙撃さる。古市部隊は新木橋と南梅宅とを誤って進んで思はぬ損害を蒙つたとのこと。次々命令来り、作戦の為各大隊長来り打合せす。聯隊は載家宅、三ヶ村の敵陣地を六、七、八日と準備して攻撃する。今夜も夜勤。上海新聞を始めて西尾君が持参、見る。

◇十月六日

空は曇ってゐる。第一中隊が予備隊。第一、第二大隊は右、左第一線、攻撃準備にかかった。八日払曉総攻撃だ。兵は盛んに色んな

Iその主力を以て(砲兵一中隊、工兵一分隊)その西の無名部落の機関銃陣地を取り、IIの新木橋(堅固な鉄条網をもつもの)の陣地攻撃に協力。二中隊の三田村少尉も負傷とのこと。(四日午前五時)

◇十月四日

午前七時、饒家宅西方無名部落の機関銃陣地帯を占領し、尚ほ南部を攻撃中。機関銃、小銃弾盛んなり。III報告—新木橋前四百米の所に攻撃準備を終る。戦死伍一、上一。傷六名。I方面の攻撃に協力。午前七時半

I 無名部落完全占領

III 新木橋占領

午前中仲々盛んな銃砲撃なりき。昨日の戦死者四名の読経を心だけの供養をして小経を読む。三田村寛君の負傷姿を見て悲しく、可哀相だった。高木氏もやられたらしい。第一線は相当損害甚大の模様なり。一時銃声静かになる。昼過ぎより、又々、銃砲声盛んになる。歩一九聯隊の北梅宅、南梅宅方面の攻撃が一時より開始のためらしい。追撃砲弾盛んに近くへ落下す。

夕方から又銃声盛ん。本部前部落に落下するも不発多し。シャツ、襦袢をかへて気持良し。夕方戦死者の死体一来る。IIIは相当犠牲者で出た様だ。九中隊の杉本少尉左腕を負傷し来る。夕食をすますと、余は旅団司令部へ命令受領に行くことを副官から命ぜられる。杉本、報告すると西川、中垣班長、余と四名暗の中を出る、砲弾盛んに落下す。旅団司令部に九中隊の兵二名来り、聯隊本部の位置を聞く。それに依ると吉野中尉戦死とのこと。古市大尉も戦死のこと。先日胡家宅に於て展開命令を下してをられた様が目に見え

御馳走をしだした。次々と死者、負傷者来る。昨日運搬を命じておいた遺骨がなく心配した。三中隊の島田少尉がとって来てくれた。やっとホットとした。藤サン、宇野等に会す。副官は第一線を視察に出かく。一日のんびりと本部内はしてゐる。夕方命令はなし、本部内はのんびりしてゐる。大毎の記者が来たので水上と家と本山へ手紙を出す。又朝日の記者が来たから内へ手紙を書く。夜は楽にねてしまった。夜半、盛んに銃砲声、敵は夜襲をやつて来たのだらう。兵はゆで豆、ソラマメ、日廻りの実等を焼いてもってくる。兵はのんびりしてゐる。知っておる者に会したが、皆元氣だった。夕方小雨。

◇十月七日

七時目覚む。盛んに銃砲声聞える。聯隊は南方、楊家宅—老陸宅、北朱三房—唐家橋の線との間に転戦する。左I、右II。歩兵第十九聯隊は魔橋頭、朱三房、陸家宅西方無名部落、須宅、郭宅北部の線。其の本部は楊家宅。南北梅園の騎兵第九聯隊正面、盛んに夜襲を受けた。友軍飛行機盛んに飛ぶ。上海に昨日敵爆撃機が飛び来つたとのこと。之れが始めて爆撃機が来た始めとのこと

◇十月七日 曇、後雨

朝からどんよりしてをり、兵は盛んに炊事の為活躍。IIIに戦死者の骨のことを話しに行く。聯隊本部は午後二時に移動することになつてゐる。金通訳は上海に行つて帰つて来ぬ、さては逃げたなと悪口言つてゐる時帰つて来た。新聞を持ち帰り久しぶりに新聞を見た。雨だ、第一線の兵のことを思ひ氣の毒に思った。十三師団が

やって来ると情報が入る。二時出発。途中十三師団（仙台）がやって来た、皆がクリークその他頭を低くしてゐるのを見て、弾になれてをらぬのをかしかつた。孫家宅は小さな部落だ。道の悪いのに閉口した。

夕刻敵情捜索中 屋代3中隊長戦死。姿勢が大きかった為、狙撃された。胸部心臓を貫通即死。右肩から心臓部へ。着するや直ぐ歩哨二名。夜ねてゐる通信の伍長の手を貫通。

◇十月八日 雨

午後三時、敵襲とのもで目覚む。銃声盛んなるも、すぐ静かになる。七時目覚む。あまり盛んな銃砲声にあらず。砲兵除家宅に転進すると連絡あり。雨も止んだ、第一線の将兵は昨夜は困つたらしい。通信兵は夜間も休みなく活躍してゐる。朝から爆撃盛んなり。前に敵敗残兵が機関銃を持ち残る由注意せよと、予備隊長云ひ来る。

午後三時三十分、IIの七中隊後巷西端を占領、目下残敵掃蕩中、敵は清水順方向に退却す。尚ほ前進して敵と二百米を隔て、対峙中なり。五時、各大隊に命令下達。右第一線IIは朱三房にわたり陣地を占領、孟家宅に対し陣地構築。左第一線IはIIに協力し朱宅、花家橋宅方向の敵情地形を偵察すべし。

昨夜、第七聯隊に配属の独立機関銃隊は頓悟に出るのを誤つて朱宅に進出し、殆ど全滅に近く、引上げて七聯隊本部に來りたところ、又々十五榴に見舞はれて又々損傷した。七聯隊長はやうやく軍旗をとり出したとを、独立機関銃隊の兵が逃つて本部を尋ね、語る。之れは近衛四聯隊の兵なり。明日、第九師団司令部に命

中根少尉、余に忠告す。「公を先にし私を後にす可きだ」と。如何。五時頃、「聯隊ハ予備トナル」の命を受く。

◇十月十日 雨

昨夕、明日は天気だ、北が明るくなつたからと、隊長にも言ったが、今朝起きたら雨だ。隊長の曰く「どうも菅原の天気予報はだめだ」と笑はれた。余の曰く「支那の事だからあてにならぬ」と、大笑ひ。昨日來た独立機関銃隊では、三銃どうしてもわからぬと。第五中隊長林大尉、馬來田少尉は戦死？ 不明とのこと。電話で聞けば、第二大隊の戦死傷者は、将校六、下士四、兵七十位、正午頃にならぬと、死体の収容ができぬと。目下機関銃の掩護下で収容してゐると。担架二十至急送れと、第二大隊より言ひ来る。雨は止まず、風さえ加はる。砲声は依然聞える。孫家頭に七、八、九日と三晩宿泊した。今又、右隣りに居つた第八中隊の兵が、腹部貫貫。九時半。終日雨でうんざりする。第一線、今日は歩兵十八旅団長が、歩兵第十九聯隊と同第七聯隊の第二大隊を指揮し、陳家行を攻撃。雨中の戦斗、第一線の将兵は気の毒だ。友軍の砲声、午後は盛んで、二十四榴が盛んに飛んださうだ。本部は予備隊でのんびりしてゐる。当番も食事をおいしく作る。一時、各大隊副官集合す。砲声、銃声も遠く、なんだか秋季演習の様な気分しかせぬ。コレラも隊内に二、三名出た。聯隊砲の一名は昨日死亡す。

◇十月十一日

銃砲声の中に夜が明けた。未だに第五中隊の林、馬來田の死体発見出来ぬと。昨夜、決死隊にて極力捜索中とのこと。雨は未だ本格

令受領に行く様、命を受く。

カニのよこばひ式に転進する。又々今日の作戦と明日の作戦が猫の目の如く変化する。第一線大隊長が当面の敵陣を突破するつもりで無理にやつたが、こんなに転戦するならあつさりやる。この時足を虫にくはれたので、かゆくて服をまくりをる時、壁を破り弾が来た、壁厚き為止りたり。余之にて助かる。

◇十月九日 雨

五時、中垣が師団命令を持帰る。

左翼隊ハ孟家宅―袁家角―除家巷ノ線ヲ十日夕突破シ支馬塘以南ノ地区ニ向ヒ攻撃セントス

戦斗は四日朝から開始し今日は九日、この六日間の戦死計六〇名、戦傷計一七〇名。又、今日も雨だ。9D司令部命令受領は午後四時までに行けば良い。八時前、独立機関銃大隊の兵が陸家宅を尋ね来る。彼等の姿を見ると殊に気の毒になる。頓悟へ行くのを朱宅方面に行き、一ヶ大隊の内第一、第四中隊は殆ど全滅し十五名程しか残らず、防（毒）面など歩兵七聯隊の本部におき一ヶ中隊分全部埋められ、七聯隊本部へ榴弾廿発ほど来り、聯隊長は早く壕にのがれ助かったが、軍旗は一時間もかかり壕から掘り出した。損害は大きいらしい。弾にあたるも皆運命だ。昨晚師団通信の兵が寝ていて弾丸に見舞はれ、水筒を斜めに貫通、シャツ等を破つたが微傷だに受けぬ。今早朝、左翼隊方面に盛んな銃砲声す。三時四十分、第三中隊は須宅占領、目下前面の敵情捜索中。副官は一時に第二大隊に寺田中尉と行く。小柳曹長、本部入口の方にて背後の通信室より小銃弾左肩より右ワキバラに貫通す。（一時過ぎ）

的に上つていない。もう雨にはあきた。本部はぐっすり睡眠をとつた。第一線の苦勞を思ひすまぬと思う。朝、家の子供のことを寝ながら考えた。九月二十日の夜、電車の中で林大尉一家族と一緒に在り、可愛い嬢ちゃんと、坊ちゃんと奥さんと四人がむつまじく帰へられた。今、亡き大尉の温顔を追憶するとき、うたた浮世のはかなさに感慨無量なり。朝、濾水器のことで隊長よりお小言。シャクにさわるは、少尉だ。事々にじろりじろりと見さらす。今日午後、カメ風呂を沸かす。いゝ気持ちで久し振りに気分になる。遺骨の整理をする。林大尉のことを隊長決断する。決死隊で今夜ぜひ取りもどせと。馬來田の死体は発見した。林大尉の軍刀は備前盛光。第五中隊の飯田から煙草をくれと云つて来たが、ないので、西川の「ほまれ」を少し貰つてやる。本部の夜は、満洲の戦談に花が咲く。のんびりしてゐる。外は、第十三師団、第三師団の方面は盛んに銃声がある。犬が盛んに吠える。

◇十月十二日

六時半目覚む。第十三師団の新木橋の方に盛んに銃声が聞え、左の方、第十八旅団の方も銃声は遠く、唯だ砲声のみ聞える。孫家頭に之で五日間滞在する。家のぐるりに盛んに砲弾が来る。隊長の後に不発弾が来て、家がびくっと動いた。遺骨の整理全部終る。歩三六上等兵三好実（認識票 二九号）歩一九九Mg西田角治の骨に関し公文にて出す（歩一九宛）。午後の本部は、のんびりとのどかだ。空は晴。十数台の重爆機西へ飛ぶ。第一線は依然として進捗せず。砲弾盛んに本部の周囲に落下。第二中隊では、兵四名重傷、三名軽傷を砲弾落下の為出すと報告あり。

◇十月十二日 晴

夜、九時二十五分頃、隣の遺骨を置いてある部屋から、アイタタという声、銃声と共に起る。一同驚いてかけつけると、旗護兵一名午後腹痛にて隔離していた兵なのだ。横臥していて、背から右胸上に盲貫なのだ。弾丸は出かかっておるが、気性は丈夫だ。運命とはいひながら、昼までゴロゴロ沢山の中に居る間は何ともなかったのが、終に流弾にたはれた。

三十日朝、上陸、虬江碼頭 一日、石家沿西方畑中に露宮 二日、蔡寧宅 三、四日、胡家宅 五、六日、小張宅 七、八、九、一〇、一一、一二日、孫家頭

本日の戦況

右翼隊 朱宅（陳家行北方）

左翼隊 盛宅（陳家行東方一五〇〇米）

第三師団、第十三師団 昨日と大差なし

◇十月十三日

朝早く、本部の前をやかましく部隊の異動するあり。盛んに銃砲声す。空は快晴 朝の状況 下記の要図の通り。（要図略）

飛行機の爆撃後の急昇行、爆音盛んなり 報知新聞の記者来る。今日、上海に帰ると。手紙頼む。今日は暇があり、手紙ばかり書いてゐる。予備隊は呑気だ。天気は良し。第一線は陳家行攻撃を正午より実施とのこと。重砲が盛んにウナリをたてて飛ぶ、飛行機は盛んに飛び、いかにも戦ひは酣だ。第二大隊長来り、林大尉戦死の模様を報告さる。ポツポツ第一回の負傷者が野戦病院から帰って来

る。今日は第十三師団の方が盛んに攻撃するのか、銃砲声がする。

第三大隊から八時迫撃砲弾にて兵二名即死、三名重傷とのこと。砲弾が盛んに来ても、未だ幸運にて一発も見舞はれず。本部の夜は、話でもち切り。電話室では混線して、保線が誤ってつないだらしい。点検にすぐ保線班を出す。

◇十月十四日 晴

払曉、盛んに第十三師団方面銃砲声する。六時過ぎ目覚む。空は晴れ、支那の風景も亦良い。昨日今日は氏神祭だが、どんなことか。お湯で身体を拭いたが心地良い。

「秋空に爆音高し戦場の朝」

「暁に支那兵飛べと銃砲声」

友軍の重砲、つるべ打ちに盛んに撃ってゐる。九時半より本部の周圍に迫撃砲落下。余の馬屋の横に落下して騎兵の馬二頭即死、余の馬五春は破片にて首の動脈を切りもう駄目だとのこと。引き出して銃殺す。可哀相なことをした。今朝は小島が馬運動に伝騎にたのむと言ったから、よしと云つて見に行きうれしさにしてゐた。儂いものだ。小島馬の毛を切り持参す。乗馬四頭共にたふる。午後、各大、砲隊長会議 徳珍という方と金が帰り来る。酒、ウイスキー、牛肉等を持ち来る。金は煙草、菓子。頭がなかなか良い。徳珍氏は上海の郷軍副長をしておられる隊長の知人、隊長に色々慰問品を持って来らる。夕食は牛肉とミリン干、酒でうまかった。今日は寺田中尉指揮して掩蓋を事務室に作った。

◇十月十五日 晴

して下さる。有難し。

◇十月十七日 晴

第十三師団方面銃砲声盛んなり。第九師団方面静かなり、払曉攻撃といふも静かだ。飛行機は盛んに飛びだした。第九師団方面に煙を使用したか、白く煙のたなびくを見る。各大隊長、今朝まで被害なし。

師団から帯刀者も銃を持ってよしと。敵は指揮官を倒すことを狙つてゐるからだ。正午頃、重爆機帰還して盛んに飛び、宣伝ビラを落すのを見る。本部の前には、大行李各隊の装具の納めに来るので知った者が来る。本部は砲弾は来ない、銃弾は殆ど来ない。大行李酒樽を持ち来る。弘に手紙を書く、子供が見たくなつた。上山上等兵は盛んに、もう戦ひはいやだとかぼす。六十五聯隊（会津若松）の一中隊、十五名になるまで突入して陣地を占領した。明月、クッキリした空、上海とおぼしき方に高射砲弾らしきもの盛んに発火、まるで花火の様だ。岡部、上野らと話す。戦死者に対して、もう少し丁寧にあつかはれることが望ましい。不可解な信号弾らしきものが、彼方、此方と見ゆ、潜伏兵があるのではないか？

◇十月十八日 晴

七時目覚む。昨夜は火があつたので暖かつた。秋の朝は心地良い。今晩は盛んに第十三師団方面に銃砲声す。電話にて川久保参謀より「歩三六八談家頭攻撃二今、明日中ニ参加スルハズダ」と。寺田中尉、歩兵第七聯隊と連絡の為、須宅に行く。

十二時半、遺骨十四体 師団へ送附す。

砲声の中に清らかな朝が明けた。六時目覚む。終夜盛んな砲声だった、七時二十分程前より静かになる。昨日新聞の読残りを読む。昨日、加藤森一本部に来る。徳珍氏帰る、あわて、組合寺院の方々に手紙を書きたのむ。散髪を目下にさせ、顔を剃って気持ち良し。午後、今朝通信の兵がⅡで小便に出て入りしが砲弾の破片が頭部にあたりしばらくして死んだのを葬式した。手榴弾の試験をした、あまり大したものでない。副官旅団司令部に行かる。午後、大隊長会議。四時頃、過日虬江碼頭で会った紡績の工場長が、第八中隊の兵をたずねて来り、慰問品を持って来て下さる。本部は色々戴ける。本部は実に呑気だ、こんなことばかりでもないだらう。戦線も午後は静かだ、夕方から少し銃砲声がする。池に老婆の死体が浮いたとて寺田中尉処分す。遺骨七十四人分（古市大尉以下）師団へ送る。

◇十月十六日 晴

朝空模様悪く、今日は雨かと思つたが、ポツポツ旭光を見る。陳家行に歩一九の二中隊入り、敵も未だ部落に在る由。第三、第十三師団方面異状なし。遺骨四十二名分（林大尉以下）師団に送附す。

損害（十日）十四日、予備隊になつてから）

死 八十六名。傷 十七名。馬 三十五頭（内、十五傷。二十死）。既に戦病死者計、百三十六名。既戦病死者共に計、五〇四名（三八一八名中）

夜は明月、気持の良い中支の秋だ。そぞろ故郷の事を思ふ。隊長、ひどく第三大隊第九中隊の爆傷四十二名の報告に驚く。自らⅢ長へ電話にて注意を与へられ、我等にも寝る時机行李等を自ら指示

予備隊間。戦死 三二名。戦傷 一三五名。

夕方、初めて陣地にて手紙を受く。今日、師団へ隊長の同伴をして行く。途中足もとに小銃弾来る。初めて師団幹部を見る。家内の便りに弘、敏坊元氣とのことで安心。敏坊は日々知恵がつき、はって思う所へ行く。梅原先生より来信「尽忠の至誠の光る秋の空」とものさる。大毎の北陸版に、隊長の軍工路前進の模様を撮ったものが出たと、切り抜きを送り来る。敵軍は総逆襲するとの情報ある。然し其れらしきもの来らず。友軍の飛行機は徹底的にやっつけると云つてゐたが、気合い抜けしたらしい。各大隊副官集合の上、聯隊は師団中央隊として命令下達さる。空中写真を見たが、よく撮れてゐる。十時過ぎ休む。

◇十月十九日 晴

今日も日本晴。朝モヤの中を第二大隊が前進する。延々長蛇。隊長曰く「この中から又多数死亡すると思ふと涙が出る」と。隊長の心中察せらる。飛行機は相変わらず爆撃をやる。本部は移動準備に忙しい。早目に中食をすまし、隊長の伴をして旅団司令部に行く。旅団長等穴の中に居らる。御馳走になる。武田副官、盛んに新聞記事を出せと紹介さる。大毎の社長、報知の記者（過日来たもの）。大毎の新聞、雑誌を貰つて、旅団長等各幹部と余と写真を撮る。陸家橋に着す。掩蓋構築中にて作業を終りたるは夕方近し。石倉少尉は壕の上に不用意に立ち、右胸をやらる。姉より来信。夜、副官から、明日午後一時迄に所要の人員を率い師団司令部に至り、甲副官の指示に従い、呉淞に上陸の補充兵受領に行けとのこと。どうも第一線の壕住いは又格別だ。弾丸が盛んに来る。月は明月、すみ渡り

たる夜、弾丸は雨の如くに来る。

◇十月二十日 晴

朝から兵は作業開始。補充すべき所要人員の調査を書記がしてないため十一時過ぎまで手伝ひ、十二時過ぎ出発。一時を過ぎるも第三大隊の要員来らず気がもめる。副官部前に集り、石川、城地、及び主計と四名、各隊の引率者とトラックに同乗。自動車に乗ったと思つたら、ドカンドカンと三発、あわてて自動車を飛び下り皆陰にかくれた。その時の様を他から見えてゐたら面白かつたらう。途中、後方の仕かけの大きいのに驚いた。五時頃兵站部に至る。明日船が入港すること、予定より一日早くなつた。久し振りに毛布にくるまり足をのばして休んだ。敵機盛んに上海を襲つたらしい。

◇十月二十一日

朝、呉淞砲台棧橋に至り船を待つ。中食をすまずと船着く。一同三時前広場に集合の上、王殷宅に向ふ。トラックを拾ひ先行し、六時過ぎ着、露宮の準備をした。丁度、輜重兵隊の重野が居り、色々もてなして呉れ、寒くなく休む。特務兵の知つてゐる者皆来り喜ぶ。待てど部隊来らず。

◇十月二十二日

朝、部隊到着。編成をなすも出来ず、もう一日露宮に決す。

◇十月二十三日

朝、編成して、孫家頭に連れ来る。聯隊本部は移動して談家頭に

出でたりと。陸家橋に第十八旅団長等移動し来る。本部に佐藤曹長等と向ふ。途中激戦の跡をしのばる。三日留守中に、聯隊はぐんぐん、軍の二十四日進出予定線まで出てしまった。本田大尉戦死と。山岡、張宅にて午後三時、敵を射撃中敵弾心臓に命中即死。

◇十月二十四日 晴

補充隊を本部位置・談家頭に引率を命ぜらる。十一時半孫家頭に着し、全員を連れて談家頭に至れば、本部は樓家宅に移動しあり。交通壕を前進、敵弾盛んに来る。本部に到着、そのクリークの線に第一線は着す。

◇十月二十五日 晴

夜通し攻撃、七時突入。第三大隊は、クリークの向ふ岸に渡河する（午前三時）。第二大隊は、七時突入。第五中隊七時南岸進出。この夜、敵が夜襲して来たらしいとて緊急集合を命ぜらる。九時、敵兵退却の徴あり、朝モヤを利用して第三大隊が先づ突入、砲兵は全火力を集中して北朝村と□□間を猛射し、引き続き突入、成功す。II引き続き突入。

竹内（旗手の当番）頸部貫通即死。盛んに弾来る。屋根に上り見れば、退却する敵、進撃スル友軍、敗残兵ノ掃蕩、角型眼鏡で見えてゐると面白い。十二時、本部前進。途中、八房宅にて福田から、谷がやられたと聞く。途中、友軍、敵兵沢山戦死してゐた。そのクリークは相当なクリークだ。暫く南岸にて待ち、北張村に前進。着くと又、米屋胸をやられたふる。敗残兵が逃げる、つかまえて殺す。八房宅から走馬塘クリークに至れば死屍累々。北張村に入れ

ば、残敵又二人、又一人とつかまへた。日下ぬかつて一人逃がす。

夜、ビールが磯部中尉のすそわけあたりうまかつた。第三大隊本部から、二十四日の戦斗で死傷した人名が出であり。木戸、尾竹、野村各少尉戦死せりと。第九中隊が右で敵正面にぶつかり、第十、第十一中隊が左下流でうまく渡つたが、第九中隊に一番損害があつた。

◇十月二十六日 晴

夜、敵は重砲を、北張村東北方砲兵陣地に向け集中す。銃砲声盛んにて心細し。六時過ぎ砲弾家の近くに落下、裏の竹藪に四、五発落下し、第二中隊の四名、機関銃の一名負傷す、皆慌てて逃げ出し前の壕に入る。飛行機は盛んに勇姿を飛ばしてゐる。友軍の重砲の飛ぶ時の勇ましさ。八房宅正面クリーク前の戦斗は相当困難なりしものの如く、尾竹、野村等第十、第十一中隊の苦戦しのばる。北張村に至り露宮。旗手の当番またやらる。砲弾盛んに来る。

◇十月二十七日 晴

迫撃砲弾を盛んにくらふ。到々後に落下、第二中隊の四名、機関銃の一名負傷を出した。一同前の壕に出る。壕内にて磯部中尉と半日語る。南張村にて露宮。中垣がまた相変らずだ、いやな口をたたきやがる。

◇十月二十八日

追撃。九時半第三大隊鉄道を越え、第二中隊□□占領。本部は萬安公墓に到着。前面に相当残敵あり。磯部、菅原中隊長戦死。笠谷

も戦死と聞く。重傷者多数なり。

◇十月二十九日 曇

舊濱に移動。支那人がどんどん入り込んでくる。午後九人下枝部隊に使役されていたと云ふが、其の中の一人が、あの七名は残敵だといふので縛り上げ、夕方畑でやつつける。自分も初めて二人切った。後で見ると刀が少し曲った。

◇十月三十日

朝から雨かと思つたが降らぬ。水山の藤治さんに会ふ、元氣だった。蘇州河の対岸は仲々堅固な陣地と、各偵察者の結果が報ぜらる。隊長、副官乗馬にて候宅の師団司令部に行かる。宇野加津が戦死と聞く(廿四日)。架橋材料中隊が材料を選ぶ。本部前は賑やかだ。工兵隊における特務兵福田がたづねて来る。水上も元気で機関銃交換に来る。午後、隊長帰られ、各大隊長を集め打合せ会開かる。砲兵は十五榴、十二榴、山砲等とても素晴らしい。砲撃戦、海軍機の爆撃、とても一日の渡河は見物だ。夕方散歩して重砲の試験射撃を見た。家と鉏路へ便りを出す。午後は雨が晴れた。

◇十一月一日 曇

朝七時過ぎ、舊濱から西濱宅へ移動す。昨夜来、第一線は鉄舟、折疊舟を運搬し、攻撃渡河材料を予備隊で運ぶ。朝から砲兵は盛んに制圧射撃をやつてゐる。友軍の弾が大隊の位置に落下すると、第三大隊から言ってくる。十一時過ぎ戦斗司令部に出て見ると、渡河準備場に集結してゐる。煙幕を張る、十二時渡河開始。大毎、東京

のに。正午まで集中射。銃砲声は相当盛んだ。当番は糧秣運びに舊濱に行く。中村当番又足をやる。当番達何んともないかと案ずる。第一線は苦しいからう。土俵を取りに行った第二中隊の分隊長即死。人間のはかなさ。当番兵汗だくで帰り、石山がやられたと。渡橋場は場所が悪い、やられたといふ者多し。隊長以下乾杯し萬歳を寿はぐ。上村准尉即死と。岡村大尉やられて後退し来る。

◇十一月四日 曇

正午を期して突撃せんとするも、第一線の第三、第二大隊は未だ右の残敵盛んに射撃し、戦線進捗せず。砲弾本部の周囲に落下す、重砲らしい。午後零時三十分第三大隊狄巷上を占領す。第二大隊は第三大隊の後方に出てゐると、どうも戦斗力が鈍った。第一大隊長本部に来る。どうも第三大隊と第一大隊が交代するらしい。午後右の敵は退却す。横山少尉曰く、「張巷の後方トーチカには、女のキャッキヤッさわぐ声が聞える」と、小川大隊長もそう言ふ。戦争は悲惨だ。もう最後の五分だ、もう長くもなからう。小川大尉殿、岸大尉殿の戦死の模様を話さる。小川大尉を呼んで担架の上で姿勢を正し、岸は天皇陛下の御為に喜んで死んで行きます。子供は立派な軍人になる様に聯隊長殿によろしく。皆さんによろしく。と静かにゆかれたと。武人はいさぎよく散る。

◇十一月五日 曇

朝目覚むこと早し。本部は九時移動、蘇州河岸づたひに蔡家宅に移動す。途中我が兵二名斃れる。敵の死体は相当あった。本部位置は惨たるものなり、作業により補強。朝出る時に、昨夜負傷して

日日の記者を同行。第一回渡河上陸部隊が敵の壕に大きい姿勢で残敵をやつつけてゐるのが見える。砲兵、飛行機盛んに活動。煙の中に第三大隊旗が見える。第一大隊、第十九聯隊、第二大隊と次々に渡河す。どんどん対岸に上る。右方銭家街方面から敵は盛んに射撃す。十二時十分第一歩、同十五分Ⅲ旗上陸、二時近く迄に皆上陸しどんどん前進するを見る。途中負傷者帰り来る。第三大隊長、宮内少尉、坂大尉、向井少尉負傷す。煙幕は水上用、地上用発煙筒共に風向良く理想的なりき。四時、本部渡河し、張家宅に出づ。岸大尉、下腹部をやられたりと。河岸の敵は二、三百。張家宅には三、四十名づつかたまりをりたり。今日は幹部が多くやられ、手榴弾にて多くやらる。壕の入口でやられた。蘇州河南岸は人工にて断崖とされ一寸登れぬ、所が之が反つて友軍に利し死角となった。岸大尉下腹部貫通。

◇十一月三日 雨

第二大隊は午後零時十五分、第一中隊を併せ指揮して蔡家宅を攻撃し、同四時五十分占領す。第五中隊は予備隊。第三大隊は狄巷上北方より攻撃、午後六時彼我の態勢は手榴弾戦の線にあり。雨は降り、第一線の苦労は大なりき。左方、第十九聯隊正面には、昨夜敵二ヶ聯隊が夜襲して来たさうだ。右前の竹藪に未だ敵が居ると。今日は一日寝て暮した。新聞を色々見た。盛んに銃砲声がする。

◇十一月三日 雨

昨夜の残敵の猛射相当なものだ。朝、小便に出て、第五中隊の三十八才の兵即死す。今日は明治節。小雨、内地では晴天の日が多い

下つて来た佐藤少尉に会つてきた。氷砂糖を与えて口に入れてやると非常に喜んだ。ダルマヤと長谷川富蔵君とから来信。夕食は幹部一同会食。中隊長はとても兵が大切にすること、僕等は助けてくれるのは当番一人しかいないと隊長言はれる、實際だ。新聞に脇坂部隊の記事が出てゐた。又雨だ。第一線は困るだらう。斎藤中尉と壕の中で満洲のエロ話を聞く。砲弾盛んに落下。今日は内の報恩講、色々想像して戦の早く済むことを念ず。友軍の第十軍が上陸したとの報あり、金山に五日上陸したと。

◇十一月六日 曇

戦線遅々として進まず。今日は砲弾盛んに落下、集中的に来る。中垣コレラの疑いの容態となる。通信所の下が昨日から変に壊れないかと思つた所、砲兵の通信兵めくつて見て、中に死体があると云ふので見ると、娘子兵の死体なり。小柳曹長全快して帰る、中垣を後方に送る。本部閑なり。午後は猛烈に落下。明日補充員受領を命ぜらる。小柳にビール一杯貰ふ、うまかった。補充員受領の打合せを為す。

◇十一月七日 大暴風雨

朝、盛んに砲弾落下す。外は大暴風雨、第一線さぞ困ることだらう。壕の外に出れば兵等は雨と寒さに困つてゐる。我等は暖かく眠れることを喜ばねばならぬ。斎藤中尉またエロ話をやる。朝からよく雨が降る。本部雨濡れにて飯も炊けぬ始末。朝からまた旗護兵の宮崎が中垣と同じ容体にて自分達と同行後退した。十一時過ぎ、雨の中悪路を砲弾に脅やかされながら舊濱に向ふ。師団司令部までに

二、三度も尻もちをついた。司令部では明日行くと云はれ一泊することになった。高級副官親切にして下さる。東、西本願寺の従軍布教師の大谷師と小山師（西）とに会す。小山師は龍大で一級上級だったとのこと、同室に休む。夜はとても本部の特務兵が歓迎して呉れた。寒かった。

◇十一月八日 晴

歩三五のトラックに便乗を依頼す。待つうち正午になる。中食後、上海に向ふ。砲爆撃の悲惨な様を眺め初めて上海に出た。町の中には日本人が沢山歩行し、若い女子が沢山来てゐる。何だか戦場で夢を見てゐる様だ。碇泊場司令部にて尋ね、病院船が出ると尋ねたが、誰もをらなかった。兵站司令部に宿の交渉をする。将校六名は萬歳館に宿泊することに定めらる、行つて見ると部屋が小さい。そこに六名入った。町に出て見た。戦勝の中に内地人が盛んに店開きの最中、賑やかだ。上海の町これから繁華にならう。夕食をおいしく食った。上海の色々の話をして面白く、出発依頼初めて床に寝た。

◇十一月九日 快晴

寒すぎてかよく目が覚めた。早く起きて出て見ると快晴だ。兵站司令部に電話すると未だ不明だと。本願寺に横湯師を尋ね、久し振りに色々の話をし、記念写真を撮り、会堂に遺骨の安置しあるを拝礼す。町の商店で金に出会ひ、彼方此方と歩いた。カフェークロバで中食して、午後小島軍医を連れてあちこち歩く。徳珍氏鮮人会長を尋ね、自動車の交渉をして帰る。敵は総退却、聯隊本部は飛行場

占拠と聞く。

◇十一月十日 晴

朝、電話で連絡するも、未だに不明。午前中、宿にてゴロゴロして宮崎氏の世界各國のエロダンを開く。十一時、第九師団副官来る。今日午後何処の船か不明なるも入港とのこと。徳珍氏来る。中食を食へにしようとのこと、料理屋にて思はぬ御馳走になりました。Sも二人。電話がかかり船が入ると、慌てて行く。第十五碇泊司令部にて中島少佐に会ふ。四時着く。古兵ばかり、飯田靖来る。すぐ出てくれとのことにて、直ちにカンパンの夕食をとらせ、夜行軍にて本隊の集結地に向ふ。途中陸戦隊の歩哨線にとめられ、本部の許可を受け通行中、六大隊にとめられ、本部に余を連れ行き色々話すと、松成の大西少佐だ。菓子箱を貰つて帰る。自動車で送つていただく。奇遇だ。

◇十一月十一日

候宅に十二時着、大休止。八時出発したが、車馬の交通盛んなると、部隊の行軍力なき為、時間进行を食ひ、しやくにさわる。蘇州河を渡り施家巷の方へ廻る。途中敵陣地の跡を見て、飛行場に至り、隊長から師団長、旅団長の訓示、隊長の挨拶があつて、編成をなし、解散。夕食にスキ焼き、ブタ肉の味噌煮おいしく、上陸以来初めての会食をなす。本部に女が居り不思議に思つた処が、逃げおくれた者、名は□□□、夫は逃げたと云ふ。昨夜は寺田中尉がダイてねたと。

◇十一月十二日 雨

朝、急に前進命令下る。第九師団は太倉、崑山の線に敵を急追せんとす。歩兵第十八旅団は左縦隊、歩兵第三十六聯隊はその前衛となり、十二時出発準備。十一時命令来る。一時出発。予備馬に乗り出発、途中寺田に馬を取らる。しやくにさはる。雨の中、悪道を進み、凌家橋に大休止。道の悪いのに困つた。

◇十一月十三日

曇つてゐても雨にならず、寒い。七時出発。途中、支那民は急襲の日章旗を出してゐる。平和なものだ。右前の方と思はるる方向に砲声を聞く。飛行場―沈巷上―諸□鎮―胡家宅―西横涇は―坍石橋―黄渡鎮 三時南方千秋橋に来る。敵の陣地跡あり、爆破したか大きな石の丸橋が破壊しあり。歩兵協同して舟筏にて渡り架橋準備す。途中にて一名、千秋橋にて一名残敵を処分するを見る。黄渡鎮は爆撃にてもものすごく破壊されあり、土民が色んなものをもって逃げるを見る。腹痛にてよく休めなかつた。

◇十一月十四日 晴

地図なく、道不案内。所々に敵の作りし壕あるも、使用してない。土民の避難し行く様が見える。五時近く、楊田涇に着き、此の附近に大休止。夕食に新菊のしたしを作る、隊長喜ばる。疲れてぐっすり寝る。月光下の支那部落、又良し。

◇十一月十五日 晴

六時半出発。昨日より道は良く、途中橋壊れを迂迴す。太倉に至る大道には、ずっと、第百一、第三、第十一師団、北支より来れる十五加重砲、戦車が路上にをり、通行困難なり。途中、鶏を捕え面白かつた。夕食は鶏料理でおいしかった。湖川橋鎮に大休止。

◇十一月十六日 曇

杜橋東方無名部落 雨は降るし、道はすべるし、クリークに橋はなく、行軍は相当困難。周壁鎮では、急造の日章旗を立て、土民は舟でクリークを往行してゐる。鎮内にて色々料理してゐる所、シューマイを作る所を見る。鎮端にて米を買ふ、若い主人、軍旗を良く了解す。途中舟をつかまへた所、二一の家族泣きだし、だまして進むところ、第十八旅団副官に呼びとめられ、それに旅団長乗つて行く。雨は盛んになるし、困る。長浜で舟を拾ひ、杜橋に至る。米を二一にかつがせ宿営地に着く。鶏の料理にチャン酒を飲み、いい気分です。床に入る。

◇十一月十七日 曇

八時二十分出発。杜橋の軍橋から馬が盛んに落ちる。十二時近く、崑山下に着く。工兵の作業を待ち城壁に登る。山上に風流な建築物あり、公園だ。山下に菊花の乱れ咲くを見る。町の通りは汚ない。支那兵が乱れたか、土民は見えない。鎮内の大きな家に本部を置く。家内は乱れてゐる。大人の姑娘のをつた部屋と思はれる所を将校室と定む。瀬戸物の良品多し、余程の大人の居つた所と思はる。久し振りに茶碗にて食事をなす。

◇十一月十八日 曇

朝からのんびりして為すこともなし。武田大尉遊びに來り支那酒をやる。午後、湯を沸かす。当番は料理材料集めに出す。四時、急に出発命令下る。五時出発と。一時間しかなく皆あわくらふ。五時全部出てしまった。余は残留員を連れ呑氣に行軍す。崑山で火をつけた奴があり、ドンドン三ヶ所火事。崑山で居った家は余程の大人の住居だった。色々立派なものがあつた。記念に画とセトモノを持って來た。真義鎮に宿泊。夜半、明日は蘇州入城とのこと。

◇十一月十九日 雨

雨の中を十時出発。今は師団が蘇州入城といふので、行軍序列は前衛Ⅰ／36i 9D司令部、18B司令部、36i本部、Ⅱ、Ⅲ 残余 鉄道線路に整列。

雨中行軍序列をとるまで待つこと久し。唯亭の駅にて中食、貸車が転覆してゐた。途中は、そろそろと諸所のクリーク上の線路を渡るに時間を食ふ。夕方暗くなつてからの線路上の歩行は困難だった。七時過ぎ蘇州に入る。闇の中で見ると仲々大きい、八重の大塔が見える。宿舎は表はさ程でもないが、入つて見ると大きい。

◇十一月二十日 雨

朝、兵は色々な品を徴発してくる、アメ、南京豆。蓄音機をならしてのどかだ。余は齊藤中尉と大人の家を見て来る。戸を破つてあるのでぐり入ると荒らされてゐる、どんだん入ると、素晴らしい庭園に立派な建物だ、驚く。町には二ーが皆、日章の腕章をつけて

む。十二時半起され、急に進撃とのこと、直ちに出發準備をなす。線路に二時。歩一九第一大隊前衛、各隊区分なく準備出來た隊から出發。

◇十一月二十三日 晴

暗いながらも枕木は解るので困らなかつた。寒さは身にしむ。二、三日來急變の低温度だ。途中抵抗なし。掩蓋多く、昨日の抵抗を思はしむ。周涇巷駅にて休憩し、どんだん行軍。李巷上と思はれる所で寒い寒いと云つてをると、わいわい四、五十名の残敵現われ、互い呼び合ひ来る。多分第十六師団正面の方から來たものか、はさみうちになり面白かつた。無錫旗站の鉄橋の線にある敵の陣地は、鉄条網、掩蓋等あり、朝早く入城の予定のところ、之れに引つかり出ることを得なかつた。今日は寒いと思つたら、ちらちら雪が降つた。西島大隊の本部位置より敵陣地を見れば、すばらしい掩蓋陣地だ。驚き且つしゃくにさわる。工兵の兵が勇敢に狙撃してゐた。夕食前、各新聞記者が尋ね來る。大毎、大朝、東日、読売。

◇十一月二十四日 晴

朝から呑氣だ。通信は機材を干してゐる。佐藤は徴発に行き、ブタ、米等を持ち帰る。夕方、各大隊長の会食あり、別に何もなかつた。ブタ肉を焼いて食す。今日も戦斗は進捗せず。昨日の右の鉄道橋などの攻撃は失敗に終つた。夕食後、朝日の前田記者と読売の佐々木記者と色々記者の戦斗間の動作につき話し、前田氏より支那酒の御馳走になる。

歩いてゐる。残敵掃蕩中のものもある。急に「零時半出撃」と。あわてて準備する。雨の中の行軍仲々えらい。闇の中をどんだん行軍、泣きたくなつた。十時過ぎて望亭鎮に入る。汚い町らしい、本部を川西に定む。服を乾かし、チャン酒をやると、椅子にこしかけたまま眠る。寒くてちぢむ、火を焚いて椅子であたる。今日の行軍は相当困難だった。歩一九ノ一が前衛、旅団司令部、歩三六。

◇十一月二十一日 雨

朝七時出撃。駅に近づくと、ヒューと弾が来る、砲を撃つ。一寸行けそうでない、駅前で火を焚いてあたる。前衛は一大隊（一中欠）、36i長が前衛司令部。中食後動き出す。

望亭站—西方鎮道北方無名部落に聯隊本部

右第一線第一大隊、左第一線歩一九第一大隊

二ヶ中隊の敵というも仲々抵抗あり。急に二、三日前から気温下がり、行軍も、夜休むも寒くて、よく眠れぬ。

◇十一月二十二日 晴

五時頃、本部家屋内の隅から失火して火事にならうとした。皆慌てた。外は月が皎々として寒い。第一線は余程苦しからう。曉までは余り銃声せず。歩三六第一大隊正面は家屋を利用してMG、4、ig、工兵は架橋準備終り、七時攻撃開始。鉄道の右に出てゐる歩一九第一大隊（西島少佐）の正面には既設陣地ありと。午前、佐藤十名余りを引率して望亭に徴発に行く。正午過ぎ帰り、砂糖、ミソ、酒、米等入手。饅頭を作る。午後當番の部屋にて休む。夕方一杯やる。隊長はあつさりしたものを好み、副官はブタ等油物。夜早く休

◇十一月二十五日

十二時半、追撃のため出發を命ぜらる。

鉄道線上にⅠ／19i 36i本部、Ⅱ／36i 左第一線Ⅰ／36i 鉄道橋は敵が破壊して退却したので、左に橋をかける、副官殿が工兵四名を以て作業された。鉄道正面の工兵中隊は架橋がゴテゴテしてとても出来そうでないので副官が作らしたもので、Ⅰ／36i、聯隊本部と、どんだん追撃する。途中、敵の退却するを見るもあせらず、徐かにやりすごす。クリークに橋を土民三人に架けさせようとするもうまく行かなかつた。老いた二ーが裸で川の中で作業し勇敢だった。又クリークにぶつかる、東方をぐるりと東門に向つてゐる。行かんとする所は南門、南北に走るクリークに遮られ渡れない。東北に向つて進むうち、橋に敵がをり狙撃してゐる、これをやつつけた。煉瓦工場が多く、高い所で日の丸旗をふつていた兵は狙撃された。橋の上に沢山の瓦板が山の様に積み上げられてゐる、これを取り除いてゐると、ドカンと爆発す。七、八人やられ、一時は大さわぎだった。残りの瓦を二ーに取りのけさせると盛んに狙撃す。これを渡り、一人の支那女をとらへ道案内をさせる。この橋を渡ると、すぐまた橋があつた。この橋を渡ればよかつたのを、東側を行つたので左のクリークの向ふから狙撃され、見るとバタバタやられる。朝日の前田恒吉記者（昨日酒を呉れた人）が軒下で跳弾の為即死す。直ぐお経を上げる。又進むとバリバリやる。工場の中を通り、一寸出ると、忽ち第三中隊の兵一名と旗護兵塚崎がたふれ、読売の記者、渡辺峯夫記者が狙撃されてたふれる。この渡辺さん工場内で「少尉殿、煙草一本下さい、今度うまい煙草を持って來るから」と喜んで

出るか出ないにたふれる。とても残敵掃蕩が至難だ、これは初めからいけないと思った通りだ。中食をすませ引返す。初め、僕が渡らねばいかんと思った橋に引き返して渡る。この橋を渡る時にも小林少尉が狙撃されたふれる。

戦死 八名（内将校一） 負傷 二一名（内将校二） 歩一九一
戦死四、負傷 七

◇十一月二十六日 晴

朝起きたら霜で真白。朝銃声盛んなり、砲声も盛んになり来る。後方盛んに火災を起す。砲兵の観測将校がI/i（南門外）に連絡しようと思ひ度行っても駄目とのことにて引返し来る。昨日我部隊の取った工場に敵が又居ると。二郎が着ていた支那服をチョッキに仕立てた。当番等徴発隊を出す。夕食に豚をスキ焼にし、記者一同と会食す。朝日、読売記者の葬式をなす。記者一同と塚崎の遺骨を本部裏に安置し隊長以下参列す。午後四時、I/i、I/i 同時に南門に入る。夕方、もう銃声はさっぱりしない。夜は記者と外で話がはずむ。夕方第十六師団が来た。

◇十一月二十七日

朝七時出発準備 途中行進路が不明にて、行ったり来たりする。城内入城として軍旗を開いて行進。十一時城門を入り、城内を通り西門外に出ず。一般に軍旗に対する態度悪し。海軍中將の家に泊す。途中案内立派な家があり驚く。9Dが入城したと、旅団司令部急にあって夕方副官が来た。一風呂浴びて心地よし。無錫西門城外に泊す。

づけをくれる。梨がある、色んな徴発物を持って来る。夕食に吸いものを作る、豚のすき焼おいしく食ふ。此の家は大きな貿易商らしい。夕方、命令来る。金壇に行くと、明朝七時半出発。

◇十二月一日 晴

温い床を離るにものうし。おいしいゼンザイ一杯と茶漬二杯やって出発準備をなす。もう、戦斗が初まってより、まる二ヶ月。来るも来たもの常州あたりまで。行軍は里程の割りに足を皆痛めてゐる。荷物の重い為と疲労の為と思ふ。右の方に砲声を聞く。一里毎に休み、昨日とは行軍も楽だ。四時、黄鶴鎮に着す。村民が沢山出て来た。汚い部落だ、気持のよくない家だ。少し気分悪しく夕食もとらずに休む、副官も気分悪く食事せず休む。第一大隊長が悪いと軍医が走る。

◇十二月二日 晴

何んでも雪でも降りそうな空模様。今日は三里だから大したことなしに、城門外に着く。厳しい守備規則発令。金壇城に入り旅団司令部は宿る。余り綺麗な所ではない。夜、獣医室でゼンザイを食って東京日々の記者と面白く語る。

◇十二月三日 晴

十時出発命令下る。天王寺に向ふと。「第九師団ハ南京ニ向ヒ追撃セントス」旅団は午前一時出発。行軍約五里、夕刻七時着。薛埠鎮、百姓家なれど割りに綺麗だ。豚のおかずはあいた、南京豆をいって食す。馬当番に肩をもます。途中の山地の形はとも良かつ

◇十一月二十八日 晴

朝三時過ぎ起床、四時出発。途中障害物が七、八ヶ所あり。梅園にて道を誤り左に行き太湖の方に行き引き返す。山と湖水、朝の眺は又格別よかった。午前中の行軍は万点だった。木橋を皆焼きあり。雪橋鎮に宿す。外で見ると立派に見えるが大した町でなく、汚い。夕食時、焚火にあたりウイスキーを二杯飲む、それが悪かつたか食事中軽い貧血を起す。疲れてすぐ休む。

◇十一月二十九日 晴

昨日貧血を起した為か、身体の調子がよくない。本道上なる為、昨日と連続なる故か、兵は道は良いが足を痛む。二時間連続行軍はえらい。飛行機、連絡の為、通信筒を降す。常州に入ると荒されてゐる。爆弾を喰らったか、また火事を起してゐた。第十六師団の兵は盛んに徴発して煙草と南京豆を持てゐた。常州の川向ふに前衛は全部宿営した。疲れてすぐ床に入る。今日は腎部の穴の所が毛ずれで痛んだ。二階の汚い部屋の寝台に寝たがフトンが暖くて良かった。

◇十一月三十日

朝八時過ぎ目覚む。朝十時出発し得る如くと、旅団長が昨日言ったから如何かと思つたが、動かなかつたのでホッとした。本部の家を渡る。来て見れば案内立派だ。豚料理の膳も用意されてゐる。当番は部屋の掃除とボタモチ作り。中食はおいしく食つた。大毎の山本来る。ボタモチがおいしいと三つ食ふ。医務室はキンカンのあめ

た

◇十二月四日

七時出発、村端に出ると軽装甲車が出発す。入口の家が焼けつつあった。山道を行軍、途中被甲を忘れ惜しいことをした。天王寺で中食、七時朝廟に着。障害多く困った。イモを焼いて沢山食す。

◇十二月五日 晴

五時起床、昨夜は寒かつた。闇の中を行軍、張廟から左へ小道を前進。途中道を右に行く可きを左へ行き、少し大廻りする。途中、鎮で敗残兵を捕え、土田軍曹刀で切る。今日の道は細くて悪い。第六中隊は健脚隊を作り、三時出発して前進す。中食を野菜で食ふ、寒い。今日は氷がクリークに張っており、霜は相当白かつた。中食の時、第六中隊より前面に敵がをると報告し来る。直ちに砲列を布き、第三大隊右第一線、第一大隊左第一線とす。前には点々と敵監視兵の線が見える、一帯は小山の連続、とても戦斗にはもってこいの地形、敵の収容陣地らしいと。陣中羊を焼いて食す。夕食は豆腐の汁にておいしかった。南京まで五里余だと。

◇十二月六日 晴

くつきりとした朝だ。昨夜から追撃攻撃を続け寒い夜だった。二回起きてたき火にあたった。朝八時、隊長は副官と二人で戦斗司令所にいられた。九時本部前進す。司令所から攻撃模様を観測す。後方からイモをふかして持参させ食ふ、おいしいものだ。前進中迫撃砲弾が二発落下す。戦場は小山の連続でとても良い陣地だ。夕方か

ら寒い。久し振りに迫撃砲が前後左右に七発連続落下す。四時、山崎大尉の消息が判明す。

◇十二月七日 晴

朝八時、白い霜を踏んで戦斗司令所に行く、昨日の処は砲兵の観測所になってゐる。左の方に移り道路の右上に位置す。暫くすると見る間に七、八発ドカンドカンと来てびっくりする。砲兵が左の方で負傷す。壕を作る。塩をかけたふかし芋の間食おいしい。午前中眼鏡で監視。午後青山少佐(師団)が用があるとして山から下りる、弾薬補給の件。高柳東京日日の記者に会し本部へ帰る。弾薬を受けにⅢ、MG、BiA 来る、小行李も来て連絡す。第九中隊左後の掩蓋の敵を掃蕩の爲第十一中隊の一分隊をやった。又余が山を下りてから更に一組やった。所がその報告に三、四名でなく二十名以上居った。この後報告来り、第九中隊と第十一中隊の一分隊が突入したら、二十五名程をつたと。中に米、ブタがあったと、敵も長く抵抗の予定なりしならん。第二大隊夜襲をやると。朝日の記者六名来る。砲声盛んに夜間ゆ。

◇十二月八日 晴

八時、水筒の栓が見付からず困る。直ぐ山に小柳と行く。白霜を踏み行くは心地よし。前の陵線に山砲三十六門がずらりと並び好適の陣地なり。隊長いたく張り切り、十二時突入だと十時頃命令さる。軽装甲車に突入協力を命ぜらる。砲兵の集中射撃うまく行かず、折角出た第九中隊が山砲の弾にて二名の犠牲者を出しさがるを見る、隊長ブンブン怒る。第一線より突入を延ばせと言ってくる。

◇十二月十日 晴

夜中、銃砲声盛んなり、如何になるやらん。砲弾にて負傷が出、之を収容すれば、その家屋に落下す。通信の兵並びに土田の葬式をする。四時三十分第一大隊は突撃準備を完了すべしとの命下る。砲兵は弾が無いと云ひ出し、急に軽装甲車で機関銃、山砲の弾を取り寄せる。加藤寿一が昨日負傷して一人で居るのを発見、直ちに世話して担架で運ばす。飛行機、高射砲、迫撃砲等とても猛烈だ。五時、砲兵の射撃が終ると突入、一部城門内に入ると。隊長、副官、山本、大毎記者等観測中、迫撃砲弾落下、一同飛び出し来る。副官の如きは真白にはこりをかぶり、一同成功を喜ぶ。隊長は軍旗を奉拜。活動写真等盛んに活躍す。萬歳を唱え、一同記念写真を撮る。一同ブドウ酒で祝杯を挙ぐ。一同萬感胸に迫り唯涙あるのみ。刻々の状況を聞き一同緊張す。余少し床に入ったが眠れぬ。武田旅団副官を初め徹夜。十二時伊藤少佐戦死の報を聞き驚く。門内には葛野中尉負傷して頑張り指揮し、外には第二中隊竹川中尉午後十時頃おくれて到着し、直ちに大隊に復帰し門外を指揮す。一時頃敵は催涙ガスを使用して門内の者を困らす。又石油をしたした綿に火をつけて投下し、手榴弾を投げ込む。予備隊で弾薬、糧食を運ぶ。午後九時頭部に手榴弾破片創、「死力を尽し誓って城内を確保す、聯隊長によろしく」(電話)

◇十二月十一日 晴

午前五時頃、山砲が城門左右の城壁に破壊斜面を作る為射撃す。天明を待つて十加農が城壁に射込む。午前九時二十分、梯をかけ銃

二時突入に改めらる。二時十五分程前から集中火、爆撃等を利用し、第二、第三大隊、軽装甲車相連繫して突入。散兵の掩蓋に突入するのが絵の如く実にうまく成功す。軽装甲車は第三大隊正面の路上で狙撃され止る。どんどん戦果を拡張、見ていても面白い。第一大隊の方は一向進まぬ、隊長いらだつことひとし。三時頃、本部前進し、淳化鎮を通り第一線の後方をどんどん前進し、方々から狙撃されながら四時高官頭に出づ。夕霧の中に前方陵線に戦車三台を認む、友軍かと思ひしが、それにしては変だと思ひ裏の壁の上から見れば、敵戦車に兵二、三百後続す。IのMGが猛射すると、戦車のみ前進、家の前を通りどんどん行く。何ともする能わず。只、隊長以下多数の敵が来る時の用意をする。間もなく敵戦車は反転し帰って行った。本部は次の山下の村に後退し、汚い家に露営準備をする。十二時半、前方の敵退却とのことにて、追撃前進、どんどん行く。第三大隊が、さきの敵戦車二、トラック一、サイドカー一を奪取したと聞いた時の嬉しさ。夜どほし追撃。

◇十二月九日 晴

朝六時稍前、光華門前二百米の地点に達す。途中余り抵抗なく前進した。逃げおくれ来る敵を何人もやつけた。まだ暗く、あたり一帯の様子が判らぬ。突然バツと電燈がついたのには驚いた。外燈はすぐ小銃射撃で壊した。左方の建物に点燈しあり、囲壁を破って入れば防空学校とのことなり。この中に集結す。盛んに砲撃を受け、通信班の家にも落下す。本部を移転す。新聞記者沢山来る。土田軍曹命令受領に行き石橋の所で腹と手をやる。工兵の爆破、山砲の破壊射撃とあらゆる方法をとるも城門破壊不成功なり。

に日章旗をつけ振りをを見る。重砲の参加により何とはなく心強く感ず、十二時過ぎ友軍機の爆撃盛んにて、兵舎も其の震動にゆらぐ。この砲爆撃により敵の銃砲撃びやっと止む。砲爆撃が止むと又重迫の集中を喰ひ、本部前に二発連発し、椅子に寄り居眠りしていた隊長の直前にて爆発し、隊長耳の所少し傷く。誰が居たかわからぬ猛進にて、余は避難所に飛び込む。中根少尉軍医を呼ぶ、誰がやられたかなと思ひ本部室に入ると、向井中尉が足をやられてゐる。両足に破片があつたと。仲々盛んに重迫来る。夕食を第一線に運ぶ、弾を運ぶ。兵が少く本心に心細い。内山に会ふ、弾薬を第一線に運ぶ為なり、彼は元気だ。夜、杉山少尉報告に来る、副官叱る、任務の為一步も下つては駄目だ、帰れと。彼は帰って行った。実際可愛相だった。終夜火の所で過ごす。大毎の山本も居た。

◇十二月十二日 晴

昨日とは夜の重迫も少くなつた。朝、伊藤大隊長の告別式をやする。第一線ははかばかしくない。午後、裏の囲壁下を百人ばかり敵が光華門方向に行くのを発見し、軽機関銃で中根少尉射撃す。午後四時半頃、中根少尉等と当番室にて雑談中、迫撃砲弾来る、近弾なるを知り走って避難するやドカンと落下す。てっきり中根君やられたと思つた。煙で一ぱいで何が何やらわからない。案外、西川がやられた、左大腿部、左手がしびれるといふのでぬがして見ると、左上膊部に大きな破片傷がある、一ヶ所は盲貫でないかと思はれた。少し熱がある、手当してやる。夕方担架が来たのですぐ後送した。同時に小川が昨日病院から帰って来て又やられた、彼は重傷だからダメかも知れぬ。本日の各隊長会議で、明十三日午前十時を期し総

攻撃の準備をなす。

◇十二月十三日 晴

どうも昨夜から敵の弾声が少ない。一時頃には、こちらが射てば敵も射ったが、三時頃からサッパリ応射しない。電話で敵は退却ぢやないか、斥候を出せと言つてやる。四時過ぎ又出す。午前六時過ぎ第一線は城壁を上を占領したと報告あり。本部は出発準備。城壁に近づけば、ひどい陣地だ。壮烈な戦死者の死体がころがっている。城壁に上れば南京市街が眼下に見える。軍旗を出し宮城を遙拝す。萬感胸に迫り感慨無量。壁上よりナスカー砲の射撃を見る。隊長、一同大きな姿勢にあるを戒めらる。中山門に日章旗を見る。下に本部は下る。旅団長閣下等来り、隊長との握手、劇的だ。小西参謀も来る。軍司令官ノ宮も御□までおこしになったと。入城の命来る。中山門にも第三十五聯隊が着いてゐる。第十九聯隊が後方から来り城壁上に軍旗を出し全部で軍旗奉拝、喇叭を聞くと心がジーンとなり、亡き戦友達の事が思はれ知らず涙が流れた。隊長に命ぜられて、城門上に占領標を建てるべく学校に帰る。

脇坂部隊占領 十二月十日午後五時光華門

同 十三日午前五時同城壁上

とペンキで書き建てる。伊藤隊長（第六中隊長）と語る、山際は個人感状で即時中尉になるらしい、好運な奴ぢや。夕食、会食祝杯、記者団と共に。歩一九は夜八時過ぎ軍司令部方向に移動、残敵掃蕩らしい。

◇十二月十四日 晴

久しぶりのんびりと過ごす。めずらしく治良助から来信。風呂に入り心地よし。

◇十二月十五日 晴

のん気な一日。家へ手紙を書く。風呂に入り心地良し。何もすることがない。近く移動するかも知れずと。熊沢大尉珍しく来る。午後三時頃、西本願寺管長後藤澄心。小笠原上海輪番来り慰問さる。之に会す。午前中、山際、葛野隊長等現地の状況を師団長に報告す。自動車微発に行くも面白からず。夕方、近くで火事を起し、一時は驚いた。

◇十二月十六日 晴

午後トラックで自動車微発班の様子を見に行く。途中大道を通り色んな大きな建物を見る。揚子江に近づく程、敵の逃げた跡の惨たるを見る。外人界の方に多数の避難民を見る。どれも米国旗の下にをる。下関近くには海軍々人多く自動車の往来盛んなり。下関には敵の捨てた銃砲、自動車多し。微発自動車、ディーゼルの新品、所が運転手が下手で手間どる。四、五日中に移動の模様。副官は武田大尉、旗手に杉山少尉、通信班長に中根少尉となるらしい。田賀少尉帰る来る。

◇十二月十七日 晴

今日は軍司令官の入城式。行く積りの所、寺田中尉が行ったので自分は残留。乗馬の練習に行く、田賀も来たが初めてで馬が動かぬ。午後三時頃一同帰り来る。乗馬に行く途中、玉村幸雄に会ふ。

◇十二月二十二日

ぶらぶら遊ぶ。

◇十二月二十三日 雨

出発準備。

◇十二月二十四日 曇

七時出発。小雨。行軍中は又雨になりはせぬかと心配。余は後発、副官も事務整理の為残る。一時過ぎ中山路にサイドカーで迂廻して最後の手紙を投函して中山門に向ふ。もう再び南京に来ることもないだらうと思ふと何んとなく懐かしい。出る部隊、入る部隊盛んなものだ。途中同じ方向に皆行く、両側は皆焼き払ってある。予定地より前に宿泊する。酒があり、飲んで酔ふ。サイドカーも仲々寒い。

◇十二月十八日 曇

彼は歩一九の西島大隊の大打撃のこと、暫く本部で遊んで帰る。午後四時、明日の慰霊祭の打合せに葬場に行く。オートバイが居らぬので、大毎のオートバイに乘せて貰ったが、あまり速力を出すので心地悪かった。

◇十二月十九日

西川を病院に見舞ふ。思ったより遠くて弱った。西川は銭入れを取られたらしいと、十円やった。加藤も同室に居た。内地帰還になるらしい。

◇十二月二十日 晴

市内見学に出る。明孝陵を見学、陵中に陣地を築き、とてもひどい荒れ方だ。一面鉄条網を張り巡らし、道路上に地雷あるを他の将校に注意され、歩いて中山陵に行く。規模雄大にして立派。軍官学校、国民政府、参謀部、玄武門より玄武湖を見て、下関に出て帰る。夜、副官室にて武田大尉等と大いに飲む。

◇十二月二十一日 晴

無為。

歩兵第三十六聯隊 第十二中隊陣中日誌

昭和十二年十二月八日、十八日

十二月八日 晴

威斗唐家—淳化鎮—東部上方鎮

一、午前〇時十分、道関上等兵、近藤治吉、岩瀬松次郎の三名、突撃陣地偵察に至り、同二時帰還、左記報告す。

「敵陣地前二ハ一連ニ鉄条網及び鹿砦アリ。僅カニ凹地ノ池ノ附近ハ鹿砦ノミニテ鉄条網ナシ」

右報告に基き中隊長は第三小隊を決死突撃隊とし陣地後方に集め左記訣別の辞を与ふ。

「天皇陛下ノ命ニヨリ決死隊トナリ、前方トーチカ陣地ニ夜襲ヲ決行ス。細心ノ注意ト大胆行動ニヨリ成功ヲ祈ル」

第三小隊長橋本少尉は決死必勝を期し「名譽ノ決死隊ニ選拔サレ誓ッテ成功ヲ期ス」との一言を残して、工兵一分隊と共に前進し、午前三時十五分工兵の鹿砦爆破と共に突入し所命の陣地を奪取す。

此の報により中隊長は大隊本部と連絡し、更に中隊長は自ら指揮班四名を率へ橋本少尉と連絡し前方に陣地の偵察を為す。

午前五時三十分、中隊長は橋本小隊及び工兵分隊を率へて前進し、敵トーチカ陣地直前の凹地に進出し、工兵の鹿砦爆破と共に突入した。

然しながら、既に第一回の夜襲により我が行動を知った敵は照明

弾を上げ各陣地より全火力を集注し、我が損害続出するに至った。

中隊長は自ら軍刀を振って突入し敵陣地の一角を占領したが、この時の現員は中隊長、橋本少尉、東伍長、小野伍長、小原、山本両上等兵及び兵二十三名にて、中隊長は左足に爆傷を負った。

中隊長は小原上等兵を大隊本部に派遣し「所命陣地ノ一角ヲ占領セルモ残員僅少ナリ、増援ヲ乞フ」旨報告せしめ、死守した。然し、増援来らず、中隊長は更に腹部貫通銃創を受け、橋本少尉は胸部に敵弾を受け戦死す。

中隊長は止むなく後方凹地に退避し、中隊長は東伍長をしてこの状況を大隊に報告せしめた。

此くして中隊長は第三小隊の殆んど全部を失ふに至ったが、第一、第二小隊を以て陣地を推進し攻撃を続けた。

午後二時、中隊長は戦車と共に突撃して之を抜き、淳化鎮に進出す。

次で、左に大迂回して午後八時三十分東部上方鎮に進出す。

此の時、敵戦車三台、貨車二台前進し来る。第一小隊山田初次郎外七名、第十中隊の兵数名と共に敵戦車を肉迫攻撃し之を鹵獲す。又、伊藤少尉はトラックに飛び付き之を鹵獲す。

午後九時、命により東部上方鎮中央に集結し、大隊予備隊とな

る。

二、歩三六Ⅲ作命第五一号

第三大隊命令

十二月八日午後九時

於 東部上方鎮

一、敵ハ諸方面ヨリ退却中ニシテ、其ノ一部ハ東方ニ残置シアリ

二、大隊（第七中隊及び独立機関銃中隊二分ノ一ヲ配属サル）ハ東部上方鎮ニ於テ敵ノ退路ヲ遮断シ、該地ヲ確保セントス

三、第十中隊及び機関銃中隊ハ上方鎮東部ヲ確保シ、当面ノ敵情ヲ搜索スベシ

四、第九中隊ハ部路北端ヲ占領シ、北方ニ対シ警戒スベシ

五、第七中隊（一小隊欠）ハ部落南端ヲ占領シ、南方ニ対シ警戒スベシ。特ニ一分隊ヲ以テ本道上ニ陣地ヲ占領スベシ

六、第十一中隊ハ部落西端ヲ占領シ、南京方向ニ対シ警戒スベシ

七、各隊ハ少クモ二ヶ所以上ニ歩哨ヲ配置シ警戒スベシ

八、戦備ノ度ハ、装具ヲ付シ半数仮眠トス

九、第十二中隊及び第七中隊ノ一小隊ハ予備隊トシテ、部落中央ニ位置スベシ

十、給養ハ携帯セルモノ及び当地ニ於テ徴発セルモノヲ使用スベシ

十一、非常警報ハ喇叭ニ声トス

十二、予ハ東部上方鎮中央ニ在リ

三、戦死傷

戦死 少尉 橋本 豊

大隊長 山崎大尉

兵 十名

戦傷 中尉 佐藤弥藏

下士官 一兵

兵 九名

四、鹵獲兵器

戦車 一

トラック 一

五、本日総員 七六名。

十二月九日 晴

東部上方鎮—南京防空学校

一、午前〇時三十分、東部上方鎮を發し、南京に向ひ追撃猛進す。一同南京を目前にし士氣旺盛なり。鹵獲戦車は部隊号を標記して残置し、負傷者はトラックにより輸送す。

我が急迫により敵は灯火、焚火をそのままにして逃走し、為に所々火災を生ず。又、我が軍を友軍と間違へ我が部隊に入り込む敵もあり、暗中到る処白兵を振ひ一路南京を目指して進撃す。

午前六時、南京城外防空学校に到着す。太白むと共に南京城を望見し将兵の感慨無量。堅き決意を以て南京攻略を準備す。

中隊長は装具を残置したまま前進したため食料なく、弾薬は連日の戦闘により残弾は各人四十発内外なり。

午前六時十五分、晩の静寂を破って城内にサイレン鳴り響き、警鐘乱打さる。首都南京、否、中華民國断末の叫びの如し。

午前九時、左第十一中隊と連繫し防空学校西南側に陣地を占領し警戒す。

この頃より城壁上よりの敵火一段と熾烈となり、迫撃砲弾盛んに落下す。

二、正午、波多野博視、鷹尾正の両少尉中隊に配属さる。

依て、波多野少尉を第二小隊長、鷹尾少尉を第三小隊長に命ず。

三、敵敗残兵はクリークを隔てた部落に続々集結し、壕を構築しあり。敵に警戒す。

四、本日総員 七一名。

十二月十日 晴

南京防空学校

一、中隊は防空学校に在りて警戒に任ず。

二、午前九時、左記要旨の大隊命令あり。

第三大隊命令

一、第一大隊正面ノ敵ハ毒瓦斯（催涙性）ヲ使用ス

依テ各隊ハ最少限ノ人員ヲ以テ威士唐家ノ戦闘ニ際シ残置セ
ル防毒面及ビ装具ヲ搬入スベシ

依て中隊は右搬入のため七名を派遣す。

三、午前十一時下達の大隊命令左の如し。

歩三六作命第五十二号

歩兵第三十六聯隊命令

十二月十日午前十一時

於 防空学校

一、聯隊ハ本日薄暮ヲ期シ、光華門占領ヲ決行セントス

二、第一大隊ハ諸準備ヲ整ヘ、砲撃ノ成果ヲ待ツテ午後五時三十分光華門ニ突入シ、逐次戦果ヲ拡張シ、之ヲ占領スベシ

三、配属山砲兵大隊ハ、其ノ一部ヲ以テ午後三時ヨリ城門破壊ヲ
実施スベシ

四、工兵中隊ハ交通壕ノ掘開ヲ継続スルト共ニ、城門ノ除土作業
ニ任ズベシ

五、第二大隊長ハ爾余ノ諸隊ヲ指揮シ、城門攻略及ビ後方トノ交
通連絡ニ任ズベシ

六、予ハ防空学校ニ在リ

下達法 口達筆記

聯隊長 脇坂大佐

四、午後五時三十分、遂に光華門に日章旗揚るを見、一同意気挙る

五、前日來の敗残兵更に一段と數を増す。午後八時三十分、鷹尾少
尉兵三名率ゐクリーク前方部落の焼打ちを行ふ。

六、東部上方鎮に於て負傷せる山田初次郎、青木徳平、本朝死亡せ
り。

七、本日総員 七一名。

十二月十一日 晴

防空学校

一、中隊は防空学校に在りて前任務を続行す。

二、歩三六作命第五十三号

第三大隊命令

十二月十一日午後三時

於 防空学校

一、城壁上ノ敵ハ尚ホ頑強ニ抵抗シアリ

聯隊ハ死力ヲ尽シテ光華門城壁ニ戦果拡張ヲ準備ス

十二月十二日 晴

防空学校

一、中隊は前任務を続行す。

二、第三大隊日々命令

一、十二月五日以降ノ戦死傷者ニ就キ左記事項ヲ明十三日正午マ
デニ報告スベシ

戦死傷月日 傷名 役種 氏名

戦死者ハ受傷地名、戦死時間ヲ記入スベシ

二、十一月十一日以降ノ受傷者ニテ原隊復帰セル者ニ就キ、左記
事項ヲ報告スベシ

受傷月日 原隊復帰月日 役種 階級 氏名

三、南京攻略計画を受領す（略す）。

四、本日、上海方面軍司令官宮殿下よりお菓子を下賜さる。

五、本日総員 七一名。

十二月十三日 晴

防空学校

一、昨夜半より敵の銃声減少し午前四時頃には全く止み、敵の大部
は既に退却す。

午前五時、聯隊長は軍旗を奉じ城壁に登る。

二、歩三六作命 号

歩兵第三十六聯隊命令

十二月十三日午前十四時四十分

於 光華門

一、第一線各部隊ノ奮戦ニヨリ午前五時光華門城壁ヲ占領セリ

第二大隊長ハ第一大隊及ビ独立機関銃第一中隊ヲ併セ指揮シ

光華門ヲ死守スルト共ニ、城壁ニ対スル戦果拡張ヲ準備ス

配属砲兵大隊ハ随時城門西側城壁ノ敵制圧ニ任ズ

工兵第二中隊ハ、兵營―第一大隊間ノ交通壕開設ニ任ズ

二、第三大隊長代理西森少尉ハ爾余ノ諸隊ヲ以テ、通齊門監視及
ビ防空学校ノ警備ニ任ゼントス

三、第九中隊及ビ機関銃中隊（二分ノ一欠）ハ依然兵營東南橋梁
及ビ通齊門ニ通ズル道路ヲ警戒スベシ

四、第十中隊ハ兵營南側（土壁）ノ警戒ニ任ズベシ

特ニ第九中隊トノ連絡ヲ密ニスベシ

五、第十一中隊ハ兵營北側（土壁）ノ警戒ニ任ズベシ

特ニ、土壁破損箇所アルヲ以テ、障害物ヲ構築シ警戒ヲ嚴ニ
スベシ

六、第十二中隊ハ兵營南側（土壁）ノ警戒ニ任ズベシ

七、歩兵砲小隊ハ兵營東側（土壁）ノ警戒ニ任ズベシ

大隊長代理 西森少尉

下達法 口達筆記

注意

1. 友軍及ビ敵軍ノ砲弾頻々トシテ落下スルニ付キ、不慮ノ受

傷ニ注意スベシ

2. 前日ノ戦死傷間ノ場所、傷名ヲ毎日正午マデニ報告ノコト

3. 射耗弾及ビ現有弾數ヲ毎日正午マデニ報告ノコト

4. 当日ノ現在員ヲ毎日正午マデニ報告ノコト

三、本日総員 七一名。

左翼隊ハ当面ノ敵ヲ撃破シ、城壁東南五流橋及ビ之ヨリ西方
ニ通ズルクリークノ線ヲ經テ通齊門ヲ南北ニ通ズルクリーク
ノ線ニ進出ス

二五、(略ス)

六、第三大隊ハ光華門西側兵營(防空学校)ニ於テ師団予備隊ト
ナルベシ

七、(略ス)

八、予ハ現在在地ニ在リ、第一線ノ進出ニ伴ヒ其ノ左翼後ヲ前進ス
三、午前十一時、左記大隊命令を受く。

第三大隊命令

一、大隊ハ師団予備隊トナル。依然警備ヲ続行シ、師団ノ来着ヲ
待タントス

二、各隊ハ各々警備区域ニ集結シ、隨時出発シ得ル準備ニアルベ
シ

四、本日総員 七一名。

十二月十四日 晴

防空学校

一、師団司令部は午前八時防空学校に到着す。

中隊は防空学校にありて配当区域を警戒す。

二、歩三六Ⅲ作命第五四号

第三大隊命令

十二月十四日午前十時

於 防空学校

一、大隊ハ依然師団予備隊トシテ、師団衛兵ト協力シ防空学校及

8. 各隊ハ火ノ用心ニ注意スルコト

聯隊長注意

武勲赫々タル功績ヲ建テ全軍ニ名聲ヲ博シタル軍旗ヲ有スル当
聯隊ニシテ、軍紀風紀上些少ナリトモ師団ヨリ注意ヲ受クル事
ナキ様、各隊長ニ於テ注意指導スベシ

四、原隊復帰 林 静馬、水本広雄、大崎伍長

五、崑山の舟監視より帰隊 田辺賢一、島谷重太郎、名倉健一、池
富士太郎

六、本日総員 七四名。

十二月十五日 晴

防空学校

一、中隊は三分の一の人員を以て淳化鎮戦死者収容及戦場掃除を行
ふ。

二、原隊復帰 篠崎豊次

崑山兵器委使役より復帰 藤井繁志、北嶋直右エ門

三、本日総員 七五名。

十二月十六日 晴

防空学校

一、聯隊日々命令(午前五時)

一、明十七日、入城式ヲ挙行セラルルニ付キ、左ノ通り心得ベシ
1. 編 成

聯隊長ノ指揮スル混成一ヶ大隊トシ、混成大隊長ハ第二大
隊長檜皮少佐トス

ビ其ノ附近ノ警戒ニ任ゼントス
其ノ警備担任区域左ノ如シ

第十中隊ハ学校東側土壘及ビ其ノ附近

第十一中隊ハ学校北側土壘及ビ其ノ附近

第九中隊、機関銃中隊ノ警備担任区域従前ノ如シ

第十二中隊、歩兵砲ハ営内ニアリテ、特ニ夜間ハ隨時出動シ
得ル如ク待機ノ姿勢ニアルベシ

大隊長代理 宮内少尉

三、 日々命令

一、 舍営日直將校 少尉 高橋武夫

部隊日直將校 同 鷹尾 正

午後五時ヨリ服務スベシ 交代時刻ハ師団規定ニ基キ後刻示
ス

二、 舍営日直將校 少尉 河北三郎

部隊日直將校 准尉 飛川直治

明十五日頭書ノ通り日直ニ服務スベシ

師団高級副官注意事項

1. 本十四日ヨリ舍営日直及ビ部隊日直將校ヲ設ク

2. 各宿舍毎ニ一名ノ不寝番ヲ設クルコト

3. 日課時限ハ、起床ハ七時三十分トスルモ、其ノ他ハ各隊ニ於
テ定ムベシ

4. 各隊ハ廁ヲ設ケルコト

5. 各隊ハ勝手ニ建物ヲ使用セザルコト

6. 宿营地外ニ出ル時ハ指揮者ヲ設クルコト

7. 各部隊ハ速カニ宿舍附近ノ掃除ヲナスコト

二ヶ中隊(第二大隊ニテ編成)

一ヶ中隊(第一大隊ニテ編成)

一ヶ中隊(第三大隊ニテ編成)

一ヶ中隊ハ人員一九〇名トスルモ、成ルベク多カラシムベ
シ。ラッパ手ハ各大隊トモ全員ヲ差出スベシ

2. 集 合

午前十時三十分、聯隊本部前広場ニ集合シ、第二大隊長ノ
指揮ヲ受クベシ

3. 服装ハ軍装トシ、鉄帽、防毒面ヲ除キ、略綬佩用。(昼食
携行)

聯隊長ノ他乗馬者ハ徒歩トス

細部ニ関シテハ別命ス

二、前項命令ニ基キ、第三大隊ニテ集成スル中隊

中隊長 宮内少尉

小隊長 瀬藤少尉、峯金少尉、清水少尉、本田准尉、進藤曹長

給養係 三谷軍曹

兵器、瓦斯係 藤倉軍曹

衛生兵 第九、第十中隊ヨリ各一名 ラッパ手 第十二中隊ヨ
リ

第九中隊 分隊長 三名 小銃兵 三〇名(内輕機二分隊)

第十中隊 " 五名 " 四〇名(" 一分隊)

第十一中隊 " 五名 " 五〇名(" 二分隊)

第十二中隊 " 三名 " 三〇名(" 一分隊)

歩兵砲 " 二名 " 三〇名

明十七日午前八時三十分迄ニ大隊本部前ニ集合

三、 大隊日々命令

部隊日直將校 十二月十六日上番 少尉 渡辺 良雄
同 十七日上番 同 田口平太郎

四、 聯隊会報

一、 来ル十八日、軍ノ慰靈祭ヲ舉行セラルルニ付キ、各隊ハ武器ノ手入ヲ充分ニシ、尚ホ被服ハ出来ルダケ補修手入ヲナスベシ

挙式前日、各隊長ハ検査ヲ行フベシ

二、 途上、上官ニ会フモ敬礼セザルモノアリ、厳正ナル敬礼ヲ望ム

三、 昨十五日、西本願寺法主光照師来隊、祝詞、慰問ノ辞ヲ述べタリ

四、 熊沢大尉（聯隊出身）第十軍副官トシテ十五日来隊、祝詞、英靈ニ対シ弔意ヲ表セリ

五、 入城式、慰靈祭時ノ注意

1. 各隊使用支那人ノ監視ヲ厳ニスベシ

2. 入城式ノ個人撮影ヲ禁ズ

十二月十七日 晴

防空学校

一、 峯金少尉以下三十二名、南京入城式に参列す。

二、 鷹尾少尉第三中隊に転属さる。

三、 原隊復帰、吉田由数、山崎福松、本田春吉

四、 本日総員 七八名。

福元 続 日記

十二月十日 晴天 夜攻撃

午前二時頃依り追撃戦南京一里半程手前にて一寸かり寝す。敵が早々にげたらしく飯等も多くさん焚いて有った。それを喰ったが何共知れぬ美味であった。

午前七時出発、通惠里、汪家村通過、汪家村より千米程前進した所に敵の砲を打ち込まれる。馬等の損がいがあった。その後汪家村に帰り夜行軍す。西門に向ってふらふら。

十二月十一日 晴天 夜行軍

夕べは行軍にて朝に成ると弾を打掛けられ其と戦闘す。発煙筒等打込んで攻撃、大堡村で有った。

◎中野秀雄君が負傷、大堡村にて。

晩は向庄部落にて露営す。

今日の戦闘面白かった事は無い。敵と百米程の所に近より射撃、擲弾筒にて。負傷者富永ヒサシ、中野、戦死者西上等兵。

十二月十二日 晴天 向庄出発

午前九時十分出発して攻撃、中隊の比嘉君戦死、其の後中隊は上新河迄前進、敵は多く其の前進出来ず、後の上河鎮まで下がる。午

十二月十八日 曇

防空学校

一、 軍慰靈祭に伊藤少尉以下三十名参列す。

二、 聯隊会報

1. 時局ニ鑑ミ、新年度年賀ハ廃止ト定メタルニ付キ徹底ノコト
2. 下士官ニシテ医師ノ免許証ヲ有スル者ヲ調査シ、官氏名、免許証番号ヲ報告ノコト

3. 各隊ハ映画及ビ料理ノ心得アル者ヲ調査シ、明日正午迄ニ聯隊本部ニ報告ノコト

4. 南京城内見学ニ関シテハ、各隊ハ半数ヲ残置シ、将校引率ノコト（将校ナキ部隊ハ将校アル部隊ト同行）

三、 原隊復帰 吉田正一

四、 本日総員 七八名。

歩兵第四十五聯隊第十一中隊・上等兵

後十時頃、其の後現在地にて露営す。

十二月十三日 晴天 上河鎮

予定が変り中隊と工兵一コ分隊、山砲一門、現在地より河にそつて追撃戦の別命を受ける。それで午前六時三十分出発すると敵の斥候が来て、とうとう四万程の敵に包囲された。残念ながら弾は無く、友軍との連絡は取れず、どうも困った。でも天のたすけと言ふか敵の戦死者の弾を取り、又射撃す。自分は擲弾筒にて射撃。四五百人は殺した事であろう。とにかく小銃にても射った。その一発で四人も殺した。こんな楽しいことは初めてで有った。敵の死者は六千人余は有りとの事だったから、足のふみ場は無かった。中隊も戦死は中隊（長）以下十四名、負傷者が三十五名程で有った。自分達は泣くに泣かれない有様。

今度こそ敵を良く射す。しかし又、戦友のかたきを打たなければならぬ。今度（又）の戦闘にしよう。戦闘は十一時頃にて終わった。

◎今晚は仮葬す、現在地に於て。又晩は敵が来た。十二月十三日は自分達に取りて記念日である。

十二月十四日 晴天 上河鎮出発
午前八時出発して大隊復帰す。

南京城外陸海軍刑務所に宿営、大隊全部現在地にて午後は微発に行き。まことによかうが多く、美味かった。

十二月十五日 晴天 刑務所

今日午前中兵器の入手、午後より微発に行く。六時頃帰り着いた。

十二月十六日 晴天

午前八時より十時迄兵器の入手す。十時半より検査有り。午後は糧秣の微発に行く、舟にて。夕方六時半頃帰着。

十二月十七日 晴天

午前十時より道路掃除し支那兵の死者等かたづける。

◎又、入城式に参加、其から帰りて洗濯等致す。

今日は負傷した岩崎君がとうとう死す。残念な事であった。

十二月十八日 曇天

午前八時半頃より南京飛行場にて慰霊祭有り、其の為自分等も行

く。南京は誠に広い感じで、又電車は走って居ないが良い所であった。午後五時頃宿舎に帰った。

十二月十九日 晴天

補足証言 宮園 盛 二

歩兵第四十五聯隊第十一中隊
第一小隊第二分隊長・伍長

浜崎富蔵氏宛 昭和六十年九月三十日

十二月二十日、師団司令部より十二月十三日上河鎮附近戦闘に於ける敵の遺棄死体は過少報告せられていたようだから、至急死体数を調査報告せよとのことでした。(十二月十五日師団長及び旅団長戦場視察所見)

中隊命令により第一小隊長浜田准尉指揮の下、第一小隊は同日午後現場に急行、死体確認の調査を実施しました。

調査の結果、死体総数式千参百七拾七名を確認、師団司令部に再度報告されました。

〔編集委員註〕『福元日記』で注目すべき点

①十三日の戦闘時、敵兵力四万、遺棄死体六千と目算していたのが、二十日に数えて確認した死体数は二千三百余であったこと。

②現在虐殺記念館がある江東門刑務所に九日間平穩に宿営していること。

(参考)『南京戦史』二二七頁、『資料集補遺』第二中隊陣中日誌

今日はぶらぶら歩き乍ら楽しき日を過ごす。

十二月二十日 曇天

午前中は休養す。午後より上河鎮に行き敵の死者を数へて見る。一コ小隊程行って二千三百七十七人有る。河に流れて死んだ者が多かったとの事でした。

十二月二十一日 晴天

今日は一日中休養。午前六時中隊に戦死者をつれ帰る。有村君も帰った。

十二月二十二日 晴天 刑務所出発

午前七時出発、五貴里、小行里、通專里、板橋鎮通過す。

午後五時三十分頃、江寧鎮に着いて宿営す。

今度第二回目の補充兵来る。分隊に宮脇、岡元、中小路、園田、四名、今皆んなで九名で有る。

十二月二十三日 雨天 江寧鎮出発

午前七時出発、古銅井鎮通過、今日は雪雨が降りだして誠に寒い。太平府より二千米程の地点にて分隊の車が悪路の為通行せず、夜がへったので直ぐ近くの部落に宿る。全部で七名。

山上、玉代勢、前蘭、自分、平田、分隊長、比加、七名、部隊は目的地太平府迄前進す。



楊行鎮附近の臨時野戦病院 (佐藤振壽撮影)

歩兵第四十五聯隊第二中隊陣中日誌

昭和十二年十二月十日（二十二日）

竹下部隊橋口隊

昭和十二年

十二月十日 天候 晴

一、午前五時半首山陣地ヲ撤シ水口附近ニ於テ大隊主力ニ合ス。
二、鉄心橋南方ニ於テ師団直轄トナリ、鉄心橋―西善橋道ヲ小米行ニ向ヒ前進、小米行南方ニ停止ス。敵砲彈ハ約千米前方ニ盛ニ落下ス。

一、車両部隊掩護タル上村小隊午後五時復帰セリ。
二、本夜小米行南方高地ニ於テ警戒待期セリ。

山部作命第一〇四号 山本部隊命令ノ要旨
一、当面ノ敵ハ南京城南側地区ヲ占領シアリ。師団ハ一挙南京城ヲ攻略ス。

二、兩翼隊ハ朱家宮南門ヲ連ヌル線以西ノ地区ヨリ南京城西南側及西側ニ向ヒ攻撃ス。

三、大隊ハ師団予備隊トナリ鉄心橋―西善橋―小米行道ヲ先ツ小米行ニ向ヒ前進セントス。

一、午前中兵器ノ手入ヲナス。

早朝ヨリ第一線ニハ銃砲声絶間ナシ。

一、午前八時上村小隊ヲシテ師団戰團司令所設置作業ニ従事セシメ午前十時三十分終了帰隊セリ。

一、師団給水班援助トシテ派遣中ノ池田上等兵以下八名中隊に復帰セリ。

一、現役歩兵一等兵 鎌田季典

右ハ盲腸炎ニテ小米行第六師団野戰病院へ入院セシム。

一、午後九時山下伍長以下二〇名ヲ西善橋師団糧秣集積所警戒ノ為同地ニ派遣、赤星主計少尉ノ指示ヲ受ケシム。

中隊人員 一、中隊長以下一九二名。

十二月十二日 天候 晴

一、午前中小米行南方高地ニ待機ス。

一、木場小隊ハ第六師団徵發隊掩護トシテ午前十時現在地出發、午後六時西宮村附近ニ於テ中隊主力ニ合ス。

一、中隊主力ハ午後二時三十分現在地出發、安徳門ニ向ヒ前進シ、同地附近ニ待機、夜ヲ徹ス。

大隊ハ同地ニ於テ歩兵第三六旅団長ノ指揮下ニ入ル。

一、西宮村西南側附近ニ於テ左ノモノ負傷セリ。

時刻	負傷ノ状況	階級	氏名
午後六時	右大腿軟部盲管銃創	予・一	中園 藤蔵
午後一〇時	左前膊擦過傷	予・一	玉利 種光

諸隊ハ午後〇時五十分迄汪家街北端ヲ先頭トシ左記行軍序列ヲ以テ途上從隊ニ集合スヘシ。

2 (1/3 欠) 1/4 MG……尖兵中隊―200m―4……以下略ス

一、師団長注意

1、重要点ヲ占領セハ国旗ヲ掲クルト共ニ小部隊ヲ残置スルコト。

2、採暖及戰鬪上必要ノ外放火ヲ嚴禁ス。

3、外国ノ旗ヲ立テアル場所ニ立入ラサルコト。

4、化学実験隊、野戰防疫隊、掃蕩隊ト共ニ城内ニ入ルヲ以テ、其指示ニ依リ水・飲食物ヲ使用スルコト。

5、日本大使館ニ至リシ者ハ之ヲ安全ニ保護スルコト。

城ノ西北側ハ外国ノ大使館多キヲ以テ注意スルコト。

中隊人員 一、中隊長以下一九三名。

十二月十一日 天候 晴 於小米行南方高地

一、依然師団予備隊トシテ小米行南方高地ニ待機ス。

中隊人員 一、中隊長以下一九〇名。

十二月十三日 天候 晴

一、大隊ハ聯隊主力ニ復帰スヘク正午西宮村出發、水西門ヲ經テ下関ニ向ヒ前進ス。

水西門北側地区ニハ未タ敗殘兵アリテ我ニ向ヒ手榴彈ヲ投擲ス。捕獲射殺セリ。

午後七時炎帝巷着、聯隊長ノ指揮下ニ入り同地ニ露營、主トシテ露營地ノ南方及東方ノ警戒ヲ担任セリ。

一、露營地ニ於ケル勤務員左ノ如シ。

部隊日直將校 上村 少尉

部隊衛兵 野島 伍長 以下九名。

中隊人員 一、中隊長以下一九〇名。

十二月十四日

一、下関及獅子山砲台附近ノ敵ヲ攻撃スヘク午前八時炎帝巷出發北進ス。大隊ハ聯隊ノ右第一線トナリ先ツ炎帝巷東西ノ線ニ攻撃ヲ準備セリ。中隊ハ上村小隊ヲ大隊ノ右第一線ニ、中隊主力ハ大隊予備隊トナリ第三中隊ノ後方ヲ前進ス。

午前十時三十分頃下関南側附近ニ到着セハ敵ハ既ニ敗退セリ。敵ノ軍馬十数頭ヲ捕獲セリ。

午後一時下関出發。上河鎮ニ向ヒ前進、同地ニ露營、附近ノ警戒ニ任セリ。

一、宿營地ニハ二、三〇〇ノ避難民アリテ、之カ取締ヲ嚴ニシ、特ニ軍紀風紀ノ維持ニ勉ム。

一、予備役歩兵伍長 猪田富男 以下十三名
右ハ追送品掩護ノ為歩兵第三六旅団ヘ派遣中ノ処、上河鎮ニ於テ中隊ニ復帰セリ。

予備役歩兵上等兵 鳥越勇吉
現役歩兵上等兵 西森 栄

一等兵 中園清盛

右ハ戦傷患者トシテ入院中ノ所十二月十二日東善橋第六師団第一野戦病院ヲ退院、上河鎮ニ於テ中隊ニ復帰セリ。

一、赤石伍長以下二〇名聯隊本部直接警戒シテ午後六時ヨリ服務セリ。

一、上河鎮ニ於ケル中隊ノ警戒担任左ノ如シ。

第二中隊警戒配備要図(略) 於 上河鎮

備考 1、下士哨ノ人員 哨長以下八名トス。

2、第一小隊ハ宿营地ノ東方、第二小隊ハ南方、第三小隊

ハ西方及北方ノ警戒ヲ担任シ、下士哨一組ヲ以テ警戒シ、且敵襲ニ際シ直ニ応シ得ル如ク常時各々二ヶ分隊ヲ

宿舎ニ待機セシメ置クモノトス。

一、宿営ニ当リ中隊長ノ注意事項

1、火災予防ニ勉ムルコト。

2、不慮ノ危害予防ニ注意スルコト。

3、警戒勤務ヲ確実ナラシムルコト。

4、特ニ土民ニ注意シ避難民ニ紛レ敗残兵等ノ出没ニ敵ニ注意スルヲ要ス。

5、軍紀風紀ノ維持ニ勉ムルコト。

6、許可ナキ物品並食物類ノ徴発ヲ禁ス。

7、衛生ニ注意スルコト。

特ニ廁所設置、暴飲、暴食、入浴等。

8、兵器、被服ノ手入及整備ニ勉ムルコト。

9、死人ニ対シ手ヲフレサルコト。

10、避難民ノ家屋ニ立入ラサルコト。

一、橋口隊日課時限左ノ如シ。

◎備考

一、宿営間内務ノ主眼

イ、火災予防

ロ、危害予防

ハ、内務起居ノ厳正

ニ、軍紀風紀ノ維持

ハ、諸勤務ノ確実ナル履行

ト、服装態度ノ厳正

チ、敬礼ノ厳格

リ、衛生

中隊人員 一、中隊長以下一九三名。

十二月十五日 天候 晴 於上河鎮

一、午前中陣地ノ補強並兵器被服ノ手入。

一、斎藤少尉ハ二ヶ分隊ヲ以テ中隊警戒区域内部落ノ掃蕩ヲ実施セシム。若干ノ彈藥類ヲ発見セルノ外他ニ異状ナシ。

一、木場少尉ハ本十五日巡察將校トシテ服務セリ。

一、予備役歩兵上等兵 有村俊雄

右ハ遺骨還送ノ為内地ヘ派遣中ノ所正午無事帰隊セリ。

山部作命第一一二号 上河鎮露営司令官命令要旨

一、南京城内ノ掃蕩ハ其大部ヲ終レル如クナルモ南京城内外ニハ尚相当多数ノ敗残兵散在シアリ。

二、竹下部隊本部、山本部隊(一欠)、R i A、T i A、補充要員部隊ハ本十五日以後上河鎮ニ露営シ附近ノ掃蕩ヲ行ハントス。

三、各隊ハ別ニ指示スル所ニ從ヒ各々担任区域ノ警戒ニ任スヘシ。

四、竹下部隊本部直接警戒ノタメ小銃二分隊ヲ左記ノ如ク差出スヘシ。

中隊ハ 十二月十七日 同二十日

五、巡察將校トシテ十二月十五日木場少尉トス。

六、対空監視ハ各隊警戒ノ歩哨之ヲ兼ヌルモノトス。

七、対空射撃部隊

中隊ハ 十二月十五日 同十八日 兵力一小隊

八、諸勤務ノ交代ハ毎日午後一時トス。

九、各本部、各隊宿营地ノ直接警戒ハ各本部及隊毎ニ実施スヘシ。

一〇、緊急集合場ハ山本部隊本部南側畑地トス。

一一、給養ハ大行李糧秣ニ依ルヘシ。

以下略ス

一、会報事項

(一) 從來戦闘行動ノ急激ナルト給養ノ不足トハ止ムヲ得ス軍紀風

紀ノ緊肅ニ関シ充分ナル監督ヲ欠キタル為現今注意ヲ促ス事項少カラス、折角師団ノ功績ヲ益々光輝アラシムル為更ニ幹部ノ監督ヲ倍シ特ニ左ノ件ニ注意スルヲ要ス。

1、敬礼ヲ厳格ニスルコト。

中隊人員 一、中隊長以下一九四名。

十二月十六日 天候 晴 於上河鎮

一、上村少尉ハ各小隊ヨリ二ヶ分隊ヲ以テ一小隊ヲ編成指揮シ正午出発、宿营地南方部落ノ掃蕩ヲ実施セシム。

若干ノ小銃彈等発見セルモ別ニ異状ヲ認メス、午後四時二十分帰隊セリ。

一、斎藤少尉ハ本十六日部隊日直將校トシテ服務セリ。

一、左記ノ者第二次補充要員トシテ入隊セリ。(次頁表参照)

一、予備役上等兵 姥 喜 一

一等兵 同 大 渡 穂 積

右、中隊指揮班ヘ編成替ヲ命ス。

一、給養。糧秣四日分、酒一樽、煙草各人二個ヲ受領分配ス。

役種	階級	氏名	役種	階級	氏名
予備役	上等兵	西村誠之助	予備兵	一等兵	志々目清美
同	同	水流安徳	同	同	前原諦藏
同	同	福山正雄	同	同	村山清則
同	同	長野清一	同	同	西郷一
同	同	中島辰雄	同	同	久保金蔵
同	同	原田時雄	現役	一等兵	淵上満州美
同	同	今村宰三	後備役	一等兵	大小田平治
同	同	三島正武			以上十六名
同	同	山衛守鉄次			

備考・水流上等兵ハ去ル十二月十三日深水ニ於テ入院セシタメ入院セス。

中隊人員 一、中隊長以下二〇九名（本日補充入隊人員十五名外二入院一名）。

十二月十七日 天候 晴 於上河鎮

一、南京城内中山路ニ於テ入城式挙行サレ、中隊ヨリ上村少尉以下四〇名参列セリ。

一、本日ノ勤務員左ノ如シ。

- 1、聯隊本部直接警戒 第二小隊竹下伍長以下二〇名
- 2、部隊衛兵 第一小隊猪目伍長以下九名

中隊人員 一、中隊長以下二〇九名。

十二月十八日 天候 晴 寒気強シ 於上河鎮

一、午後二時ヨリ南京明故宮南側飛行場ニ於テ慰靈祭ヲ実施セラ

中隊人員 中隊長以下二〇九名。

十二月二十日 天候 晴 於上河鎮

一、午前中各小隊毎ニ兵器検査ヲ実施セリ。

革具類ノ補修ヲ要スルモノアリ、直ニ装工兵ヲシテ修理ヲ実施セシム。

一、午前七時邊木園軍曹以下十六名新警備地区設営ノタメ先発ス。

一、午前十時ヨリ江東門附近ニ於テ聯隊戦病死者ノ告別式ヲ施行セラレ、中隊長及各階級ノ代表者参列セリ。

一、第一小隊 予備役歩兵上等兵 長 野 清 一

右脳脊髄膜炎ノ疑ニテ本二十日正午南京城内第六師団第一野戦病院へ入院セシム。

一、予備役歩兵上等兵 水流 安 徳

右ハ中隊編入前十二月十三日深水横山野戦予備病院へ入院、十二月十九日南京城内野戦予備病院へ転送、本二十日退院、中隊へ帰隊セリ。

一、本二十日午後五時故陸軍歩兵伍長石原清介ノ遺骨ヲ南京城内第六師団第一野戦病院ヨリ受領、中隊ニ安置セリ。

右石原伍長ハ十二月九日牛首山附近ノ戦闘ニ於テ負傷、東善橋第六師団第一野戦病院ニテ十二月十二日死亡セシモノナリ。

一、上村少尉ハ本二十日巡察將校ニ服務セリ。

一、第二小隊宮脇上等兵以下九名部隊衛兵ニ服務セリ。

一、給養・加給品、日本酒一斗ヲ受領分配ス。

中隊人員 中隊長以下二〇九名。

ル。

中隊ハ之カ参列ノタメ中隊長以下八十名午前九時宿营地出発、宿营地東端附近ニ於テ聯隊行軍序列ニ入り式ニ参列、冷寒厳シキ飛行場中央ニ於テ、陸海軍隊整列、極メテ莊嚴裡ニ施行セラレタリ。

午後四時三十分帰隊ス。

一、歩兵軍曹 塚 元 光 義

右第六師団兵器部附ヲ命セラレ本十八日午後七時出発セリ。

一、歩兵軍曹 邊木園 正

右中隊給与係ヲ命ス。

一、歩兵軍曹 堀之内 高 敬

右第三小隊連絡係下士官ヲ命ス。

中隊人員 中隊長以下二〇八名。（塚元軍曹減）

十二月十九日 天候 晴 於上河鎮

一、午前中武器被服ノ手入れ及各小隊毎ニ宿舎内ノ清潔整頓並内務教育ヲ実施セシメ軍紀ノ緊肅ニ勉メタリ。

一、歩兵少尉 木 場 巳之助

右本十九日部隊日直將校トシテ服務セリ。

一、第三小隊西久保伍長以下二〇名聯隊本部直接警戒トシテ服務セリ。

一、予備役歩兵上等兵 久 保 進

右ハ戦傷患者トシテ南京城内野戦予備病院へ入院中ノ処、本十九日退院セリ。

十二月二十一日 天候 晴 於上河鎮

一、午前六時中隊ハ全員宿舎前ニ整列シ故石原伍長ノ遺骨ヲ送ル。

一、予備役上等兵 上 野 信 一

右故石原伍長遺骨宰領者トシテ午前七時出発内地港湾へ出張セシム。

一、午前十時初年兵上等兵進級者ノ銓衡ヲ行ヒ之ヲ上申ス。

一、午后出発準備ヲ整ヘ分隊長以上ノ幹部ヲ集メ左記聯隊長ノ注意事項ヲ伝達セリ。

一、聯隊長注意

1、幹部ハ事前ノ準備ト計画ヲ周到ニシ且ツ懇切ナル兵ノ指導ニ勉ムルコト。

2、万事業務ハ典範令ニ準拠スルコト。

3、部下ノ掌握ト部下ノ指導ヲ励行スルコト。

4、敬礼ノ厳正ナルコト。

5、実行報告ノ確実ナルコト。

6、補充員ニ対スル軍紀教育並學術科ノ教育ヲ実施スルコト。

一、第一小隊ヨリ山下伍長以下二〇名聯隊本部直接警戒トシテ服務セリ。

一、給養・乾パン三食、携帯缶詰四五個、酒三升、煙草二三〇個ヲ受領セリ。

中隊人員 中隊長以下二〇八名。

十二月二十二日 天候 晴 行軍

一、新警備地区へ移動ノタメ午前七時上河鎮西端出発、南京城南門東側附近ニ於テ聯隊主力ノ行軍序列ニ入り南進、午後四時三十分

孫家宮着同地ニ宿営ス。

一、露宮地警戒ノ為左ノ如ク服務セリ。

部隊日直將校

斎藤 少尉

部隊衛兵

元伍長以下九名

中隊人員

中隊長以下二〇八名。



難民区にて（佐藤振壽撮影）

歩兵第四十七聯隊第二中隊陣中日誌

昭和十二年

十二月十日 晴天

一、〇六・三〇出發 太平庄西端ヲ先頭トシテ集合シ東善橋ヲ經テ吏家井ニ向ヒ前進ス。一二・〇〇、二牌宮ニ於テ師団主力ニ追及シ旅団長ノ指揮ニ入り左記命令ニ基キ愈々南京攻撃ノ第一線トナル。

二、一三・〇〇、左記大隊命令ヲ下達セラル。

三、大隊ハ本隊トシテ先ツ双糖趙ニ至リ、次テ四顆松附近ニ前進シ聯隊予備隊トナリ、終夜銃声ヲ聞キツツ砲彈落下ノ中ニ在リテ待機ス。

I 作命一三四号第一大隊命令

十二月十日 一三・〇〇

於 二牌宮

一、当面ノ敵ノ警戒陣地ハ余家凹北側附近台地ヨリ花園村附近ニ亘ルモノノ如ク、其後方揚家凹大土庵ノ線ニハ敵ノ内部防衛線アルモノノ如シ

師団ハ鉄心橋以西ノ地区ニ重点ヲ保持シ南京城ヲ攻撃ス 旅団ハ師団ノ右翼隊トナリ敵ノ警戒陣地ヲ攻撃シタル後、徐家凹ヨリ金壯□ニ亘ル間ニ展開シ、安德門附近ニ進出シ敵ノ内部防衛線及

南京城壁ノ攻撃ヲ準備ス

聯隊（I 欠、5 欠、独立 MG、3 中、工兵一小隊ヲ附ス）ハ旅団ノ左第一線トシテ北部花園村ヨリ金壯□ニ亘ル間ニ展開スル目的ヲ以テ二牌宮―診家凹附近ノ凹ヲ經テ双糖趙南側地区ニ向ヒ前進ス Ⅲ（10、11 欠）ハ前衛

二、大隊ハ□□トナリ前進セントス

三、4 中、戸上小隊ハ本隊ノ右翼高地稜線上ヲ前進シ、特ニ聯隊ノ右側ヲ警戒スヘシ

四、2 中広瀬少尉ハ聯隊車輛部隊ノ掩護ニ任スヘシ 又車輛部隊ハ R i A 長ノ指揮ヲ以テ前進スヘシ

五、行李ハ聯隊行李長ノ指揮ヲ以テ鉄心橋南端ニ停止シ集結スヘシ 爾後ノ前進ハ別命ス

六、（略）

七、余ハ大隊ノ先頭ニ在リテ前進ス

I 長

緒方中佐

I 作命、一三五号第一大隊命令

十二月十日 一八・〇〇

於 四顆松東方院內

一、当面ノ敵ハ四顆松北方高地ニ銃眼及一線ノ鉄条網ヲ廻セル陣地ヲ占領シアリ

第十三聯隊ハ四顆松東方寺院東側台地ニ於テ北方ニ向ヒ攻撃中、又第二十三聯隊ハ四顆松附近ニ於テ攻撃中ナリ

聯隊ハ兩聯隊ノ中間ニ展開シ、寺院北側稜線方向ヨリ安德門ニ向ヒ攻撃ス Ⅲ (T i A 属ス) ハ第一線。

二、第一大隊ハ聯隊予備隊トス 依然現地附近ニ位置シ爾後第一線ノ前進ニ伴ヒ逐次躍進セントス

三、余ハ四顆松東側寺院ニ在リ

四、(略)

五、第三大隊ハ第一線トシテ全面ノ敵ヲ攻撃中ナリ

Ⅰ長

緒方中佐

下達法 命令受領者ヲ集メ口達筆記セシム

十二月十一日 晴天 田上南方高地

一、敵ハ昨夜来頑強ニ抵抗シ銃砲声ハ終夜止マス、天明後モ敵ノ砲撃シクシテ我中隊至近ノ距離ニモ炸裂セシモ損害ナシ。

二、聯隊砲掩護タリシ広瀬小隊〇九・〇〇中隊長ノ指揮ニ復ス。

三、中隊ハ依然四顆松ニ於テ予備隊トシテ前進ノ機ヲ待ツ。

四、一五・〇〇頃第一線ノ戦闘進捗シ敵ハ南京城方面ニ退却セルモノノ如シ。

五、大隊ハ聯隊ノ左第一線ヲ命セラレ一七・二〇四顆松出発、四顆松―安德門、安德門東方稜線ヲ経テ密上南方高地ニ前進ス。

六、一八・二〇頃第一線タル第三小隊ハ密上東方ニ於テ敵ト遭遇シ交戦ス。

七、中隊ハ大隊予備トナリ本道上部落南端附近ニ陣地ヲ構築シ終夜警戒ヲナス。敵砲弾ハ頻リニ我中隊附近ニ炸裂セリ。

占領セントス

三、3中(1/4 M G 配属)ハ逐次前面ノ敵ヲ駆逐シ、聯隊突撃口ノ開設ヲ待ツテ城壁ニ突進シ、大沙埧東南端ニ亘ル間ノ城壁ヲ占領スヘシ

四、M G (1/4 欠)、独機、B i A 八畝上南側高地ニ陣地ヲ占領シ、主トシテ第三中隊ノ攻撃ニ協力スヘシ

五、爾余ハ予備隊吉田大尉ノ区署ヲ以テ三中隊ノ後方ヲ前進シ「クリーク」南岸ニ集結スヘシ

六、2中、4中ヨリ補助担架兵各五名ヲ即刻大隊本部ニ差出スヘシ服装ハ其俣トス

七、余ハ第三中隊ノ後方ヲ予備隊ノ前方ニ在リテ前進ス

Ⅰ長 緒方中佐

下達法 各隊命令受領者ヲ集メ口達筆記セシム

一、〇九・〇〇前記命令ヲ受領ス。依然中隊ハ大隊予備隊ナリ。

二、〇九・三〇前進ノ命ヲ受ケ中隊長ハ第四中隊ヲ合セ指揮シ大隊本部ノ位置ニ前進ス。前進開始ト同時敵砲兵ノ集中射ヲ受ケタルヲ以テ、敵ノ構築セル交通壕ヲ利用シテ前進ス。損害ナシ。

三、一一・〇〇中隊ハ右第一線トナリ第三中隊ノ右ニ増加シ、右前方ノ兵營及部落ヲ掃蕩シ、部落南端大ナル建物(後師範学校ト知ル)迄前進シ第三中隊ト連絡シ、前面ノ敵情及「クリーク」ノ状態ヲ偵察、而シテ同地ヨリノ前進ハ後命ヲ待ツヘキ命令ヲ受ク。依テ直ニ第一小隊ヲ第一線トシ、兵營及部落西端ヲ掃蕩シツツ師範学校迄前進シ、敵情地形ヲ搜索スヘキヲ命シ、第二小隊ヲシテ

第一小隊ノ右ニ連繫シテ掃蕩セシメ、第三小隊ヲ予備隊トシテ前進ス。

八、二〇・〇〇中畑伍長以下六名、大隊命令ニ依リ南門前ノ橋梁ノ状況及其附近ノ敵情搜索斥候トシテ出発ス。斥候ハ途中敵ト遭遇シ之ヲ撃退、内一名捕虜トス。翌十二日〇二・〇〇帰隊ス。敵ハ前方部落ニ依リ頑強ニ抵抗シ南門迄ノ前進困難ナルヲ知りタリ。其人名左ノ如シ。

伍長 中畑初美

上等兵 高木勝之助

同 熊井一夫

同 川辺藤一

一等兵 高山桂馬

同 須原初男

十二月十二日 晴天 南京城

Ⅰ作命一三七号第一大隊命令 十二月十二日 〇八・三〇

於 密上南方高地

一、当面ノ敵情ハ目撃スル通り

第十三聯隊及第三十六旅団ハ聯隊ト概ネ同線ニ進出セリ

師団野砲ハ聯隊ノタメ南門ト西南角中間城壁ニ九時頃ヨリ概ネ二時間ノ予定ヲ以テ突撃口ヲ開設ス(以下聯隊突撃口ト称ス)

聯隊ハ逐次前面ノ敵ヲ駆逐シ、聯隊突撃口ヲ突進シ城壁ヲ占領ス 第三大隊ハ三里店東北側部落ニ前進シ、主トシテ第一大隊ノ城壁占領ヲ容易ナラシメ突撃中隊ニ続テ一ヶ中隊ヲ城壁ニ前進セシメ残余ハ「クリーク」南岸ニ終結スル筈

二、大隊ハ三里店西北側村落方向ヨリ聯隊突撃口ヲ突進シ、城壁ヲ

進ス。

四、途中更ニ第二中隊ハ梯子ヲ作製シ、第三中隊ニ「クリーク」渡河及城壁攀登ヲ援助スヘキ大隊命令ヲ受ケタルヲ以テ、第三小隊長ニ梯子ノ作製ヲ命ス。第三小隊長ハ梯子二個(約四米及約六米)ヲ作製携行ス。

五、第一小隊ハ機敏ニ師範学校ニ進出シ「クリーク」南岸地区ヲ退却中ノ敵ヲ猛射シ之ヲ殲滅セリ。

六、湯浅准尉ハ第一小隊ト連絡シ、右情況及工兵小隊長ヨリ前方「クリーク」ニハ水ナキ旨ヲ承知シ、之ヲ直ニ中隊長ニ報告シ、中隊長ハ速ニ前進スヘキ意見ヲ具申セルヲ以テ、中隊長ハ第二、第三小隊ニ速ニ師範学校ニ前進スヘキヲ命シ、且右諸情況ヲ大隊長ニ報告セシメ、第一小隊長ノ位置ニ前進ス。

七、当時竹原少尉以下第一小隊ノ將兵ハ前進ノ氣勢充溢シアリタルモ、大隊命令モアリ且友軍砲兵射撃中ニシテ破壊口モ完成シアラサルヲ以テ暴進スヘキニアラスト判断シ、大声叱咤第一小隊ニ停止ヲ命ジ、各小隊ニ背姿ヲ却シ器具及飯盒を携行セシメ前進準備ヲ整ヘシム。

八、暫シテ前方城壁下ニ友軍ノ斥候数名前進、城壁ニ梯子ヲ立テ掛ケツツアルヲ目撃セルヲ以テ、該情況ヲ大隊長ニ報告シ、大隊本部モ速ニ前進セララル様意見ヲ具申ス。

九、師範学校ニ階ニ於テ前面ノ情況ヲ大隊長ニ報告シアル時、第三中隊ノ斥候兵ハ逐次梯子ヲ登リ始メタルヲ以テ、大隊長ハ中隊ニ前進ヲ命セラル。

一〇、中隊長ハ直ニ第三小隊長ニ梯子ヲ以テ前進シ第三中隊ニ渡スヘク命シ、且中隊全員ニ前進ヲ命ス。満ヲ持シテ待機セル中隊長ハ決

河ノ勢ヲ以テ城壁目カケテ勇躍ス。「クリーク」南岸ニ前進シ先刻工兵小隊長ノ通報トハ異リ城壁南側「クリーク」ハ水深ク渡河不能ナリ。

一、一・二・三〇第三中隊ノ斥候城壁上ニ登レリ。其ノ主力ハ中隊ノ左ニ前進シアリテ一部ハ渡河中ナルモ、城壁西南角「クリーク」西側部落ヨリ側射セラレ、渡河極メテ困難ニシテ城壁下ニ在ル者亦頗ル危険ニ瀕シアリ。

二、茲ニ於テ第一小隊ヲ第三中隊主力ノ左側ニ出シ、此ノ敵ヲ射撃セシメ且ツ擲弾筒ヲ以テ煙幕ヲ構成セシム。

三、第三小隊長、広瀬少尉ハ「クリーク」南岸ニ進出スルヤ、梯子ヲ前岸ニ渡スヘク身ヲ挺シテ「クリーク」ニ跳ヒ込ミ拔手ヲ切ツテ泳ケハ、間髪ヲ入レス加藤上等兵及二宮伍長ノ指揮スル五名各挺子一宛持ツテ「クリーク」ニ跳ヒ込ミ泳キ渡ル。着装ノ尽ニテ泳行ハ極メテ困難且敵ノ側射ハ益々激シク、加藤上等兵先ツ胸部貫通銃創ヲ受ケ河中ニ沈ミ、広瀬少尉辛シテ対岸ニ泳キ渡リ二宮分隊ニモ負傷者及溺レントスルモノ続出シ、之ヲ救ハントシテ河中ニ跳ヒ込ミタル中畑伍長又重傷ヲ負フ等惨状目モ当テラレス、之ヲ目撃シタル一等兵浜野行利ハ素裸トナリ河中ニ跳ヒ込ミ中畑伍長、阿南一等兵ヲ救出ス。

梯子ヲ運フ為メ「クリーク」ニ跳ヒ込ミタル者左ノ如シ。

少尉 広瀬憲二郎
上等兵 加藤正龜
伍長 二宮金蔵
上等兵 竹本 満
一等兵 羽田野 明

同 工藤 直
同 大城武司
同 阿南五月
負傷者及溺水者救助ノタメ「クリーク」ニ跳ヒ込ミタル者左ノ如シ。

伍長 中畑初美
一等兵 浜野行利
同 後藤鶴見

四、第三中隊ハ舟ニヨリ逐次渡河シツツアルモ敵ノ射撃ヲ受ケ負傷者続出シ、城壁上ニ在ル者敵ノ逆襲ヲ受ケツツアリ。此ノ時第三中隊ヨリ輕機二銃ヲ先ツ渡河セシメ協力方ヲ申来タルヲ以テ、第三小隊ノ輕機分隊ヲ渡河セシメ小隊長ノ指揮ニ入ラシム（第六分隊ハ遠ク離レテ側方ニ在リテ間ニ合ハス第五分隊ノミ渡河ス）。

五、敵ノ側射ハ益々激シク渡河困難ナル状況ニアリ、中隊ハ城壁西南角「クリーク」西側部落ノ敵ヲ「クリーク」ニ沿ヒ攻撃スヘキ命ヲ受ケタルモ、既ニ第四中隊攻撃中ニシテ地域ナキヲ以テ意見ヲ具申シ、依然第一小隊ヲシテ射撃セシメ主力ハ「クリーク」南岸ニ位置ス。

六、城壁ヲ占領セル第三中隊ノ一部ハ敵ノ逆襲ヲ受ケ状況極メテ不利ナリ。大隊主力ハ「クリーク」南岸城壁ヨリ瞰制サルル位置ニ在リシヲ以テ、中隊長ハ直ニ各小隊ニ台上ヲ占領セシメ、陣地ヲ構築シテ城壁上ノ友軍ヲ救援スヘキ配置ニ就カシム。

一七、斯シアル時更ニ左方ノ敵ヲ攻撃スヘキ命ヲ受ケタルヲ以テ、第一小隊ヲ左第一線、第二小隊ヲ右第一線トシテ攻撃前進セシメ

タルモ、左ニハ歩兵第二十三聯隊攻撃前進中ニシテ部落ヨリ以西ニ進出セサル様通報アリ、且第四中隊モ部落西端ニ進出シアルシヲ以テ、第二小隊ヲ部落東北端附近ニ、第一小隊ヲ部落西北端附近ニ展開、城壁上及側防ノ敵ヲ射撃セシメ、第三小隊ヲ予備隊トシテ中央ニ位置セシム。

一八、広瀬少尉以下五名（LG一ヲ含ム）ハ城壁下ニ於テ梯子ヲ接キ合セ、先ツ第三中隊ノ立テタル梯子ノ東方ニ之ヲ立テ、一三・一〇城壁上ニ登リ井上少尉ノ指揮スル部隊ニ連繫シテ掩体ヲ作り、城壁上東方ヨリスル数度ノ逆襲ニ対シ克ク之ヲ支ヘ、敵約三〇名ヲ斃シテ同地ヲ確保ス。

其人名左ノ如シ

少尉 広瀬憲二郎
上等兵 吉原尚一
同 堤 米一
一等兵 谷口龜夫
同 永野 勇

一九、一三・〇〇過、器具ヲ第三中隊ニ貸与スヘキ命ヲ受ケ、左記員數ヲ城壁下ニ於テ第三中隊江畑伍長ニ引渡サシム。

左記

小円匙 二五、 小十字鍬 四

二〇、次テ彈藥ヲ第三中隊ニ融通スヘク命セラレ左記員數ヲ中西軍曹ヲシテ城壁下ニ於テ第三中隊江畑伍長ニ引渡サシム。

左記

三八式小銃実包 一、〇〇〇発

二一、次テ一ケ小隊ヲ以テ土塼作製スヘキ命ヲ受ケ、第一小隊ヲシ

テ城壁下ニ於テ作製セシメタルモ、吊上困難ニ付該小隊ハ城壁上ニ上リ土塼六個ヲ作製ス。城壁上ニハ土少ナリ且敵ノ射撃ヲ受ケ作製困難ナルヲ以テ、城壁ヲ崩シ第三中隊ノ左ニ連繫シ掩体ヲ構築ス。

二二、中隊ハ一時渡河点南方台地ニ在リテ四周ニ対シ警戒スヘキ命ヲ受ケ、工事実施中更ニ渡河命令ヲ受ケ直ニ渡河ス。

大隊命令 一三八

十二月十二日 一八・四五
於 南京城壁下

一、大隊（第一中隊ヲ復歸セラル）ハ本夜南門以西ノ城壁上ヲ占領シ至敵ナル警戒ノモトニ夜ヲ徹セントス

二、4中（1/4 MG属ス）ハ城壁昇口ヨリ右ヲ城内及南門方向ニ対シ陣地ヲ占領シ、逐次南門方向ニ対シ陣地ヲ拡張スヘシ

2中（1/4 MG属ス）ハ第三中隊ト交代、昇口ヨリ左ヲ占領シ、逐次陣地ヲ拡張、第二十三聯隊ノ右部隊ニ連繫シ城内及城壁西南角方向ニ対シ陣地ヲ占領スヘシ

MG主力ハ大隊ノ右附近ニ位置シ、城内ニ対シ射撃準備

Bi Aハ大隊ノ左ニ陣地ヲ占領シ城内ニ対シ射撃準備

3中ハ予備隊、戦死者負傷者ノ処置ヲナシ炊事ヲ終了後大隊ノ左ニ位置スヘシ

1中ハ予備隊、「クリーク」ノ向フ側ニ位置シ、何時ニモ昇リ得ル如ク又敗殘兵ニ対シ不覺ヲ取ラサル如ク陣地ヲ占領スヘシ

三、余ハ城壁上、昇口附近ニ在リ

I長 緒方中佐

下達法 各隊命令受領者ヲ集メ口達筆記セシム